

---

# インフィニット・ストラトス 機鋼英雄伝

秋永

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 機鋼英雄伝

### 【Nコード】

N8319Q

### 【作者名】

秋永

### 【あらすじ】

『インフィニット・ストラトス 通称IS』 女性しか扱えないそれにより、空は女性のモノとなっていた。だが、宇宙 ソラは違った。これは、ソラで闘っていた男が、とある任務により、地上に降りて来た話。世界は、『実験室のフラスコ』なのか、それとも…… 第二次Z決定記念作品 参戦作品は、作者とその友人により選抜されました。現在も、参戦機体選抜中。感想にて受付開始。

## エピソード 狂人達の語らい（前書き）

はい、この作品は、ロボット大好き秋永と、スパロボ好きな友人の話により生まれた、スパロボの二次創作です。

ご都合主義や、中二病が許容できない方は、ブラウザバックか戻るか、電源ボタンを押してください。

それでは、『機鋼英雄伝』……………はっじまるよ～～（テンション可笑い

## エピソード 狂人達の語らい

20XX年

世界には、『篠ノ之 束』により宇宙開発を目的とした、マルチフォームスーツ『インフィニット・ストラトス（通称IS）』が存在した。

だが、ISは女性にしか扱えない欠点があった。本来の目的で使われるなら、宇宙飛行士は女性にしかねない程の問題にしなければならないだろう……だが、人間は業深い生き物だ。

ダイナマイトを開発したノーベル、飛行機を開発したライト兄弟、E=mc<sup>2</sup>を発表したら核爆弾を開発されたアインシュタイン……彼ら科学者は、己が良かれと思って、人の発展に繋がると思って広めた知恵が、人の悪意によって歪められる世界で、篠ノ之 束が開発したISもまた、世界最強の兵器として君臨している。おまけに、女性にしか扱えないと言う為、男の地位はストップ安……女尊男卑な社会になるのは目に見えていた。

だが、悪意だけが人間ではない……日本政府は、予てより進めていた宇宙開発を推進、月面調査を遂行し、あるモノを発見してしまう。

【通称 メテオ3】

月の裏に存在したそれは、とてつもない技術の塊だった。

慣性制御に、超能力の発現……今まで、あり得ないとされたそれを、日本政府は危険と判断し、早急なる解析と封印を検討したが、脆くも崩れ去った。

【侵略者になりうる連中が、宇宙にはいる】

人間は孤独ではないと知った喜び半分、冷徹なる悪意に震える半分。

日本政府は、逃れ得ぬとある決断を下す。

【侵略者に対抗しうる兵器を開発する】

当時、最強を誇るISでも、メテオ3に記された防御障壁を破れても、装甲には到達出来なかった

故に、世界中に信頼足る機関や企業と連携し、ISの技術を雛形に、独自のマルチフォームスーツ『パーソナルトルーパー（通称PT）』を開発。

男でも扱えるそれを、これ以上世界を混乱させない為に隠蔽……宇宙で迎え撃つことにした。

「いやあ……いつ見ても、人の足掻く様は絵になるなあ……」

「あやつめ……まさか、あんなところに居るとはな。ワシも想定しておったが、何時もワシの邪魔をする。」

「障害のない人生なんて意味ないじゃない……それにしても、今回のフラスコ、なかなか成功かな？」

「ふん、ワシやあ失礼する。」

「ばっははい　アギちゃん」

しわがれた声の老婆は、戦いの映像にあきたのか、はたまた居づらくなったのか、暗い部屋を出ていく。それを、片手間で見送った男は、相変わらず映像を見ている。

「それにしても、笑えるなあ　へえ、見たことのない銃神まで呼び寄せるなんてねえ。　最も、制御は出来なかった……みたいだけどねえ」

映像に映る男は、凶鳥の名に冠する機体が、銀を基調にした鋭角的なフォルムをした悪魔がいた  
銀の悪魔と鋼の戦神は融合し、最後の審判者に引導を渡す

「うつひょ　　かあっこいい　　まあ、彼が代償を払っただけはあるよねえ」

映像を見ていた道化師は、かつて、『黒のカリスマ』と名乗っていた男は世界を嘲笑<sup>わら</sup>う……己の掌で踊る駒達を  
男は嘲笑う……報われない努力をした、漢達<sup>おとこ</sup>を指差して

.....to be continued

## エピソード 狂人達の語らい（後書き）

はじまりからクライマックス？

それが私クオリティ（キリッ

2011/02/26

一部、誤字と脱字を修正。

## 第零話 凶鳥、銃神と成りて地に墮ちゆ（前書き）

初っ端から、デイベインウォーズのラストです。

こうでも言わないと、狂展開過ぎて笑えるんだな、これがな。



## 第零話 凶鳥、銃神と成りて地に墮ちゆ

### L5宙域

イングラム・プリスケン……SRXチームの教官にして、エアロゲイターのスパイ。

R-GUNパワードを持ってエアロゲイターに戻る。

そして、ここL5宙域にてR GUNリヴァールと言う異形の機体で迎え撃つ。

R 1、R 2パワード、R 3パワード達を迎え撃っている。

そんな中、SRXチーム、サブパイロットの『ツバメ・トウゴウ』の駆る銀色のボディに山吹色のラインの機体『ヒュッケバイン009改』は、手持ち火器のフォトンライフルでリヴァールを牽制する。

「っち、流石イングラム教官ってか……こちらの手札を把握してやがる。」

『こうなりや……合体しかないか？』

「早まるなよ、リユウセイ……まだ敵さんを離しきれてない。せめて、奴を念動フィールドの範囲外に離さないとな、ヒリユウ改……ブラックホールキャノンをつ……！」

後方に居た、赤い戦艦から巨大な砲身を持つ何かがち出され、スラスタ―光がこちらに正確に飛んできている事を教えてくれる。網膜に投影された情報が、『ブラックホールキャノン』とヒュッケバインの同期が完了した事を告げ、ヒュッケバインとブラックホールキャノンはドッキングする。

『ほう……ソイツを俺に当てるつもりか?』

「当てるんじゃない……中るんだよ。 T linkシステム、オーバーコンタクト。 ブラックホールエンジン…フルドライブっ!」

『無茶だっ! ブラックホールの出力をそれ以上、上げればお前はっ?!!』

「大丈夫だライ、ブラックホールキャノン……デッドエンド・シュートオッ!!」

構えたブラックホールキャノンを、スラスターと体の捻り、テストドライブを駆使し、風ぎ払うように敵を一掃する。

敵が密集していたL5宙域に、ポツカリとした空洞が生まれる……まるで、天の川にある石炭袋と呼ばれる場所のようだ。

ブラックホールキャノンを撃ち終えたヒュッケバインは、砲身を破棄し、リヴァールに向けて全力で突貫、腰を掴んで全力でテストドライブを噴かす。

『く、初めからこのつもりだったか……』

「言ったる、中るって? リュウセイ、ライ、アヤ中尉っ! 合体するなら今しかないっ!」

『助かったわ、パターンOOCのプロテクト解除、 T link…フルコンタクト、念動フィールド展開っ!』

『トロニウムエンジン、フルドライブっ!』

『いっくぜえ……ヴァリアブルフォーメーションっ!』

R 1、 R 2 パワード、 R 3 パワードは、変形と分離、結合

を繰り返し、一つの巨人に姿を変える。合体し終え、念動フィールドが晴れると、その姿をあらわにする。

『天下無敵のスーパーロボット……ここに見参っ!!』

現れたのは、希望の巨神……天下無敵のスーパーロボット『SRX』。

SRXの登場に反応したのか、敵がワラワラと群がってくる。

『へっ、乱れ撃つぜっ！　テレキネスミサイル、ハイフィンガーランチャー、ガウンジエノサイダーっ!』

SRXから放たれる、大量のミサイル、光線により、雑兵達は蹴散らされていく。

それに安心したのか、ヒュッケバインは事切れたように動かなくなる。

『な、どうしたツバメっ!』

『いや、大丈夫だ、ツバメのヒュッケバインは、強制放熱に入っただけだ。だから今は。』

『ああ、待ってやがれイングラムっ!!』

力を使い果たし、漂流するヒュッケバインを置いていくSRX。ヒュッケバインのツインアイは光を失い、後ろから魔の手が迫るこ

とに気が付かなかった。

どうしたものか？ 声が聞こえて、気が付いたら赤い結晶の中に閉じ込められていた。ワープを皮肉った、『石の中に居る』というジョークも真っ青な状態だ。

センサーでは、近くにSRXも居るようだが、身動きが取れずどうしようもない。

『起きろ、ツバメ。 後はお前だけだ。』

「（ぐっ……くう、いつの間にこんなところに……いつててて。）」

声に導かれ、重い瞼を開ける。 ヒュッケバインの動力炉を制御する為に積まれた、T L i n kシステムの過剰使用により、頭が茹ったように痛い。

少しも、念動力を捻り出せる気がしない。 突如、頭に氷を差し込まれたように鮮明になる。

鋭角的な、悪魔のような造形、肌を突き刺すような存在感。

『アストラナガン』      ギリウム・イエーガーが、存在だけ語った規格外の機体。

それが、今日の前に居た。 こちらを品定めするように、同時に「ま、いいか」と妥協したような態度で近づいてくる。

『最後の審判者を砕く為、貴様の体を借りるぞ……ツバメ。 テトラクテュス・グラマトンっ!』

「待て、待ちやがれイングラムっ?! ちょ、ちょおおお?!」

ボロボロになり、スパークしていたヒュッケバインを、アストラナガンが胸から出た鎖を機体に絡め、取り込む。 中の人大丈夫が心配だが、彼の犠牲に作者は涙を流す事なく執筆作業を再開する。

ツバメのヒュッケバインを取り込んだアストラナガンは、黒い繭となり、凶鳥は姿を変える。

刃が繋がったのような造形の尻尾、背骨が浮き出たような背中、ズッシリとした重厚感溢れる手足。

破壊と創造を司る神の名に冠する銃神『アルダー・アストラナガン』。

終わりと始まりをもたらす銃神が、たった今顕現したのだった。

「（な、なんじゃこりゃ……リアル系のヒュッケバインが、スーパー系みたいに成っちゃったっ?!）」

『手短に説明してやる。 こいつはアストラナガン……平行世界を渡り、因果を守る守護者だ。』

「（抽象的な説明ありがとうございます。 チクショー……やりやいいんだろ、やりやあ!）」

ガン・スレイヴ、セット。 我が敵をを打ち砕けっ!」

> i 1 8 2 7 0 — 2 4 4 9 <

刃が連なった尻尾が別れ、四基の誘導兵器『ガン・スレイヴ』と

なる。

いつまにか迫ってきていた、自身を取り込もうとする赤い結晶を、弾丸代わりの重力線で打ち砕く。

結晶を全て撃ち落とすと、ガンスレイヴ達は元の位置である尻尾に戻る。

「（SRX、止めを……あれ、なんか黒い……）」

「くそっ?! トロニウムエンジンの出力が140%だと、くそ、制御しきれないっ!」

「ライっ! くそっ、言うことを聞けSRX……お前は、地球を守るスーパーロボットだろうっ!」

「（な、SRXが暴走だと……最悪のタイミングで。）」

「く、ユーゼスの介入か……やむ得まいか。ツバメ、SRXと……デイス・アストラナガンと融合したDiSRXと合体し、力を制御するしかない。」

「（なんつう、ベッタベタな展開だ……だが、やるしかないのかよ。えっと）」

アルダー・アストラナガン……パターンABCを発動。 転神……アキシオンバスターキャノンっ!」

アキシオンバスターキャノン  
パターンABC……アルダー・アストラナガンが物理法則を無視しきった変形をし、漆黒と黄金の砲身となる。

「これは……T-link、ツインコンタクトっ! ツバメ、後は任せて。リュウ、トリガーは預けたわっ!」

「よっしゃあっ! くらいやがれ、天下無敵のお……一撃必殺砲っ!」

『『『うおおおおつ!!』』』

アルダー・アストラナガンが変形したアキシオンバスターキャノンから放たれた一撃は、光を飲み込み、ねじ切り、最後の審判者と呼ばれた異形『セプギタン』を跡形も無く押し潰していく。

圧倒的なエネルギーは、着弾点に、限定的に発生した超絶重力圏『グレートアトラクター』を発生させ、セプギタンを締め付けていく。それに続くように、次々と砲撃が発射されていく。

セプギタン内部に作られたグレートアトラクターによる引力により、全ての攻撃は引き寄せられるように命中する。

最後の審判者……セプギタンは、こうして堕ちた。唯一つ、意外な犠牲を出して。

「（ヤバイ……意識が、保ってらんね。ゴメン、後は……頼むわ。）」

DiSRXが、本来のSRXに戻ると、アキシオンバスターキャノンへと姿を変えていた、アルダー・アストラナガンは、本来の姿であるヒュッケバイン009改へと戻る。

ボロボロの二つの戦士の姿は、何処か誇らしげであり、早く救出しないと危険なのが、大変わかりやすかった。

t o b e c o n t i n u e d . . .

## 第零話 凶鳥、銃神と成りて地に堕ちゆ（後書き）

と、いうことで始まりました。『インフィニット・ストラトス  
機鋼英雄伝』。

なんというか、いきなりエピソードで黒幕臭溢れる方々の会話が  
あったり、いきなりアストラナガンを出すような作者さんを、私は  
見たことはありません（玄武剛弾

まあ、そんなこんなで、多分読者も作者も不安要素満点過ぎて、  
コード麒麟を開放しそうですが、それを呑んで頑張って書いて逝こ  
うと思います。



## 第一話 色々と下がる（前書き）

一部、言い回しなど変更。

## 第一話 色々と下がる

side ツバメ

俺の名前は、ツバメ・トウゴウよし、最低限の記憶は大丈夫みただ。

意識を失って、どれくらい経ったのか……分かりはしないが、まずは言つべき事があるかもしれない。

「……知らない天々「眼が覚めたか？」……ウツス。」

ツバメが眼を覚ましたと同時に、ツバメが見知った……否、忘れる筈の無い顔が現れた。

『リシュウ・トウゴウ』 ツバメの師匠にして、養父である。

え？ ツバメは盛大にブラックホールキャノンをぶっ放していただろうだって？

早い話が、格闘技能が高いジューーを、ZZに乘せるようなものだったんだ。

「体の具合はどうじゃ？」

「悪くはないけど、エアロゲイターがどうなったかは知らないよ……なんつつか、赤い結晶に閉じ込められた辺りから記憶がないんだよ。」

「そうか、今はゆっくり休め……エアロゲイターの頭は墜ちた。お前は体を休めて、明日からの修行に備えろ。」

「……はい。」

明日からの修行      自分の、鍛錬不足は否めない。

ヒュッケバインというオーバースペックの機体をまかされ、それでいて無残にも気絶した。

自分が、他のメンバーの足を引っ張ったのだ。      その事実が、俺の胸を締め付ける。

なんだか、体もだるい……今日はもう寝よう。

俺はそう思うと、重い体を倒して、深い眠りに身を委ねる。

おやすみ、『      『      ラウ      は元気だぞ。

side out

Side - リシュウ

「やっと、眠ったか……」

「そのようですね。      まさか、自分の体が縮んだ事も、気づかないままとは……かなり疲労が溜まっているようですね。」

「アレだけの力を引き出したからの、おまけに力を使った記憶も、無意識に封印しておるようじゃし、今は休ませるのが、得策じゃな。」

「

仕込み杖を持った、鋭い眼光秘めた老人『リシュウ・トウゴウ』と、白衣を纏った研究者然とした女性『マリオン・ラドム』が、スペースノア級の宇宙戦艦『クロガネ』にある、メディカルルーム前の廊下で話し合っていた。      今、メディカルルームで寝ている『少

年』の『ツバメ・トウゴウ』は大変奇妙で、ありえない状況に陥っている。

「まさか、小さくなるとは……若干だが幼くなつとる。」

「それだけ、彼の使った力……アストラナガンが異質なのでしょう。ギリラム小佐も言っていました。アストラナガンは単独で世界を渡ると……故に、彼の『時間』を乱したかと。」

アストラナガン……イングラム・プリスケンが開発したと語られている正体不明機。

軍では、『ブラックエンジェル』と呼ばれるようになったらしい。

だが、この存在を覚えてくれたギリラムは、こうとも語っていた……『アストラナガンに乗る者は、他とは違う時を生き、永久の孤独を味わうかりそめの旅人になる』と。

つまり、今のツバメはそれに当てはまるのでは無いか？

他とは違う時を生きる為に、自身を時間軸から切り離す為に時を逆行させ、『あり得ない』状況を作り上げ、彼と世界が矛盾した状況をわざと作り上げ、番人とやりにさせる為に。

「なににせよ、アストラナガンとやりに近づけるわけにはいかんな

……」

「ええ、出来るか分かりませんが彼を元に戻す方法を探しつつ、ヒュッケバインを改良しなければ……彼をアストラナガンに近づけない為に。」

戦場に、自分の都合で子供を巻き込んだ事を憂いながら、今後も

巻き込み続ける事を嘆く大人のエゴに負けない為に、彼が足を洗えるように準備をしようと思う二人だった。  
ツバメが眠るメディカルルームに少女が一人、入り込むのを見て、不覚にも和んだのはマリオン博士だけの内緒だ。

s i d e   o u t

s i d e - ツバメ

沈んだが、海に潜っていた奴が、酸素を求めるように浮上する。  
こういった起き方をする場合、大抵はトラブルが起きている。そう、トラブルが確定しているのだ。  
例えば、ラトウーニが人の顔に何かをしようとして、俺が起きたから、あたふたしているとか。

20

「く……ふああ、おはようだな。ラト？」

「お、おはよう、兄さん。」

やめろラト……そんな純真な瞳で男に上目遣いしてはいけません。  
ロリドと呼ばれる連中には、暴走しか呼ばんぞ。

まあ、こうなっているのは俺に悪戯しようとしたのだろう。

ああもう、ラトは可愛いなあ！！（前後関係皆無

「兄さん、気分どう？」

「ん……ああ、悪くはないな。ラトが可愛いし、バツチりと通常運  
行だ。」

「か、可愛い……？」

顔を伏せ、赤くしているのを見られまいとしているが、耳まで赤  
いから丸分かりだぞ、愛しの妹よ。

こんなに可愛い妹に、婿とか出来たら切り殺してしまいそうだよ、  
この手で……この手？

「な、なんだこれ……どうなっているんだ？」

「に、兄さん落ち着いてっ！」

「お、おおお落ち着いているぞ。俺は落ち着いているっ！！」

どう見てもダウトだろうと自身につっこむ。

こんな状況で落ち着いていられるか、何せ『体が縮んでいる』のだ。  
詳しくは分からないが、最近一気に伸びた身長はめでたくリセッ  
トされているだろう…… あっ ん。

「ら、ラト……鏡を貸してくれ……」

「は、はい。」

「ありが……っ?!」

若干、幼くなった顔立ちは許容しよう。

苦しいが、人より変わった体験してるとか、若作りの一環とかの言  
い訳が出来る。

だが、『忌々しい銀髪』は許容出来ない。

この髪を見ると『あの頃の弱い自分』を思い出すからだ。  
俺は、ラトに手鏡を返すと、頭から布団を被る。

「ごめんラト……暫く、一人にしてくれ。」

「でも「頼む。」……分かった、お大事にね？」

「……。」

ああ、やっぱり俺は弱い。

あそこを抜けて九年少し……理不尽だとか、鬼畜だとか色々不名誉な称号を貰いながらも強くなった気でいたが、髪色一つでここまで気が弱くなるなんて最悪だ。

今は、誰にも会いたくない……寝よう。ろくな夢を見る気はしないが。

side out

side ラトウニ

ツバメ兄さん……スクールにいた頃、私に優しくしてくれた姉さん唯一のパートナー。

そして、軍に保護された初めの頃、私に優しくしてくれた数少ない人。

人造人間みたいなモノの私に近く、同じ様な兄さんを、最初は慣れなかったけど、時を重ねる毎に、この人の大きさに助けられてばかりだ。だから……

「今度は、私が兄さんの助けになる……うん。まずはリュウセイに相談しようかな？」

人見知りな私に、世界を教えてくれた、兄さんの助けになりたい、だから先ずは兄さんの『悪友<sup>あくゆう</sup>』のリュウセイに相談してみよう。だけど、これが後に喜劇<sup>ひげき</sup>になるなんて、この頃の私は、サッパリわかりませんでした。

s i d e o u t

t o b e c o n t i n u e d . . .



## 第一話 色々と下がる（後書き）

Q、こんなのが大事な一話で大丈夫か？

A、大丈夫じゃない、問題だ。

どうも、セオリーとか無視し、シリアル路線爆走中な秋永です。

中々難解＋状況が分かりづらいわダボがと人が多いでしょう。私もその一人です。

ですが、こんなISのイも出ていないこの作品ですが、どうか見捨てないで下さい（m┐（ m

誤字脱字の報告などの、感想をお待ちしております。

## 第二話 燕は小さな翼を広げた（前書き）

漸くの更新……私って結構亀更新なのね。

まあ、他の作品と違って、まだIS本編始まってないからなのかしらね（メメタア

## 第二話 燕は小さな翼を広げた

side ツバメ

パーソナルトルーパーの損傷による、フィードバックダメージで暫く動けなかった俺は、とにかく弄られまくった。

リュウセイやタスクみたいな、ノリの軽い連中にはチビになったと散々からかわれ。

ライやアヤ大尉みたいな真面目な方々には、早く治せと励まされ。

兄さん（ゼンガー）やじいちゃん（リシュウ）には、好きな銘柄のお茶や、今後について聞き。

レーツェルさんには、消化に良い料理をご馳走してもらった。

そして、ラトにはそれを食べさせてもらう嬉恥ずかしイベントがあったが、わざとらしく部屋の扉を少し開けてニヤニヤしているタスクやイルムさんには各々の責任者<sup>レオナさんとリンさん</sup>に連絡をしてくれよう、いや既にした。そして、最後に……

「ツバメ、お前にはIS学園にいつてもらう。質問があるなら、今の内に言え。」

「とりあえず、目的とか大事な部分をはしより過ぎている為、初めからお願ひします。」

ヴィレッタ隊長が鬼畜です。

労働組合も両手を上げて逃げ出すくらい鬼畜です。

噂のブラック企業も、真っ青な程に鬼畜です。

先程まで居た、ラトが本当に癒しすぎる。

「簡単な話、万全な状態ではないお前を対DC残党戦の前線に、立たせる訳には、いかなかったただけだ。他にも、ラドム博士からお前に名指しで依頼があった。」

「前者は理解しました……（納得はしかねるが）。それで、ラドム博士からの依頼とは？」

見たほうが早いと、端末を渡されたから、受け取って確認する。

内容は、次世代機の為のデータ収集……うん、万全じゃない俺に回ってくる辺り、嫌な予感がしたが、なんともまとまだ。

機体名は、『<sup>エクสบayn</sup>ExBein』？

「ヴィレッタ隊長……まさか、ヒュッケバインの新型機を自分にですか？」

「らしいな、態々お前に合わせて近接用にチューンアップされている。感謝しておけ。」

「……はい。」

俺に、まだ戦う力を得る機会がある……運はまだある。

キョウスケ少尉風に言うなら、切り札を切ってスッカラカンだけど、また新たに切り札を引き当てた気分……かな？

「拒否はしないみたいだな。」

「当たり前じゃないですか、軍属ですし……（何よりも）」

彼女を、まだ取り戻していない……俺の戦いは、終わっていないんだ。

あの日に誓ったんだ、『奪われた全てを取り戻す』と。

「分かった、マリオン博士には、私から連絡をしておこう。」  
「ありがとうございます。」

side out

side ヴィレッタ

「さて、今任務について話していなかったな。」

「お願いします。」

「ある人物の護衛だ。」

「護衛ですか？」

「そうだ、こいつを見る。」

ツバメに渡した端末を、軽く弄り画面を切り替える。

ターゲット  
護衛対象を見たツバメは、面を食らった表情になるが、普段の仏頂面に戻る。

成る程、何か知っているようだな。

ターゲット  
「護衛対象は、『イチカ・オリムラ』……世界で初めて、ISを動かせると発覚した男だ。」

「織斑 一夏……ですか。」

「何か知っているようだな？」

「知っているも何も、中学時代の後輩です。同じ部活で、三年の頃に入ってきたのですが、部長を押し付けてきたから今でも覚えていますよ。」

「そうか、都合が良いのか悪いかは知らんが、頼むぞ。」

「了解しました、隊長。」

ふむ、中々に切り替えが早い奴だ。

最近、血液からの遺伝子検査で分かったが、ツバメはイングラムの遺伝子パターンに近い。何故、イングラムの遺伝子情報があったか知らないが、私からみたら、ツバメは『弟』に当たる存在だ。

鼻根拔きに、ツバメは良い男だ。今は珍しい、ゼンガー小佐みたいな芯の通った不器用な男だ。

こんな可愛い弟を、構わないのはダメだろう？

「さて、ツバメ……お前には大事な話がある？」

「……はい？」

きょんとした表情をしておって……可愛らしい奴め。

本人は自覚症状はないみたいだが、仕草の所々が幼くなっている。特殊な趣向を持つ一部が、鼻から血を出していたのを思い出すが、これはかなり破壊力が高いな……こいつを女の巣窟であるIS学園

に放り込むのは、かなりヤバい気がするが、背に腹は変えられない。  
だが、今は隅に置いておこう……

「遺伝子検査の結果、お前は私の弟に当たる事が分かった……そして、私はイングラムと同じだ。意味はわかるな？」

「俺のオリジナルは……イングラム……教官だったのですね？」

「そうだな、だがそれ以外に……」

「え？」

ギョッ

「お前は、私の血の繋がった弟だ。それ以外全ては、オマケに過ぎない。」

「へ……あ……」

「いきなり、甘えろだとかは言わない。だが、私を頼ってくれて構わない……一人の姉として。」

「は、はい……ね。」

「？」

「……ね、姉さん？」

「ブッ（鼻から血が出た音）」

「ちょ、姉さん？……隊長、たいちょおおおお！！」

いかん、こいつは危険だ……萌えという言葉を、頭ではなく体で理解したよ。

イングラム、こういう経験も悪くないな。

ゴツオの枷から解き放たれたは良いが、こういう経験が出来なくて残念だったな。

おかしいな、川の向こうで仮面のやけに年食った男が手を振っているな……

とりあえず、撃つか（ヒドイ

side out

side ツバメ

人間頑張ってやれば、出来ない事は少ないとかよく言うが、本当なんなんだと思う。

何故ならば、医者に全治一週間の神経麻痺と言われたが、結局何とかなってしまった。

ええ、三日で治るとか常人に喧嘩売っていると思うが、生憎『普通の体』じゃないからな。

まあ、代わりに貧血でヴィレッタ隊長が入院したが。

そんな愉快な事があって、晴れて自由の身になった俺は、テスト機受領の為に『テスラ・ライヒ研究所』に来たのだ。

勝手知ったるなんとやら。

指定された部屋までやってきたよ……よく、迷子になら無かったな俺。

「あら、迷子にならずに来たのね。」

「自分も思うので、ざっくりと言わないで下さいよ……マリオン博士。」

「ふふ、分かったわ。ついてきなさい……あなたに新たな翼を用意しました。」

「……分かりました。」



この人は、『マリオン・ラドム』博士。

本来は、ATX計画と言う他所の計画の研究者なのだが、たまにデータの共有などで会っていたら、何故か気に入られたのだ……適性が合うとか言っていたから、ろくな目に逢いそうにないが。

「先の大戦で、貴方に合わない機体を用意した事が、個人的に許せなくてですね……だから。」

「……これは。」

マリオン博士に連れられた場所には、奴がいた。かつて、その稼働実験で幾重もの悲劇を生み出し、『凶鳥』と呼ばれるようになった機体が。

「エクスバインExBein……『可能性の凶鳥』ってところですかね。マオ・インダストリー社から、貴方に使ってほしいと、貴方が使っていたヒュッケバイン009改の欠点や利点を検討し、改修した事で、その翼を広げるまでに至りましたよ。そう、貴方だけの翼ですよ、ツバメ？」

俺は、見とれていた……いや、魅せられていた。

濃紺の装甲に、シャープなフォルム。

背中のフライトユニットが力強さを感じる。

ゴーグル状のモノに覆われた相貌からは、早く使えと言う抗議の視線を感じた。

「は、博士……えっと。」

「ふふ、分かっていますよ。早く使いたいのでしょう？ でも、安全のためにスーツを着てからね？」  
「はいっ！」

可愛いものを見るようなマリオン博士から感じるが、知ったことではない。

真新しいスーツを受け取り、更衣室に、俺は走る。  
待っているエクสบイン……絶対に乗りこなしてやる。

side out

side マリオン

私からスーツを受け取ったツバメ君は、更衣室に着替えに行った。  
彼も何だかんだで男の子だ。

Rシリーズを見たリウセイ君みたいに、エクสบインを見たツバメ君の瞳は、一瞬でエクสบインの本質を理解したようですね。

『自身の為に用意された機体』

という事を……当たり前だ。

運動性能は、L5戦役を生き抜いたPT達の中でもトップクラスだったヒュッケバイン009改を、逆に振り回すと言う、高速機動戦闘にかなり特化された才能を持つ彼は、今後の計画において必ず必要な人材だ。

先方も、ただで自社製品が宣伝が出来る喜んで寄与してくれた。  
まあ、今まで事故続きのブラックホールエンジンの制御がツバメ君

のデータでかなり出来たからだろうけど。

「博士、着替えが終わりました。」

イニシャライズ クロッシング

「それでは、エクスバインに触れて、初期化と同期を行ってください……まあ、それが終われば貴方にいい相手を用意しましたよ。」

貴方は、生き残らなくてはいけない……この残酷な世界で、あなたと言う小鳥を守るために、幾らでも鎧を作りましょう……私の目指すものの為に、ね？

s i d e   o u t

s i d e   ツバメ

エクスバインと俺の設定の初期化と、自分の生体情報の同期を済ませる為に、触れる

生体情報検知……ユーザーを『ツバメ・トウゴウ』に設定

同期を開始……正常に終了

量子化による置換を開始

I   a   m   a   E x B e i n 2 n d

俺の体は、量子化され、PTのセーフティコア（量子化したユー

ザーを納めておく場所）に入る。  
暫く、目を閉じて視覚情報の同期完了を待つ……出来たようだな、目を開く。

『これは……』

「凄いでしょう？ 貴方の未来予知の如き直感に対応させる為に、かなり設定を絞ったんですよ。」

各サーボモーターの感覚誤差修正値がいやに小さい。

これは、逆に危険じゃないのか？ 人間を、データに変換すると、機械から見たらかなりの誤差<sup>バグ</sup>がある。

人間は、生き物故に変わり続ける……だが、機械はその変化を好ましく思わない。

正常な運用が誤差のせいで阻害されるからだ。

だから、その誤差は量子データ化された人間の精神にストレスとして蓄積される。

そのストレスが末期まで来ると人間の精神は崩壊を始める……

『俺を殺す気ですか……マリオン博士？』

「あら、だからエクسバインを貴方に託したのですよ？ よくご覧なさい。」

『……な、なんつつ無茶な。』

自信満々に言われたので、渋々と視覚情報として送られたデータが、仮想ディスプレイに投影される。

T-Linkシステム シンクロ開始

T-Linkシステム 新規シンクロデータを監視サーバーにアップデート

以後、監視を継続……ユーザーのテレキネシス 波の正常検知中

パッと見分らないが、要するに俺の特殊な脳波 テレキネシス波を使い、機械のほうを俺に合わせるという強引過ぎる手口でストレスダメージを軽減させているのだ。

確かに、先程まで感じた重圧感は消え、自分の体に近い感覚になっている。

「フフン、どうですか。この芸術的な処置は？」

「お、男らしいといしか言えませんか……」  
お、BMセレクトバトルモードまで出来るようになったな。どれどれ？」

仮想ディスプレイに映された情報を操作し、BMセレクトの画面を出したが、そこには

「く、クロスレンジしかないだ？」

「ま、まだ調整中だけです。今後、ライフルなどの中遠距離の武装がロールアウトされたら増やすつもりですよ。」

にこやかに言われたが、笑顔とは、自然界では本来、攻撃的な意味合いを持つらしい。

つまり、軽くキレてる。

これ以上、博士の琴線に触れたら、何されるか分からない。

博士の笑みは、大変魅力的なのだが、魅せられて殺されたらたまったモノではないので、素直に作業をこなす。

B Mセレクト……クロスレンジ

やはり、クロスレンジは落ち着くな。

ヒュッケバイン009改は、ミドルレンジを想定されているから、あまりクロスレンジに耐えられないんだよね。

武装欄はつと……なん、だと？

### 【試作参式斬艦刀】

鬼みたいに極端だな、チクショー……確かに、斬艦刀の有用性は、いい意味でも悪い意味でも有名だけど、まあなんとかなるかな？

早速、具現化<sup>コル</sup>しますか……よっと。

『これは……』

「リシュウ先生の仲間の一人、ウン・ノウ先生が残したとされる鍛造技術で作られた業物。

それが、試作参式斬艦刀……本来の物とは違い、刃の形成機構技術試験的な意味合いが強いですが、貴方なら問題ないでしょう？」

『その聞き方は、卑怯です……よっと。思ったより振りやすいな。』

ヒイン……ヒイン……澄んだ風切り音が響く。

やっぱりいいな、腕部のサーボモータも、ゲシユペンストMk-？

……じゃなかった、アルトアイゼンに使われている物は、剛性も馬力も違うな。

「さて、粗方慣れてもらったところで、模擬戦をしてもらいます。」  
「……はい？」

大した完熟訓練やデータも採らず、いきなりなんて……まるで戦時中みたいに急いでいるな……まさか、何か起こるのか？

俺が、前線から弾かれている間に何かが起こるんじゃないのか？俺が考えている間に、俺がいる場所と対面のハッチが開いている。マリオン博士は居らず、ハッチを開けに行ったようだ。

「久しぶりだな……」

「この声は、まさか……」

「それでは、模擬戦を始めてください。ルールは簡単、疑似シールドエネルギーが削りきれた方が負けです。簡単でしょう？」

チクショーマイペースですかとか呟きつつ、開いたハッチの方向を……前方を、センサーを幾つかを落とし、温存しながら注視する。いきなりの目潰しを警戒しながら、斬艦刀を構える。

暫くしていると、桃色のビームが飛んできたので、斬艦刀で弾き、地に足をしっかりとつける……来るっ！！

ボッ！！

突如、スモークが焚かれて有視界戦闘が厳しくなる。同時に空気中に漂う、多数の金属片のせいで、一部センサーがジャミングされている。

こういつ時に来る場合は……っ!!

『そこだあっ!!』

『……っ?!』

自分の懐の下だっ!!

大振りのナイフで、俺の斬艦刀の一撃を防ぐのは  
青い装甲に白い基礎装甲骨格、左手に持ったハンドガン大のビーム  
兵器。

間違いない、コイツは『アストレイ ブルーフレームショートレン  
ジアサルト』!!

大幅に強化されたセンサーに、ショートレンジでの戦闘を想定して  
装備されている武装。

使い手の戦術から考えて、俺相手にこの装備を選択する筈がない。  
もしかしたら、マリオン博士の依頼か？

『取った!』

『あ、があ?!』

大振りのナイフ『アーマーシュナイダー』で、腹を一気に捌かれ  
る。

吹き飛んだ際の追撃に、ビームハンドガンの攻撃を三発キツチリと  
決め、

俺の設定されたシールドエネルギーはゼロになる。

エクسバインが解け、生身の体が露出する。

そして、相手も量子化を解いて生身の体をさらす。



「戦闘中に考え事とは、縮んでバ力になったか。」  
「スイマセン、『効さん』。」

『ムラクモ 叢雲 ガイ 効』、別名最強の傭兵。

先の大戦に入る前、俺に格闘を軽く（全然軽くないが）仕込んでくれた、俺の先生の一人。  
卓越された戦略眼、戦闘技術、話術は、時に一個中隊を一人で全滅させることがある。

「まあいいさ、さて、何か言うことがあるか？」  
「いえ、ありません……」

そして、この人が此処に居るといふ事は、  
俺は、この人にIS学園に護衛任務に入るまでの期間に、  
ボロボロになるまで扱かれるという事だ。  
俺に明日はあるのだろうか？

「悪いが、お得意様からの依頼だ。手加減はせんぞ？」  
「り、了解しました……」

さあ、がんばって生き残ろう。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.  
.

## 第二話 燕は小さな翼を広げた（後書き）

まさかの主人公、得意の近接戦で惨敗（笑）

今回から、クロスした世界のキャラを出せるように頑張ります。

今回からの参戦確定作品

・『機動戦士ガンダムSEED ASTRAY』

だが、キラ……てめえは無理だ。

本編のキャラ達が、使いづらい、ヘタレ、いつも動きがパツシブ過ぎ、珍しく動くと碌な事にならないの作者からのレッテル（個人的趣味とも言つ）で、SEED自体からの参戦は無いのよ。

他の作品とクロスを番外とかで書きたいな（チラッ

では、また次回お会いしましょう。

ご意見感想、誤字の発見、作品の参戦の検討など、お待ちしております  
ます（m—）m

### 第三話 生きているって素晴らしい(前書き)

まだまだ、IS原作に入らないという罫。  
だがまあ、確信犯ですけどね

(\*、、)

### 第三話 生きているって素晴らしい

side ツバメ

現実しんじつとはいっても非情であり、虚構うつそはいつだって優しい。

この言葉を考えた奴は、かなり現実に疲れていたのだろう。  
かく言う俺も疲れている……何故ならば。

「これにて、訓練の全過程を終了とする……お疲れのようだな。」  
「あ、ありがとう……ございました。」

これが、所謂地獄……という奴なのだろうか？

とにかく、時間感覚が薄くなる日々だった。

もはや意識が朦朧とするし、立つのも億劫だ。

体には、パーソナルトルーパー（略がPT）との同調シンクロが良すぎると  
起こるドライダメージがあった。

ドライダメージとは、機体の損傷位置と同じ肉体の部位がケガをす  
るという奴だ。だから、体中が打撲痕が酷いこと酷いこと……

「さて、俺は次の仕事があるんでな。」

「はい……月並みですか、頑張ってください。」

全く、相変わらず根なし草な人だ……いや、それが効さんの魅力  
の一つなのだろう。

男も良い意味で惚れる、『男の中の男』……か。

俺は、あの人に追い付ける日が来るのだろうか？

だが、まだ無理だろうな……過去への忌避感が、女々しく拭い切れない俺には……な。

髪の毛を黒に染めるのやめるか？いや、だが……

side out

side マリオン

「中々の仕上がりってところかしら？」

私の目の前に沈黙している機体……エクสบイン式号機は、完全に燕君の血肉になった。

私が心血を注ぎ、夜寝ないで昼に寝るような生活を繰り返し、漸く完成させた、今考えうる近接強襲の中でも最高の出来だ。今開発中の、ビルドビルガーやビルドファルケンの先駆けになりうる機体。本来より、武装が減ったが彼は気にしないだろう……多分。

機体での訓練は、出来る限り量産機のゲシュペンストでお願いし、怪訝な顔で見られながらも頑張ったかいがあったものよ。

「博士エー効さんは、次の任務にいきます……」

「お疲れ様、ココアを入れてあげましょう。」

「はあ……い。」

燕君は、普段のぎこちない敬語も忘れ、手近な椅子に座り、湯気が出る体に厚手のタオルを巻いている……無防備ね。

年齢が下がった為かしら？

全く、なにこのかわいい生き物？ 以前のキリツとし、凜とした態度を知っている分、心許されていると勘違いしてしまいそう。

まあ、本来の年の差考えてもありえませんが。

……何に言っているのかしら、私。

まあ、いいでしょう。

この機体なら、うちのバカ弟子の作品にさえ負けないでしょう。

「仕様書とかは、デスクにおいてあるから、勝手に読んでください。」

「了解しましたあ……」

そう彼なら、愚直なまでに一直線な彼なら、この混沌とした世界を変えうる方法を、見つけられるかも知れない。異なる技術体形が混在するこの世界を……

さて、今は彼の為にココアを入れて上げますか。

side out

side ツバメ

おかしい……今まで、斬艦刀のような、大きな得物を振り回されないように鍛えていたのに

今の体は、完全なるインファイトの仕様。

なんというか、レベルが5程上がった気がする……なんの話をしているんだ俺は。

とりあえず、仕様を把握しないと、何が変わったのか、怖くて使いたくない。

形式番号：STX-EXT

機体名：エクสบイン式号機

開発：マオ・インダストリー社

改修担当：マリオン・ラドム

動力炉：ブラックホール・エンジン

装甲材：発砲金属装甲

基礎骨格：Hフレーム

機動関係機関：テスラドライブ、T-Linkフライトシステム、

G-テリトリ

基礎武装：試作参式斬艦刀、フォトンショートライフル、コールドメタルナイフ、チャクラムシューター、以降追加あり

補助システム：T-Linkシステム（一部改造）、グラビコンシステム、各種センサー系

「何この極端なスペック……アルトアイゼンやヴァイスリッター以来なんだけど。」

武装の大半が、アウトレンジを想定していない。

フォトンショートライフルが、辛うじて狙えばか……追加武装で、何かしら補完される武装であれことを願おう。

ヴァイスリッターのオクスタンランチャーとは言わない、せめて



ミドルレンジをカバー出来るものを所望する。

「仕様書を読んでいたか……どうですか？」

「なんつつか……素直にグルンガストかアルトアイゼンに乗った方が早い感じがしました。」

「はつきりとした言動は嫌いでは無いですよ。まあ、このエクスパインは、あくまで次への……『ビルドビルガー』と『ビルドファルケン』への布石。同時に、軍部からみたら貴方の試金石なのですよ？」

「（ぐ、くう）……重々、承知しています。」

分かっている……今の俺が、次世代機への布石であり、軍部から見たらお荷物だという事ぐらい、分かっている。

現在、表向きでISが軍事の中心である以上、男性の軍人は、志願制を取られている。

そして、地球統合軍では最低ラインが高校卒業である。

肉体年齢が16歳くらいまで『下がった』今は、居る事は難しい……居ることができても、完全にお荷物だ。

だから、今回の件で、一定以上の結果を残さないといけない……理想は元に戻るものただけ。

「さて、悩んでいても、仕方ありません……IS学園の制服を用意しておきましたよ。」

「ま、マリオン博士が、ですか？」

「何かしら不満が？」

「い、いえ……（確か、いつぞやの女装させようとか、言い出しのって、この人だよな？）」

無性に嫌な予感がする……たしか、打ち上げ（L5戦役後）の際、レフィーナ艦長やエクセレン少尉の衣装を作ったのってこの人って聞いているんだけど？

冷や汗を流しながら、ココアを飲み、気持ちの落ち着きを図る。冷静になれ、腐っても組織にいる人間なんだ。

非常識過ぎて、前に勤めていた会社に自分から辞表を叩きつけたらしいが、何も俺があの人<sup>の</sup>毒牙にかかるとは決まった訳ではない……そうだ、クールに、クールになるんだツバメ・トウゴウ！！

「貴方は、何に戦慄しているんですか……」

「うおっ？！戻っていたんですかマリオン博士……後ろから話しかけないで下さいよ。」

嫌な予感とか、醜態を晒す未来は、一辺に吹き飛ば……何故なら。何故なら、マリオン博士が持ってきた制服らしきものは、コートのようにであった。

それめ、ただのコートではない……兄さん（ゼンガー）の着ているような仕様なのだ。

最低限のラインなのか、肩当ては無かったが、最早眼が点になった。ごめんなさい、マリオン博士……普段の奇行に眼が行っていて、人間だという事を忘れていたよ、愛してる。彼女ほどじゃないが。

「正直、普通の制服じゃつまらないので、改造しました。たまには息抜きにやるのも悪くないですね。」

「……パーフェクトです、博士。」

「私は、浪漫には理解があると定評ですからね。」

厚くて、重いアルトアイゼンや、薄くて軽いヴァイスリッターとか完璧に色物ですもんね。

軍部でも、浪漫をわかる一部が正式採用しようか、本気で検討しようとしていたのを聞いた事がある。

しかし、平行世界で正式採用されていたとは……俺は知りよしも無かったが。

世界は、二つの……正確には三つの隕石の襲来を切っ掛けに、混乱と混沌とした世界と化していた。

一つ目は日本近海に落下し、二つ目も富士山に、三つ目は日本の上ら辺を通過中の月に落下した……宇宙は、日本に何か恨みでもあるのだろうか？

経済的にガタガタだった日本を救ったのは、『篠ノ乃 束』が開発した『インフィニット・ストラトス（I・S）』だった。

宇宙開発を前提に作り上げたマルチフォーム・スーツなのだが、如何せん性能がヤバかった。

使い手の技量が振り切れていたのもある（姉弟子？を悪く言いたくはない）が、ハッキングにより日本に向けて発射された弾道ミサイル約2300発を切り伏せたのだ。

本人曰く、肝を冷やしたらしいが、涼しい顔して言われても納得出来ない。

パーソナルトルーパー（PT）で、同じ事やれと言われても、俺はやりたくはない。

しかし、悲しかな俺は軍属……上に言われたらやらなきゃいけない。

「たくつ、10年の間に色々ありすぎだろうが、表の世界よお……」

そう、裏で騒いでいる間に、表もかなり賑わっているのだ。

俺達とエアロゲイターとの戦いなんて、だれも認知してないんだよ。

当たり前だ、俺達（PT）は知られないに越した事はない。

ガタガタに脆い世界に、進んで戦争の火種を持ち込む奴は、良心的な奴ならまあいいと信じたい。

自分を取り囲む環境を整理しながら、IS学園に入る前に嬉々として渡された参考書きょうしきを読み耽る。

参考書の内容は、高校の現代史並に面倒かつ、無駄に覚えることが多い……もう少し要約できそうな気がするんだよな。

まあ、俺がどうこういう資格は無いし、言うつもりも無い。

人の積み重ねた歴史を、個人が否定しても何にもなら無い……だから。

「悔しいが、覚えるか……勉強とか高校受験以来だぞチクショー。」

だから、今は自分に刻んでおこう。なんでこんな感傷的になっているか知らないが、何故かこれからの生活に期待をしている俺と、早く彼女を助けたいと黄昏る俺の二人いるような気がした。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
. . .

### 第三話 生きているって素晴らしい（後書き）

主人公の中で、いったい何が……モラトリウムな問題だけだといいですね。

次回

【クラスメイトは女だらけ？】

だと良いね……女性が苦手（人間が苦手）な私には、首吊りもんですね。

ま、そんなギャルゲみたいな生活には、縁なんて無いけどなっ！！だから、人は書くのさ……小説を。

外伝 ある傭兵の戦い（前書き）

やっちゃった、風邪のせいで頭沸いたとは言えやっちゃったよ、バ  
ーニー。

## 外伝 ある傭兵の戦い

『ここまでで良いんだな、効さん？』

『助かったカイト、サーペントテールには小回りの聞く足がないからな。』

『そりゃあ、トレーラーとしてクライアントの安全安心を守れないしな。じゃ、陽動いつてきます。』

ここは、ドイツのとある軍事基地……そこには、なにかのコンテナを運んできた、無人機であろう小型戦闘機がいた。

いや、戦闘機は、変形して人型になり、コンテナの中の人物と二三話した後に、再び戦闘機に変形して基地に向かって飛び立つ。

『さて、ミッション開始だ……』

コンテナのそれは、そう言ったつもりなのだろうが、実際には『ふもっふ！』と鳴いていた……。

それには、青いV字のブレードアンテナが付いており、他は意外にも軽装だった。

ただし、『ネズミの着ぐるみ』だが。

ネズミの着ぐるみ……日本での名称『ボン太君』は、光学迷彩による視覚的、電子的欺瞞をした後に行動を開始した。



side 銀髪眼帯少女

お昼を食べた私に来たのは、基地に侵入した不明機の捕獲ないし破壊だった。

ISを起動させた私は、現場に向かおうとした時に奴にあったのだ。

動体反応を検知

「何？これは……地下に向かっているのか？」

姿も何も見えず、ただ大気の乱れのみをハイパーセンサーが検知する。

向かう方向に、不明機から受けた被害の報告から考え、不明機の陽動の可能性を上と連絡すると、動き出した。

なにかの動きは早いようで、既に地下へのエレベーターをハッキングして降りていつている……これは不味いな。

これ以上の侵入は、軍の威信に係わる。

上にこの事を連絡すると、物資搬入用のシャフト（縦穴）から急いで地下に降り、迎撃をと指示される。

「言われるまでもない……待っている、<sup>アンノウン</sup>不明機！！」

side out

side ???

「ふも、ふもふもっふ（ほう、もう気づかれたか）……」

電子戦を想定し、武装の代わりに精密機器を詰め込んだ、このボン太君ブルーフレームに気がつくとは……中々鋭い奴が居るようだな。

だが、既に必要なモノ（ターゲット）は確保した。  
後は、撃墜されないように予定地点に急げばいい。

「見つけたぞ、侵入……者？」

「ふもふ（見つかったか）?!」

「ネズミの着ぐるみとは……馬鹿にしてくれる!!」

「ふも、ふーふもっふ（悪いが、相手にしてられない）。」

ポフンっ!!

まずは、用意していた対ハイパーセンサー用ECMグレネードを使い、相手の目を潰す。

その後にミラージュコロイドを使い、ささっと逃げさせてもらう。  
無駄な戦闘なんて割に合わないんでな。

side out

side 銀髪眼帯少女

「ちつ、逃げられたか……」

ハイパーセンサーは、ECMグレネードでだろう爆発物によって完全に潰されていた。

効果が完全に発揮しにくい屋外なら未だしも、ここは屋内……このフロアを脱出しない事には機能は回復はしないだろう。

発見されてからの手順がかなり鮮やかだ、並みの相手ではない。ネズミの着ぐるみとふざけている相手だが、中はかなりの手練れだろう。

何せ、一切手の内を明かす事無く撤退したのだ。

余程の逃げ切る自信か、チキンじゃない限り出来る事じゃない……今回は、私の完敗か……

『ラウラ、不明機の撤退を確認した……急いで戻ってくれ。』  
「了解、直ぐに帰還します。」

次は勝たせてもらうぞ……青ネズミっ!!

side out

side トンビとは名ばかりの鷹さん

『回収に来たぞ、ブルー。』

「ふも（助かる）……」

ドイツ軍の基地に残った違法研究のデータを回収というミッションだったが、マジで怖かった……

事前に覚悟はしていたが、対空砲撃の雨あられに、二機のISによる連携。

逃げに徹していなかったら、本当に危なかった。

効さんから、ミラージュコロイドを見破られたかもしれないと来たときは、ミッション中断も覚悟したが、流石は効さん。

あ、ブルーっていうのは効さんのミッション中のコードネームだ。俺の『カイト（トンビ）』って言うのもそうだ。

『ここまでで大丈夫か……コンテナを爆破したら、本当にミッションコンプリートだ。』

「お疲れ様、ドイツ軍との打ち合わせとは言え、昔の痴部をそうそう見せる訳にはいかないからな。」

『軍といっても、一枚岩ではない……前大戦のDC戦争がその証拠だ。』

「……そうだな。ん、こちらでコンテナの爆破を確認した。」

『ああ、さっさと退こう。いい傭兵は、「引き際を知っている……」だろう?」ふ、分かっているなら良い。』

やっぱり、効さんはカッコいいなあ……IS学園というフラグの園に行った燕の奴が、師事するわけだ。

俺の師匠でもあるが、マジでハードボイルドだ。

ただし、『ネズミの着ぐるみ（ボン太君）』のせいで、台無し何だけどな。

t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.  
.

## 外伝 ある傭兵の戦い（後書き）

ラウラvsボン太君……幼女対ネズミの着ぐるみとか、マジで福眼  
すぎる。

まあ『無駄な戦い』しないで、さっさとケツまくって逃げたんです  
がね。

みんな分かっているなら良いけど、私は効さんスキーです。  
ハードボイルド最高です。  
マジで弟子にして。

はい、参戦作品増えました。

スーパーロボット大戦Wから

・フルメタルパニックふもっふより

ボン太君（効仕様）

・バンプレストオリジナルより

ヴァルホーク

の参戦です。

ええ、みんな大好きヴァルストークファミリーのカイト君こと、カ  
ズマ君ですよ皆様。

私はスパロボWが大好きです。Dと同じくらい好きですね。  
アリアかわいいよアリア。

フフフ…もう、どうにでもなれ。

どうせブレイク・ザ・ワールドなんだ……刺激的に行こうや。

#### 第四話 ダブリって辛い(前書き)

なんとか、ISが始まりそうです。

ちなみに、この作品の一夏君は、皆の知る一夏ではありません。作者によるマ改造を受けた『ICHIIKA』です。作

#### 第四話 ダブリって辛い

s i d e ツバメ改め、燕

突然だが、ツバメ・トウゴウの現在の世間様から得た肩書きは、

世界で二人目のISを動かせる男

である。

また、一部では、

あれ？コイツ、学年ダブってない？

である。

ツバメ・トウゴウ、年齢は既に19歳手前の18歳と認知されていると言つか、戸籍への工作まで手が回らず、誤魔化し切れなかった。

残念、彼はめでたく？下がる男の条件を満たしたのだった。

#### 第四話 ダブリって辛い

あなたの町の電話帳を、2つか3つ程重ねた、IS学園に入る前に渡されたISの参考書と教科書を入れた鞆と、身の回りの物が詰まっているキャリアバックを引いて、俺はIS学園に『出向』した。俺が、この学園の敷居を跨いだ瞬間に、俺は連邦政府特殊機動部



隊SRXチーム……いや、その前にATXチームに移すか無いかで話があつたが……から、このIS学園に変わる。なんと云うか、切実に悲しい。前線から後方に下げられた、そんな寂しさと一緒に、彼女に遠ざかった感じがする。俺は、断じて戦争中毒ではないと言い切らせてもらつて。

「……ん、……う、……ばめ君。稲郷 燕君……！」

「さつさと返事をしろ、この馬鹿者。」

ス、パァン！

「あ？！……つう。はい、すみません。」

「さつさとしろ。」

ダブリという事実に傷心している暇すら無いのか、ここはある筈無いか……女傑、織斑千冬先生に情けやら容赦やは、愛する弟のいる家庭に置いてきたのだろう。さつさとしろという視線に内心、ため息をつきつつ席を立つ。

「テスラ・ライヒ研究所所属の稲郷 燕だ。趣味は、剣道とコーヒーを淹れる事。まあ、よろしく頼む。」

え？沈黙？何これ怖いんだけど。

やつぱり、前線で硝煙やら、スペースデブリやら、その他エネルギーにまみれた俺では、ダメなのだろうか？だから、最初に教員が良いつてあれほど

「「「「「「「「  
「きやあ  
「あああ  
「あああ  
「あああ！  
「」

「あんた、髪の手見ていない？」

「何というか、凄みを感じるなあ……」

「ぶ、部長なんだげふう?!」

やっかましいな女子高生。

濁った銀色の髪の毛なのは認めるが、あんまり触れないでほしいなあ……

ああ、愚かな後輩（一夏）には、チヨーク投擲をプレゼントしておいた。

止めてくれ、俺の年齢を掘り返すような真似だけは止めてくれよな。  
 うっかり、かわいい後輩の額に、チヨーク弾痕とかつけたくはないよ。

くっだらなひ雰囲気を醸し出したまま、シヨートホームルームは

騒いでいた女子高生達は、鶴（担任）の一声で騒ぎを止めた。

あんぐらい、覇気を出せたらじいちゃんに認められるのかねえ……。

side out

Side  
一夏

「なんで、部長が居るんだ……」

どうも初めて、織斑一夏っす。IS学園で学生してます……いや、現実逃避している場合じゃない。

俺は、中学三年間……ある人物に誘われて、剣道部にいた。

その人物は、『稲郷 燕』……俺に、筋が良いねとたまに見せる営業笑顔で剣道を本格的にやることを薦め、波乱万丈の三年間をくれた恩人である。

俺が中学一年の頃、三年生だった燕部長は、とにかく強かった。本当の意味で目に写らぬ速さで踏み込み、一撃で相手を沈める一撃必殺の剛剣。

俺だって男だ、強さに惹かれるし、何より部長の背中に惹かれた。多くは語らないが、皆彼についていく様は、カリスマ性はあったのだ。

だが、一切妥協しない部長は、地獄のような練習量をこなしていた。部員の中には、モヤシだった奴が、半年で細マッチョになった奴がいた程だ。

おまけに、飴と鞭がうまい人で、部長の実家である広い日本家屋の庭で、大会後に打ち上げパーティーで鍋やバーベキューなんかをして、それを自分が卒業した後も場所を提供してくれた。

とにかく、面倒見の良い人で、仲間に甘い人なのだ。

そんな俺の尊敬している部長の名を語る奴が、イタ……いや、あれは本人だ。

不機嫌になると空を見ると、変に口下手な所がな。

だが、髪の毛がくすんだ銀色になっていて、身長も結構下がっている。

「就職先にマッドが居るんだ……この戦いが終わったら、俺、彼女を探す旅に出るんだ」とか言っていたが、まさか漫画みたいに年齢下がる薬とかの実験でもされたのか？

なににせよ、後で話を聞いてみよう……全てはその後だ。

side out

「（だりい……窓際なのがまだ救いなのか。）」

二回目の高校生活を楽しんで来いと言われたが、ぶっちゃけ一回目で十分に堪能した。

周りからの視線が、弾幕よろしく俺を貫いている。

若干もう一名、同じ事で悩んでいる奴がいるんだよ、これがn

キンコーンカーンコーン

ん？、授業が終わったみたいだな。

あ、一夏の奴、早速女に声かけられてら……たく、かつたりいよなあ。

授業を受けてていて思った印象は、正直PT乗りから見ても、ISは未だに未完成な点が多々ある。

PTも、未だに発展の余地はまだまだあるが、一応の完成系が存在する。

例えば、ゲシュペンストのようなリアル系、それに加えグルンガストのようなスーパー系など、各々の役割をハッキリとさせて、各々の研究が進んでいる。

例えば、欠点に目を瞑り、長所を伸ばしに走っているマリオン博士の『マ改造』もそうだ。

例として、俺のエクสบライン貳号機（先方曰く、俺は貳号機キャラらしい）を上げよう。

「ちょっと、よろしいかしら？」

ロングレンジへの攻撃手段を無くし、実弾等の実体系の武装をメインに置いた事により、ブラックホールエンジン特有の高い出力による爆発的な瞬発力と旋回力を『無理矢理』得たピーキーな機体だ。おかげで、臨時講師の効さんにフェイントのかけ方なんかを、文字通り、徹底的に叩き込まれた……オヨヨヨ

「ちょっと貴方、聞いていますの？」

まあ、またインファイトの技能が上がった気がする。具体的には、5ぐらいまでかな？ 地獄を見たが、スクールに居た頃に比べればマシかな。

いや、人道的にあそこと比較出来る時点で十分アウトなんぞ……

「無視しないで欲しいですわっ！！」

「喚くな、騒ぐと器の程度を知られるぞ。」

「ぐっ……ふん、私が声をかけていない貴方が悪いのですわ。」

「そうかい、で？ アンタは何様なんだ？」

おお、面白いくらいに顔赤いな。

戻ってきた一夏はこつちを青ざめた表情でみたら。

止めるよ、俺がこの女を『ブツ血KILL』んじゃないか心配みたいな目を。

俺は成長したんだよ、今年19歳の大人手前なんだよ。

「あ、ああ貴方、この私を……イギリス代表候補生のセシリア・オルコットを知らないと？」

「悪いな、一々候補生の顔を覚えていないんだ。何せこの身は非才故に、君みたいなのを覚えていられる程、暇じゃないよ。それならフェルマーを暗算している方が有意義だと思うんだが？」

悪くないぜ、その無自覚の悪意……つい、斬りたくなる。  
だが、今は日常なんだ。

なら、舌戦で斬らせてもらうよ……オルコットさんとやら。

キンコーンカーンコーン

「……後で、また来ますわ。」

「来なくて良い。（ああ、待っていよう。）」

あ、本音と建前が逆転した。思っていたより、俺はガキらしい……健全な精神は、健全な肉体に宿ると言う言葉はあるが、肉体に精神が引きずられているのかね？

side out

side セシリア

信じられない。

信じられない、信じられない、信じられない、信じられない信じら



教室に鳴り響く重低音、それは窓際の真ん中から聞こえたわ。ゆらりと立ち上がった黄色猿その二……不器用そうな男は、ゆつくりと口を開きましたわ。

まるで、地獄の溶鉱炉の口が開いたように。

side out

side 燕

突然だが、俺は日本育ちだ。生まれは分かんが、日本で育ったのは間違いない。

外国語は流暢ではないが、イギリス寄りの英語に、中国語にドイツ語を少しかじっている。

だから、日本語での分かりやすい罵倒の他に、陰湿な悪口を言われたのが我慢なら無かった。

「成る程、イギリスでは他国を罵るのが礼儀なのか……」

あくまでも静かに、剥き出しの刃は晒さない。

守る剣であり続けるなら、刃を鞘に納める事を学べとじいちゃんに言われたが、多分納まってない。

「イギリスは、紳士淑女の国と聞いていたが、どうやら誤りだった



みたいだ。」

「ごたくやらの言葉を重ねることに、最早意味はない……だから

「決闘だ（ですわ!!）……」」

最近、どうも短気な気がするな……本当に肉体に精神が引き摺られて  
いるかもしれない。  
だから、人の事を微笑ましいモノをみるような目で見ないで下さい、  
織斑先生っ?!

side out

side 一夏

分かりやすく、状況を確認する為に少し時間を巻き戻そう。

授業中にも感じる視線からのダメージを回復するべく、大人しく、  
閉心モードひきしんモードになっていた俺に救いの手?を差し伸べたのは、幼なじ  
みの『篠ノ之 簞』だった。

「少し……良いか?」

「かまわないよ、廊下か?」

「ああ。」

なんつつか、しばらく見ないうちにイケメンっぷりに拍車がかかってないか？

俺と篤が、廊下に出ようとすると、モーゼの如く道を開ける……

部長は「またかコイツ」という視線を寄越すと、また外を見た。

うわぁ、かなり不機嫌だな。

あの人、あんまり中学の時に喋らない代わりに、行動に出やすい人だからな。

やれやれと思いつつ、俺と篤は廊下に出た……いや、聞き耳たてんな外野。

マナーというか、モラル的にどうなんだよ。

「……」  
「……」

こっちはこっちで、なんか無口だし……部長にいや、部長が似てるから、対処がしやすい事もない。

こういう無口な奴は、こっちから話題を出してやればいい。

「と、とにかく久しぶりだな、篤……なんつつか、（良くも悪くも）変わってないからすぐにわかったよ。」

「それは、ありがとう……」

うつし、流れを掴んだ。

戦いにおいて、ペースを掴んだ奴が勝つ。

後は、適当な話題で釣るだけだな。

「そう言えば、剣道の全国大会……優勝したんだよな、おめでとう。」  
「な、なんで知っているんだっ?！」  
「なんでって、会場で見えたし。男子の全国大会が隣の会場でさ、あっさり終わったから見に行ったらお前が居たから驚いたよ。あ、うちの中学優勝したんだよ。」  
「……」

優勝した記念に、部長が開いてくれた優勝記念パーティーで撮った写真を見せる。

部長……燕先輩は、俺に部長の座を渡したらさっさと引退、高校受験に専念した。  
それで、今度は就職先が決まったし、三年ぶりにパーティーを開いてくれたのだが、驚いた。  
あの人、連合軍に入っただよ。詳しくは機密だからはぐらかされてしまったけど、とある実験部隊に入っらしい。  
無駄にハイスペックだからな。……あれ、なんか箒さんがワナワナしていて怖いんですけど。

「なんでだ……」  
「……はい?」  
「なんで一声かけてくれなかったっ!」  
「いや、箒に声をかけようとしたんだけどさ。お前さっさと帰っちゃってて、分からなかったんだよ。」  
「……っ」

おい、なんだそのしまった！！やってしまった！！みたいな表情は。

この天然娘……そういう、理不尽なところも変わってないのかよ……  
… 箒の姉も大概だが、箒も箒で理不尽な性格している。

似た者姉妹と思うが、これを言つと箒は姉に同族嫌悪を持っている為、木刀で切り込んできやがる。

全く、そういうところを治せば、周りの受けは良いだろうに。

「はあ、箒は変わらないな。」

「ば、バカするなあ！」

久しぶりに誰かを弄るという行為に、変な安心感を覚えていると腹のそこに重石を落とされた気分になられる。

こりゃあまさか……部長ガチギレ？箒には、気付かれていないが、ここまで濃密な嫌悪を振り撒かないで下さい。 のほんさん（仮称）の周りの癒しフィールドすらたわんでるぞっ？！

この状況に気がついてるのは俺だけとか、マジで勘弁してくれっ！！

あの金髪微縦ロールが犯人か！逃げろ、死ぬぞ！！

キンコンカーンコン

次の授業の鐘がなると同時に、ビリビリとした空気は霧散し、元に戻る。

うわあい、部長ったら、師匠並に強くなってるじゃないですか……  
俺も『師匠』に鍛えられなかったら飲まれていたよ。

悪意というか、そう言うのじゃなくて、多分『ダブリ』って事実

が原因なんだろうな。

留年とか嫌っていたし、変に常識人なのが、焦りに拍車をかけて辛いだろう。

俺も、何も悪いわけでもないのに強制留年とか嫌だ。

後で、愚痴に付き合っただけであげよう……逆に愚痴を吐いてしまいがちだが、少し出すだけでも楽になるだろうし。

「って、ヤバい……戻るぞ算っていいえっ?!」

スパンッ!

「さっさと席につけ……織斑。」

「はい……織斑先生。」

拝啓、天国にいるだろう師匠へ。

周りの人々が優しくありません。これが世界の縮図という奴なのでしょうか?

今後の高校生活に、希望が見えません。

side out

燕の憤怒に、セシリアが押されながらも虚勢で対抗している最中、我らが織斑先生が切り込み、矛を納めさせる。

「とりあえず静まれ、稲郷。」

「……申し訳ありませんでした、織斑先生。」

「オルコットもだ。喧嘩を吹っ掛けている時点で貴様も同罪だ。」

「しかs「だまれ。」……はい、すいませんでした……」

燕は、最初のギリリとした視線を送るのを止め、素直に謝罪する。セシリアは、正当化するように言葉を言おうとするが、一言で切られ、嫌々矛を納める。

「今から一週間後、第三アリーナにて模擬戦をしてもらう。最初は稲郷とオルコット、織斑には、勝った方と戦ってもらう、いいな？」

「『了解しました（わ）』。」「」

「さて、これより授業を始める。教科書の……」

こうして、燕の闘い……己との闘いが始まった。

守る為の剣になるか、はたまたただの血狂いの人切りになるか……それは本人にも分からない事だろう。

. . . t o b e c o n t i n u e d

#### 第四話 ダブリって辛い（後書き）

文章がながけりやあいいつて訳じゃないんでしょうが、グダグダ書いていたらこんな事に……。

てか、主人公があんまり大人げないかなと思ってます。

ダブリが辛いのは分かるが、それを理由に不機嫌を隠せないのはガキっぽいかな……って体はは16歳じゃん。

一夏の中学時代とか、師匠とかその内わかるかも？

最後に、ご意見ご感想、誤字報告などをお待ちしております。  
次回をお楽しみに！

## 第五話 クールダウン & カミングアウト

放課後の教室、二人の男が何を悲しいのかどんよりした雰囲気では話をしていた……教科書を挟んで。

「ああ、すまん一夏。変に気を使わせた。」

「謝るくらいなら、自重をしてく……くれ。」

「マジで悪い。代わりに勉強教えるよ。座学は得意だからな。」

「なんというか、変に馴染んでいた。」

一夏が分からないところを、燕が肉付けするように教える。

「理解出来ない事を、無理に理解しようとしなに限る。わかるレベルまで次元を落とせばいいんだよ。」

「むう、やはり貫禄というか、社会人は違うつすね。」

「まあ、色々あったんだよ……後、出来れば対等に接してもらった助かる。もう、先輩後輩に仲じゃないしな。」

「確かに、改めてよろしく……なのか？」

「まあよろしく。」

一夏はどうやら、ISの知識事態は丸暗記したのだが、それを噛み砕けずに消化不良を起こし、ワケわからないという風になっていたらしい。

授業中に、分からなくて質問していたが、ちゃんと分かりやすく言われると理解出来るらしい……流石、藍越学園を受けようとしてい



ただけはあるか。

燕が分かりやすいように例えを示し、一夏がそれに納得をしていると、副担任の山田先生が近づいてきた。

「あ、二人ともまだ教室に居たんですね……よかったあ。」

「どうしたんですか、山田先生。そんなに慌てて。」

走ってきたのか、少し朱のさした頬を、なんか色つぽいなあと思しながら、燕が問いかける。山田先生、幼顔に巨乳にメガネと言う凶器じみた属性の持ち主である。

「実は、燕君は決まったのですが、一夏君の部屋がまだ決まっていなかったなので、暫定的に決めてきましたよ。」

「あれ？俺って確か、一週間は自宅から登校だった気がするんですけど。」

一夏が、ふとした疑問を口にする。

政府から来た手紙やメールなどの連絡はなく、そういった話も一切聞いていないからだ。

「その事なんですけど……日本政府から、特命で暫定的でも良いから決めてくられて来たんですが、織斑君は何か聞いていますか？（ぼそっ）」

「いえ、特には……まあ、分かりました。」

一夏は一応、納得しておく。妥協がある程度出来てしまう為に、周りとの衝突が少ない、安心安全設計？な一夏君でした。

「とりあえず、荷物を持つてくる為に一回帰らないと……何を持つてこよう……」

「それでした」「安心しろ、私が持つてきた。」ほら……」

まずは、竹刀に防具……とか呟いた一夏に、突如やって来た織斑先生が大きめのボストンバックを渡す。

「着替えに、充電器を入れといた。後は、休みにでも自分で持つてこい。」

「い、イエスマム。」

流石千冬先生……大好きな弟にすら容赦はしない。

でも、それは愛情の裏返し。

そこに痺れる憧れる……なんて、俺空気だなあと思っている燕に、伝家の宝刀『出席簿』が炸裂した。

「な、何をするんですか織斑先生っ?!」

「何、失礼な事を考えている馬鹿には、これくらいが丁度良いだろう。」

フツツと、クールに笑うと去っていく織斑先生……読心術でも使えるのか？

それとも、俺が分かりやすいのか？

だったら、『彼女』には包み隠さずなら良いんだけどさとか考えている辺り、燕は駄目かもしれない。

捕捉で言うなら『彼女』とは、この学園にいる人物ではない事は確かのようなのだ。

「と、とりあえず……織斑君と稻郷君には、鍵を渡しておきますね。」

「ありがとうございます。」

この後、少し余裕が出来たと言う山田先生を捕まえ、勉強会を再開。

スポンジどころか、吸水ポリマーの如く理解の早い一夏に、山田先生はとても満足そうで、その様子はとても可愛らしく、微笑ましい、まるでラトウーニを見ているようだと言は語。

## side 一夏

とりあえず、山田先生（巨乳に幼顔、メガネという正気を疑う属性を兼ね備えた彼女だ）に渡されたメモを見ながら部屋を探す。

先輩……いや、燕と言おう。彼に追い付きたいしな。

燕は、贅沢に一人部屋らしく、困ったら気軽に来なとアニキ風をふかせて去っていった。

部屋の番号は『1025』……どうせなら、燕と同じ部屋なら気

が楽なんだけどな。

燕は燕で、俺よりヤバイレベルのVIPだからしょうがないらしいが、やはり縮んだ事が関係してるのか？

状況の整理をしていたら、部屋の前についたみたいだな。

1025……よし、まずはノックをして確認しないと。

ここは女子寮なんだ、何かあったら社会的に抹殺される。

一部の人間には、俺は目の上のたん瘤だろうし、平然とぶっ殺しにくるから注意しないと。

ノックノックと……

『はい、悪いが少し待っていてくれ。』

ん？なんか聞いたことのある声だな……具体的には、今日の休み時間くらいか。

「ああ、確か同室の……」

「よっ。」

中から、俺の幼馴染み……箒が出てきた。

シャワーでも浴びていたのか、ほんのり朱のさした頬が色っぽいな

……はっ？！いかんいかん！！何欲情しかけているんだ、俺はっ！！

「とりあえず、入れ……」

「お、おう……おじゃまします？」

落ち着け、俺……冷静に、そう、箒は幼馴染みだ。  
だから、ここまで無防備に谷間とかを見せているんだ。  
だから、まずは煩惱を打ち消し、極めて普通に接するんだっ！

「い、いやぁ……それにしても凄いなIS学園の寮って。」

「それは、各国から色々援助を受けているし、同じように人が来るからだろう。」

「そうだよな……マジで来ちまったのか、俺。」

「一夏……」

なんつつか、同情するような視線を送ってくる箒。

やめてくれ、俺は……俺は強く生きると決めたんだ！

だから、肩をポンポンと叩かないでくれ。心が……折れそうなんだ。

「はぁ、まあシャワーの時間とか決めないとな。バッテリーで、社会的に死にたくない。」

「そ、そうか……私が先で良いか？なんというか、自室の方が落ち着くからな。」

「構わないぞ。遅くまで、鍛練するつもりだし、今はちょうど良い人いるし。」

ん？箒の奴。なんかムツとしてるな……はっはーん、さては焼きもちか？

同門で、昔から馴染みだから自分以外の適任者に嫉妬か？

「贅沢言えば、千冬姉が良いんだが、あの人はあの人で忙しいし、何より燕が居るし。あの人、剣道男子で元日本一だし。あ、今は俺な？」

「何？……一夏、ずっと剣道をしていたのか？」

何故か、箒は嬉しそうだな。

まあ、昔馴染と共通点があるとうれしいのかね？

「？ ああ、中学にバイトしようとか思ってたんだけどさ、燕の実家が道場でさ……示現流って知ってるよな？千冬も昔習ってたんだけどさ。」

「ああ、忒の太刀いらすの示現流と有名だからな……まさかっ？！」  
「そ、三年くらい世話になったよ……まあ、俺が習った剣自体は、示現流じゃないんだけどな。病気で、死ぬ間際のウン・ノウ先生の活人剣を可能な限り……な。」

ヤバい、師匠の事を思い出したら泣きたくなってきた。

かなりきつかっただろうに、あの方は、燕に勝ちたいという俺に剣を教えてくれた。

究極の基礎に、究極の応用……ただ、ひたすらぶれぬ太刀筋に、己の全てを生かしうる戦い方をする。

己を生かす剣……故に活人剣なのだ。

「ま、そんな事でよくよしてたら先にはいけないしな。悪いけど箒、俺疲れてるからもう寝るな。」

「あ、ああ……おやすみ。」

どうも、慣れないな。こういう、女子だらけの環境。おまけに、いつの間にか先輩と戦う事になっているし。はあ……とにかく寝よう。

side out

side 燕

どうも、燕です。

私の部屋は一人部屋で、同居人は居ないと聞いていないと聞いてます。

「ふう……一人って楽だな。」

初日から、色々な事がありすぎた。ありすぎて疲れた。

溜まりにたまった乳酸を、風呂に入って血行良くした体で処理してしまいたいが、ここは生憎ながらIS学園……悲しいけど、男が使える風呂ってないのよね。

無いわけではないが、男子生徒（約二名）には解放されてないのだ。

肩身せめえな、チクショー……これならまだ、エクسバインを調整していた頃のテスラ研のほうが良かったぞ。

「はあ、シャワーで済ませるかな……チクショー。」

シャワーで手早く汗を流した俺は、寝巻きの浴衣に着替えて、部屋に合わせて小さく狭いがふかふかなベッドに体を埋め、夢の世界に旅立った。

極彩色の世界……混沌を正しく描いただろう空間を抜けたら、テスラ研に居た。

時間は夜で空は暗く、研究所に活気はない。

そして、見たことのない青い特機がいた。

機体のいたる所に緑のクリスタルがあり、肘の近くにはブレードがある。

そして何よりも、髭が特徴的な機体だ……うん、いいセンスしてるな作った奴。

『来たわよ……コードは、お馴染みのアサルト1。』

アサルト1？アサルト1っていたら、キョウスケ中尉と同じ認識コードだ。夢の癖に、変にリアルだな。



『レモン、貴様はヴィンデルや人形達と一緒に先に行け。』

『ええ、アクセル……分かっていと思うけど、こちら側とあちら側は違う……ベールオウルフもそう、それをわすれないで。』

二人は恋仲なのか？なんか、キヨウスケ中尉とエクセレン少尉をおとなしくした感じだな。ん？なんか機体が近付いてきているな……な、バカなっ？！

青いアルトアイゼンだとっ？！

だけど、細部が違うみたいだがあれはいつたい……

『ちっ……腐った連邦の亡霊が……』

『お前たちは、望まれない世界を生み出す……静寂を乱す箱舟と共に、ここで朽ちろっ！！』

青い機体、キヨウスケ中尉の音がするけど……なにか違う？まるで、何かに寄生とかされたみたいだ。

いったい何がなんだよ、何が起こっているんだ、俺の夢！！

『この　・トウ　ウが残した機体で……貴様を討つっ！！それが、せめてものこの機体の作り手の供養になるからな……来い、ベールオウルフっ！！』

『静寂を乱す者……撃ち貫くっ！！』

ん？なんか、ノイズがはしったな？　そのまま、二つの青／蒼はぶつかり合う……あの特機も凄いが、あのアルトもどきの出力も半端ないな。

『嘗めるな、力比べでは負けんぞっ!』

『……圧せよ、Mark-?!!』

な、あのサイズ差がある特機を寧ろ押しているだっつ?!  
だが、なにか不自然だ……分からないが、何か違和感を感じる……  
黙ってみているか。

『く、この質量差を押し返すだと……それなら、青龍鱗っ!』

『ぐ、があああああ!!!』

おお、特機の奴……腕からなんか出してアルトの右腕を持っ  
ていきやがった。

アルト最大火力の右腕を失ったらヤバイな……へ?緑の液体……ま  
さか、あれ血か?

なんで、PTである筈のアルトの腕から血が出ているんだ?

『まずはその右腕一本……確かに頂いたぞっ!!……な、バカなっ  
つ?!』

嘘だろう……再生した?

EOTをほとんど使っていない筈のアルトが再生した?いや、それ  
よりも……

『巨大化だと？狼というには外道が過ぎるぞ、ベーオウルフっ！！』  
『お前たちは、純粹たる生命体になりえん……俺が、そう！俺こそがつっ！！』

蒼い機体が、赤く……赤よりも紅い機体になり、機体のサイズも大きくなり、特機と遜色ないほど大きくなる。

あり得なさすぎて、逆にマリオン博士ならやりそ……いや、ないかと自問自答していると、元アルトの胸部が開き、光が収束していく……ん？光？  
つて、なんじゃありやあ？！ば、ルッカーですか、違うようなうん。

青い特機は、ドツチロールで避けると、放たれた光は搬入口らしきシャッターに当たる。

『搬入口がつっ！』

元アルトが、胸部の砲門にエネルギーをためる……なんなんだ、これはいつたい。

なんで、キョウスケ中尉がテスラ研を襲っている？

望まれない世界を生み出すもの？もう、わけわからねえよ！！

本当に、これは俺の夢なのかっ？！ありえねえよ！！

これは、夢なんかじゃねえ……まるで、何処か別の世界を見ているようじゃねえか。

『このまま奴が地下残り時間127秒、認証コード入力、起爆時間

セツト、誤差僅か五秒……最早、博打だな。こりゃあ……」

『望まれない世界を生み出すもの……修正する！』

『さあ、よく狙え……ベオウルフ……！』

【推奨BGM：極めて近く、限りなく遠い世界】

青い特機が空へジャンプし、怪物……『ベオウルフ』の後ろに向かう。

体を綺麗に捻り、月を背にする……不覚にも、綺麗な光景に見えてしまった。

ベオウルフは青い特機を狙い、反転する。

ベオウルフから放たれた閃光を、青い特機がバレルロールを駆使し、上手く避け

懐に入る。そのまま、腰に手を回し、バーニアを前回にし、ベオウルフを研究所の地下に叩き落とす。

『静寂を乱す箱舟はいつたい……』

『転移したのさ……！』

『転移……？』

『そう、この世界を捨て、俺達は新たなフロンティアに行く……だが、ベオウルフ。貴様はここで朽ち果てる……リミッター解除、コード『麒麟』……！』

青い特機が、地上から研究所の地下に向かって腕をクロスさせて、ダイブする。

ベオウルフが、その異形に成り果てた肩の装甲が開き、大量の金属弾が飛び出す。

『頼む、ソウルゲイン……俺を、俺を勝たせてくれ!!』

その雨の如く飛来する金属弾の中を青い特機は、『ソウルゲイン』は突き進み、ついにベーオウルフの懐に入り込む。

ソウルゲインの肘の刃は青く輝き、それは斬艦刀の様に伸びた。なんで、斬艦刀に見えたかは分からないが、俺はそれを何故か『知っている気』がした。

『ぜいやああああああ!!』

懐から、アッパーカットの要領でジャンプしながらベーオウルフを『切り裂く』ソウルゲイン。

すげえ、あんな絶望的な差から、相手に致命傷を負わせやがった??!

『ベーオウルフ、俺の……勝ちだっ!!』

『っ?!』

ソウルゲインが降り立った場所にあった装置が起動する。

おい、まさかここまでの筋書きを用意してやがったのか、あの特機の使い手。

天才……いや違う、凄まじいまでに頭がきれるんだ。

戦い闘い、戦い続けその果てに手に入る一つの形、それがあの男だ。

俺はそう頭ではなく、心で感じ取った。

『アクセル……アクセル・アルまあああああ!!』

『ふん、行きかけの駄賃だ……その命、いただくぞ。キョウスケ・ナンブ!!』

アクセルっていうのか、あの男。

ソウルゲインの右腕が回転をはじめ、風を纏うまでになる。

『玄武剛弾!!』

『ぐ、ごふああ?!』

ロケットパンチよろしく、回転しながら飛んでいった拳『玄武剛弾』は

ベーオウルフの胸部をぶち抜き、その体から緑の血を噴出させる。とつたな、確実にベーオウルフは死んだはずだ。

アイツが全うなPTなら、今の一撃でセーフティコアを砕いて、この悪魔は死んだはずだ。

意識が、遠のいていく……きっと、この悪夢も覚めるんだろう。

『ふふふ、良い物みつけ』

え？

「ぜ、はあ…はあ…ゆ、夢？」

Dコン 世間的に、広く使われている電子端末。色々な機能が使える。に記されている時間は、『AM 5:00』。

いつも起きる時間で、中々健康的な時間だ…だが、何か釈然としない。

忘れていけない事を忘れている気がする。

皮肉にも、この夢を見た日…連邦で、謎の特機『マスタツシユマ  
ン（ひげ男）』が確認された日だった。

俺がうる覚えに言った、損害状況が一緒であった。

. . . to be continued

## 第五話 クールダウン& a m p・カミングアウト（後書き）

燕の見た謎の夢と、燕自身の謎。

そして、いつかマリオン博士の言っていた『壊れた世界』。  
どうして、こうなった？

次回もお楽しみ〜（・・）ノシ

あと、本当に関係ないがキュウベえは滅んでしまえ。

結局、宇宙の為に前ら下等生物は死んでと言っているようなモン  
だよな、アイツ。



**解析！ 解説！ 分かりづらい機体&オリジナル機体（前書き）**

2011/10/03 ヒュッケ系の形式番号間違えていたので、  
修正

## 解析！ 解説！ 分かりづらい機体&オリジナル機体

### 作者オリジナル機体

形式番号：RTX-009X

機体名：ヒュッケバイン009改

開発所：マオ・インダストリー社

同乗者：ツバメ・トウゴウ

分類：改造型試作PT

動力炉：ブラックホールエンジン

装甲材：強化チタニウム装甲（グランゾンの予備を流用）

全長：2.5m

空中浮遊機関：テスラドライブ、T-Linkフライトシステム

基本OS：TC-OS

マン・マシン・インターフェース（以下、MMI）：T-Linkシステム

特殊装備：試作グラビコンシステム、プロトタイプウラスシステム

武装：ブーステッドライフル、ブラックホールキャノン（母艦に保管）、マイクロミサイル、CTM-02スピキュール、コールドメタルブレード（ART-1の試作）、リープ・スラッシャー

### 運用解説

主に、中距離～遠距離の殲滅と支援攻撃を想定されて改造された機体。

SRX計画において、『R-0』とナンバリングされているグランゾンのパーツを一部流用されている。

ただし、パイロットの技量（作者の描写ともいう）により、かませ犬のような扱いを受けた不遇の機体。

さりげなく、DCの兵器も搭載している。

戦闘スタイルは、機動力の無いヒュッケバイン・ガンナーである。

形式番号：R T X - E x T（Tは、ツヴァイと燕をかけたもの。）

機体名　：エクスバイン式号機

搭乗者名：稲郷　燕

分類　　：改造型試作P T

開発　　：マオ・インダストリー社

開発者名：マリオン・ラドム

動力炉　：ブラックホールエンジン

装甲材　：発砲金属装甲（試験仕様）

基本骨格：Hフレーム

全長　　：2.7 m

空中浮遊機関：マ改造テストドライブ、T - L i n k フライトシステム

基本OS：T C - O S

M M I　：T - L i n k システム

特殊装備：グラビコンシステム、ウラヌスシステム、???

武装　　：試作参式斬艦刀、コールドメタルナイフ、ロシュセイバ

ー、M 9 0 アサルトマシンガン（???\*1）、チャクラムシューター、グラビトンライフル『M g u ー』

#### 運用解説

開発中のエクスバインを燕の乗機として、改修した機体。

今回は、パイロット適正に合わせ、近々中距離戦闘を想定して改造されている。

装甲は、モルゲンレーテ社製の『発砲金属装甲』を採用し、機体全体を軽量化をしている。

一部の技術などは、とある筋から入手した物であり、E O T を好まないマリオン・ラドム博士の

意地が垣間見える。

『マ改造テストドライブ』は、一定の工程（瞬間加速イクニツシュフズトのような、ある程度技術を要する）を踏む事で、爆発的な推力を発揮する、従来

のテストドライブに喧嘩を売っている使用になっている。  
テストドライブの形状は後の開発中に奪取された『ビルトファルケン』と似ている。

専用の武装であるグラビトンライフル『Mgu』は、専用のEパック・カードリッジを一個分を消費する事で、機体のエネルギーを消費する事無く撃てるが、規定以上の威力を発揮するには、機体とのエネルギーリンクは必須である。ちなみに、Eパックは三発まで連結して装填できる。ただし、ISに対して使用する場合、絶対防御を貫く可能性がある為、細心の注意が必要である。

元ネタはガンダムUCの『ビーム・マグナム』である。  
何はともあれ、今後の活躍に期待。

## SEED ASTRAY

形式番号：MBF-P03

機体名：アストレイ・ブルーフレーム

分類：改造型試作PT

開発：????

開発者名：????

動力炉：バッテリー式

装甲材：発砲金属装甲

全長：2.1m

空中浮遊機関：????

基本OS：????

特殊装備：????

武装：【基本武装】対空迎撃バルカン『イーゲルシュテルン』

\*2、強化ビームライフル、対装甲コンバットナイフ『アーマーシユナイダー』

【ショートレンジアサルト】対空迎撃バルカン『イーゲルシュテルン』\*2、ビームショートライフル、対装甲コンバットナイフ『ア

「マーシュナイダー」、対高感度センサー用ECMグレネード\*？、コンプリートセンサー（複合補完型センサー）

#### 機体解説

『サーペント・テール』という傭兵集団のリーダー『業雲 効』の機体。

何処で作られ、誰が作ったかなどは不明だが、少なくとも後5機は存在するというデータがある。

DCと地球連合の両方の武装に対応が出来、余程尖った物ではない限り使用が可能らしい。

前大戦『L5戦役』にて、地球連合に雇われ、密かに活動していたようだ。

使用者の業雲 効は、ミッションに応じて装備を変更する為、戦場で様々な姿のブルーフレームが目撃されており、最近では、シベリア近辺での目撃情報が確認されている。

#### ショートレンジアサルト

初登場は第二話。主に入り組んだ地形や拠点潜入での装備と言われている。

コンプリートセンサーによる索敵、ECMグレネードによる欺瞞と妨害、取り回しを重視したビームショートライフルに、アーマーシュナイダーによる一撃必殺とも言える格闘。

## 第六話 書くナニカ（前書き）

更新スピードとしては、遅いのか早いのか、自分としてはさっぱりです。

では、第六話……どぞ

## 第六話 蠢くナニカ

side 燕

俺は……稻郷 燕は、悩んでいた。

そりやもう、マリオン博士はなんであんな極端な仕様が好きなんだろうね、という疑問に答えを出す

くらい悩んでいた…… 実際は、もっと真面目な事で悩んでいた……『夢』の事だ。

余りにも鮮明で、頭に焼き付いたかのように離れない。

『ベーオウルフ』…… 何故かは知らないが、キョウスケ中尉に良く似た声で喋り、色が違うが

アルトアイゼンに乗る謎の『敵』。

最近、皆から予知めいている言われる程に鋭くなった直感が、あれは自分の敵であると告げている。

果たして、どうしたものか…… 二杯目にあたる、てんぷら丼（一杯目は牛丼）を半分まで食べながら悩んでいた。

「食べながら悩む癖…… 治ってないんですね。」

「ん？ おお、いかにいかに…… ついやってしまっ。」

朝起きて、身支度して、朝を食べるまでの流れをごく自然にしていたようだ。

オートパイロットって怖いな…… 前大戦で猛威を振るったゲームシステムでも

積んでいただろうか？

「織斑君、稻郷君、隣いい？」

「ん？ああ、良いよ。」

少しだぼつとした制服を着たのほほんとした女の子……之仏だつたかを中心に

何人かの女子が俺と一夏、篠ノ之が座っているテーブルにやって来る。

「おおー、おりむーにーごーちゃんは朝から良く食べるねえ。」

「お、おりむー？」

「ご、ごーちゃん？」

おりむーは、織斑からだろう。どこぞの瓜坊みたいな響きだが、逆に親しみを感じる。

だが、ごーちゃんはちよつと……平行世界的に辛いかな。

「ごーちゃんは、少し被りを感じるから、パスかな。」

「ええー、じゃあ……つくんで。」

「ま、まあ……許容範囲かな？うん、セーフセーフ。」

幼き……いや、昔から早熟だと言われたが、いつから幼きか解らん

が、小学校卒業間際（（それかなりギリギリだが））に知り合ったどこぞのうさ耳バカに呼ばれたみたいだが……うん、可愛いから許



す。

「と、和んでる場合じゃないな……ほら、みんなも急がないと遅刻するぞ。」

「あ、ほんとだっ?！」

「いけない!じゃあ織斑君に稲郷君。また後でね。」

「ああ、お前らもかつこんで喉痛めるなよ。」

俺は、そう言って席を後にする。

途中、一夏に滲み出るアニキ臭がするとか言われたがやめてほしい。俺は、どこぞの片目のスナイパーみたいになれないっての。

彼みたいに、復讐したい……いや、する奴はいるがね。

なんか、キャラ違うねとか聞こえたが、アーアーキコエナイ。

## 放課後

飛びすぎ?一週間飛ばないだけマシと思ってくれ。

俺は、幾らか紙が入ったファイルを片手に、後輩が居るだろう教室に足を向ける。

さて、ここだけは私(作者)のターンだ。

燕は無意識にだが、世話を焼いてしまう。それも、距離感をとって、なんとなく、

相手に悟られないように……だからアニキっぽいだとか言われるのである。

「よう、一夏。相変わらず唐変木が服来て歩いているみたいな面だな。」

「罵りっ？！会っていきなり罵りとか新しすぎるだろうっ！！」

「バカだな、時代は嫌でも動く……だから、人は常に変わらないといけないんだよ。良くも悪くも、ね。」

ほら、五日分のアリーナ使用許可と、訓練機二機の貸し出しを『文字通り』もぎ取ってきたからな。

感謝して敬え。」

「ハイハイ、いつも敬ってますよ。てか、二機？……燕のか？」

「ばっか、ちげえ。お前はこれから、三十分後に第四アリーナに篠ノ之を連れて来い。このクラスで『剣道』をまともに出来るのは、アイツくらいだろう？」

「……？分かった、じゃあ三十分後にな。おい、箒い。」

「逝ったか、じゃない行ったか。」

はあ、ヤダヤダ。なんで、俺はこんな事をしているんだか。

【フッフ……相変わらず、か。まあいい、時間はあるんだ。しつかりと見定めさせてもらう。】

ん？なにやら、頭の裏……頭蓋骨の裏が、ピリピリするな。

まあいいか、さっさと準備をしよう。どうせなら、まともな奴と戦いたいからね。

模擬戦は、俺対オルコット、その後に一夏は勝った相手と闘う事になる。

はあ、普通は負けた相手だと思っただけだね。

さて、俺は俺で暗躍させてもらおうか……『亡霊』やら『ゲスト』やら、宇宙<sup>ソラ</sup>も中々にきな臭い事な成っているようだしな。

俺って、暗躍キャラじゃないのにな……これも、あのウサ耳のせい  
か。

俺とアイツが知り合いというだけで、俺の人生最大の誤算だ……

たく、アイツちゃんと飯食ってんのかな？

やめよう、さっさと準備するか……打鉄<sup>うちがね</sup>って重いな……

side out

side 一夏

部長……燕に呼ばれて、俺と箒はIS学園の第四アリーナに来て  
いた。IS用のスーツも借りて着たのだが……

「あ、あまりジロジロ見るな……」

「す、すまん（箒って意外と胸が……何を考えてんだ俺っ?!）…

…」

下手な水着よりエロいっ！

イロモノかよって程にエロいんだよっ！！

前時代的だが、かの『スクール水着』に勝るとも劣らないピッチリ  
感がある。

弾……悪友も言っていたが、これ考えた奴頭のネジが逝っていたん  
だろうな……

「よし、来たな。」

「言われた通り、箒を連れてきたけど……何を？」

「なに、簡単だ……織斑、篠ノ之と模擬戦をしろ。ISを使って……な。」

無論、今日じゃないが……と続けたが、成る程。流石は実践主義だ、何故箒を指名したかは知らないけど。

ほら部長、箒もかなり怪訝<sup>かお</sup>そうな表情<sup>お</sup>をしているし。説明ブリーズリリース。

「はあ、篠ノ之はなぜ呼ばれたか、分からないという表情だから説明してやる。」

篠ノ之は、ニュースになるくらいの実力者みたいだからな。

『うち』出身の一夏の相手も出来ると思ったただけだ。

二人共、最初の内は自分の土俵で戦いたいだろう？」

確かに、部長のせいで人外魔境と化したうちの剣道部でも、部長に追い付きたくてひたすら打ち込んでいた俺は、『人外手前』なんて言われてしまった。

結構トラウマだから、セーブはしようかな。

箒まで人間を止める必要はないんだ……うん。

「……それは、お前より私のほうが一夏に近く、一夏より私のほうが弱い、と言いたいのか？」

「？　そうだが？何か納得いかんのか？」

「当たり前だ！　一夏はあっさりと大会が終わったと言っていたぞっ！！　それは、早い内に負けたという事ではないのかっ！」

あれ？　箒さん……優勝したとかちゃんと聞いたのにスルーですか？　束さんと変なところ似てるな。

あの人も人の話聞かないって部長は言っていたし、俺も実感して知っている。

だから、あきれた目で見ないでくれ部長……コイツが人の話聞いてないだけですから。  
あ、察したみたいだ。

「まあ、説明は面倒だ。お前ら、さっさとISを起動してお互いに確認しあってみる。力の差って奴をさ。」

ドヤってしないでくださいよ部長……審議してアウトの親父ギヤグですよ。

箒もぶりぶり怒ってISに行っちゃったし……はあ、何時もお鉢が回ってくるのは俺なんだよな。えっと、背中を預ける感じと……ハイパーセンサーも良好だな。

さて、ウンノウ直伝……活人剣を御披露目しようかな。  
いくぞ……箒っ！！

side out

「くっ（強い……いや、次元が違うのか）……」

一夏とISを使つての剣道……なんとも贅沢な剣道だが、私は、一つ思い違いしていたみたいだ。

一夏は弱くて大会が早く終わつたんじゃない……『強すぎて』大会が早く終わったんだ。

しかも、私と戦つてきた誰よりも強い……嬉しく思う半分、悔しく思う私もいる。

一夏に会えなかった間、ひたすら剣道に打ち込んできた。自惚れじゃない証拠に去年は、全国の頂点に立った。

だが、それは虚ろだった……現に会場に一夏が居ても私は気が付けなかったし、一夏は私よりも強い、一回打ち合っただけで直ぐに分かった。

太刀筋が『一切』ぶれないのだ……私の剣は打ち返されたのに、一夏の剣は一切動かずに綺麗に振り抜かれた。

切っただけなのに、シールドエネルギーが一気に削れた……待て、絶対防御でも発動したのか？……なら、一夏の太刀はシールドを無視して私を斬ったのか？ なんとという出鱈目……まさに鬼や神だな。

「そこまで、今日はここまでだ。二人とも……中々楽しめたんじゃないか？」

「はいっ！ 最初は、反応の誤差とかで慌てたけど、十分振るえま  
す。」

「そいつは重畳……篠ノ之はどうだった？」

「わ、私は……」

正直、楽しかった……だけど、なんとか納得出来ない。  
力を無為に振るってはいけない気がする。  
相手を傷付けているだけのよう感じるし、何より自分が許せない  
……まあ、優しくフルボッコにされたが。

「まあ、いきなり絡まれても困るか……悪いけど、カーゴとかピットに置いてあるから、二人でISを戻しておいてくれないか？ 代わりに何かを奢ってやろう。」

「マジっすかっ？！じゃあスポーツドリンクで。箸はどうする？」  
「私も同じ物で……」

「分かった。二人とも疲れてるだろうが、クールダウン代わりと思つて頼むわ。」

「了解しましたっ！ 箸、さっさと片付けて柔軟しようぜ。」

「あ、おい。引っ張らなくても行くっ！！」

まあ、一夏と一緒に居られれば良いか……私は、それだけで今は嬉しい。

なら、稻郷には感謝して置くか……。

side out

どこかの研究所

汚く、色んな電子機器が混在する中、何故か機械仕掛けの『ウサ

耳』を着けた女性が、世話しなく端末を操作していた。

しばらく動かしていたのだが、不意に動きが止まったかと思うと、それまでの三倍の速さで操作を再開する。

後、何故かうサ耳は赤く輝いていた。

「キタキターー！！ 何故かは知らないけど、いっくんと箒ちゃんが打鉄でガチバトルしてるよっ いっくん、っーくんと同じ中学で剣道の全国大会優勝の座を死守していたみたいだし、当然なのかな？」

マシンガンの如く、独り言を喋る女性……正直怖い。

だが、居ないが周りの反応とかお構い無しに、箒側の打鉄にハツキングをかけ、視覚情報を横流しさせる。

あまりの手に、何をしたのかさっぱりだが、超スピードでも催眠術でもなく、『製作者権限』で情報を横流しさせているのだ。

彼女の名前は『篠ノ之 束』……『篠ノ之 箒』の姉にして、ISを造った人物である。

「凄いな、いっくん……素人目でも分かるくらい努力してきたんだね。束さんは嬉しいよ……あれ？ あれれっ？！ 嘘っ？！」

恍惚とした表情で一夏を見ていた束は、いきなり端末の画面にかじりつくように身を乗り出す……彼女の目で見てもなお、信じられない物を見たのだ。

その先には、コートのようなIS学園の制服に身を包み、一夏と箒の二人を指導している『稻郷 燕』の姿があった。



「なんで……つーくんがIS学園にいるの？ 確か、もう大学に入ってもおかしくない筈だし……まさか、ダブった？ でも、ちーちゃんから何の連絡も無いし……うう、束さんでも分からないのよ……うばあ、理不尽だあ……」

当たり前です。燕が肉体年齢が下がっているのは、国家機密であり、ネットワークとか切り離された部分に置かれているのだ。用心深く、自家発電用にジェネレーターを持っている専用のサーバーにである。

むしゃくしゃしたのか、ゴロンゴロンと部屋中を転がり回る束……奇行が酷い。

「うう、束さんだけハブとか酷いよちーちゃん……つーくんを弄りたいよ……」

でも、束さんは我慢できる子……だから、今はこの子を仕上げないとね。」

端末から、映らなくなった視覚情報との繋がりを断ち、再び別のウィンドウを開き作業を再開する。

彼女の端末には、『白式』と書かれていた。

「待っていてねいっくん……束さんが、すぐにこの子を完成させるからね……その後は、篝ちゃんの子を調整して、そして今度は……はう。」

顔を真つ赤にして、作業を再び再開する束……それにしても『稲郷 燕』という男、変な奴に好かれる体質のようだ。  
だが、本人は好きな人物がいるようだ。

. . . b e t o c o n t i n u e d

## 第六話 蠢くナニカ（後書き）

どうでしょうか？

まさかのウサ耳博士の登場&燕の過去の一部が明らかに？

今回は、ルビ用に色々と工夫をしていたら遅くなりました。

それ以外にも、マジンカイザーSKLに嵌まったのもあるんですがね。真マジンガーとも違う、ガチバトルでダークなイメージを売りにしているようです。

マジンカイザーがガンカタをしている様も必見。

ガンカタに嵌まって、なんとか文章で表現できないか、模索中ですよ。

それでは、作品への感想やツツコミ、誤字報告などお願いします。

## 第七話 閃き！切り払い！（前書き）

地震から約2日……私はどうこい生きています。

## 第七話 閃き！切り払い！

side 燕

一夏を特訓させてから、早くもクラス代表決定戦の日が来た……不思議なもんだ。

最初は、俺とオルコットの戦い……その後は、その戦いの勝者が、一夏と戦う。

これは、一夏の戦いの経験を積ませる意味合いが強い。千冬さんも大概過保護だが、一夏には実践形式で叩き込むのが良いと考えているようだ。

「俺のIS……まだかな。」

「そう焦るな。最初は俺の戦いだ。」

「分かっているんだけど、やっぱり早く燕と戦いたいし。」

「俺が勝つの前提か……なら、その期待に答えないと男じゃないな。」

体調は悪くない、血圧に体の部位も痛くない。

強いて言うなら『絶対防御』がどこまで効くのか気になる。うっかり切り裂いて、血の雨と見たくない。

『稻郷、そろそろ時間だ。』

「了解しました。さあ、いっちょ、気張って行くかね。」

左の手にはめられた腕時計を弄る。

マリオン・ラドム謹製を示す、『MR』というサインがデザインされて刻まれている。

濃紺の腕時計は、試合時間を近づいていることを教えてくれる。そろそろ行かないと、先方さんに悪いが。

「……っ!」

周囲には、ISを展開しているように見えるだろうが、実際は違う。

量子転換され、内側に折り置まれた肉体の代わりに、バーサルバーPT……鋼鉄の体が展開され、感覚が鋼の肉体を自分の体と認識を始める。固定式の武装を解除し、バーピットの脇に寄せる。

今装備しているのは、重力の力場を刃状に展開するロシュセイバーと、実体剣のコードメタルナイフ、現在は格納し、今は使ってもりはないが、試作参式斬艦刀のみである。

「すげえ、ロボットみたいでカッコいい……」

『遠からず、近づかずとこだな。ほら、一夏に篠ノ之。危ないから下がってる。あ、一夏。』

「はい?」

『これ、預かっている。』

「ちょ、うわっ?!」

一夏に、俺の魂とも言える『斬艦刀』を預ける。

斬艦刀の重さに負け、一夏は尻餅つくが、俺の知った事じゃないな。

一夏がわたわたとしていると、カタパルトフックがやって来て、足元で止まる。

一夏と箒は、急いでカタパルトから離れるのを確認したら、俺はフックに足を固定し、羽状のテスラドライブを展開し、背中の推進部を軽くふかす。

稼働良し、推進部良し、推進剤良し。

テスラドライブやブラックホールエンジンも安定して稼働している。

『カタパルト、脚部固定完了。各部に異常ありません。』

『こちらでも、コンディションオールグリーンを確認しました。Tドットアレイ展開開始……展開完了。射出タイミングを、稲郷君に譲渡しますね。』

緑色の力場が展開され、外に向けて力が発生しているのを感じる。  
テスラドライブ

Tドットアレイによる仮想カタパルトレールが形成される、カタパルト内部で発生する力は、全て射出するエネルギーに変わる。

慣性制御技術も凄いな……開発したテスラ研、荒ぶり過ぎだろう。

『I have control. 稲郷……エクスバイン式号機、出るっ！』

エクスバイン式号機は、テスラドライブ特有の、緑色の光が軌跡を描く。

カタパルトを出切る頃には、綺麗な軌跡を描いて飛んでいく。

出たら、上に向かって飛ぶ……むう、重力圏での飛行にまだ慣れてないか。

先方さんが待っていたようで、優雅にホバリングしてらっしゃる。

「まずは、逃げずに来たことを誉めて差し上げますわ。」

『それはどうも。こちら遅れて申し訳ないね。何分、他所の施設には慣れていないんだ。』

なにやら、プライベート・チャンネルで『ひゃあ、お、怒ってますか?!』とか聞こえたが、紳士的にスルーをしておこう。

「ふん、全身<sup>フル</sup>装甲<sup>スキン</sup>なんて着込んでいる、小心者に最後のチャンスをおげますわっ!!」

『ほう、一応聞いておこうか? (全身装甲? うん、全身装甲……だな、うん。)』

そうすると、オルコットは演技がかった感じで、此方を指差してくる。

なんと云うか、ババーン!! って効果音が聞こえてきそうな雰囲気だ。

「今から、泣いて謝ればこの決闘をなかった事にしと」すまないが小娘、トリガーに指かけながらいう台詞じゃないな?」っ! バカにしてっ!!」

おお、見事に不意打ちなタイミングで撃ってきたよ、あの子……



なんつつか、ただタカビーという感じじゃないね、ありや。

全く、念動力に目覚めてから人の感情に敏感になって嫌だね。人の顔色伺って生きているみたいでさっ!!

さっきから、レーザー特有の直線的な弾道を避けていく。

舐めるなよ、こちらエアロゲイターの弾幕を掻い潜って戦ってきただ。

この程度は、まるで問題ないな……強いていうなら、アリーナが狭くて戦い辛いな。

狙ったか、織斑先生……

「く……あたりな、さいっ!」

『断るっ!!』

この時、俺はやってはいけない事をしてしまった。

いや、いけない事じゃないが、それをしたら人間やめているとしか言えないのだ。

それは……

「れ、レーザーを切り裂いた……ですって?」

『……(やつちまったな。つい、癖でやつちまったよ。)(』

正確には、『切り払った』のだが、普通はレーザーを切り張ったりしない。

かつて、『ブリュンヒルデ』と言われた織斑先生……千冬さんなら、やっていたらしいね。

普通は出来ないらしいね……光を切るとか。

だが、『普通じゃない』戦いをしていたから、自然と出来るようになってしまった。

「なら……ブルーティアーズっ!」

『む、無線誘導兵器か。』

「フフ、さあ踊りなさい……私とブルーティアーズが奏でる円舞曲<sup>ワルツ</sup>をっ!」

『フフフ……少し不味いか? (この距離、状況……俺向きだな。)’

自分の前に一基、左に一基、後ろに二基あるのが分かる……内、前と後ろの攻撃をうまく利用すれば、四基ある無線誘導兵器を半分にできそうだな。

面白い、こう見えても心眼は鍛えているんだっ!

ヒイン……!

後ろからの攻撃を避け、前の一基がフレンドリーファイアで墜ち、左からの攻撃をコールドメタルナイフで切り払い、切り払ったレーザーが後ろに居た一基に当たる。

「そんな……ブルーティアーズを直接攻撃せずに、破壊する……なんて……」

『頭に血が上りすぎだ、お嬢……さんっ!』

ザンっ!

攻撃の密度を、上げる為に近付いてきた、ブルーティアーズの残りを、しまっていたロシュセイバーで破壊する。なんと言うか、人間をやめた気分だ……いや、元々まともな生まれじゃないけどさ。

推進剤を多めに焼き、爆発的推力を持って近付く。

ロシュセイバーを短めに展開し、コールドメタルナイフと一緒に構える。

両腕を前でクロスさせ、急降下の要領で加速していく……あれ？

この構え、夢で見たことあるような。

ジャキ

「おあいにく様、ブルーティアーズは、後二基ございましてよっ！

」

『……っ？！』

ズドオン……

side out

side 一夏

俺は、部長……燕の戦いに見とれていた。

急降下に急上昇、バレルロールなどが、無駄無くきれいに連続していた。

「凄い……」

「当たり前だ、奴は腐っても軍人だ。戦いのプロが、代表候補生とはいえ、たかが学生如きに遅れをとるものか。」

さっきまで、アリーナの管制室にいた千冬姉が、いつの間にかピットに降りてきていた。

い……いつの間に……呟いた筈も、驚いているな。

「ちひ、織斑先生。燕がプロっていつたい？」

執拗に燕を追いつけていたビットは、実は燕に弄ばれていたようだった。

信じられるか？ ビットの死角からの攻撃をナイフで反射させて、他のビットに当てて破壊するんだぜ？

達人業と言うか、人外の域だよな……お、燕が突っ込んだな。

「ふ、ほら……奴が勝負を決めるみたいだな。」

一瞬、視界から消えるほどの加速……そして、一刀両断の稲郷の太刀。

終わったと思つたが、腐つても代表候補生……持っていた大型レーザーライフルを盾に足止め、至近距離からミサイルだと？

あんなかくし球あつたなんて。俺じゃ詰んでいたな、『俺じゃ』あな。

ミサイルの爆発で発生した黒煙に、不自然な尾があつた。多分、相手が撃つたのは……

『悪いが、そいつは残像だ。惜しかったな、お嬢さん？』

その台詞を言って数瞬、刹那のような間隔でブルーティアーズに、肘打ちを決めるエクสบライン式号機……式号機と言うことは、壱号機が何処かにいるのだろうか。

ああ、ムカつくくらいに輝いてるな……あの入。

フルスキンの都合で顔は見えないが、きっと『ドヤッ』とした顔をして居るに違いない。

side out

side 燕

至近距離でミサイルが迫る。体がこの危機に対して、一瞬を引き延ばし、世界が暗転しスローモーションになる。

だから、それを見てしまった……沢山の文字が合わさり、『Ura nus』という綴りになった瞬間、頭がかち割られる様に痛む。

そして、念動力が強制的に引き出され、システムの至る所のリミッターが外れる。

エクสบラインは、馬鹿みたいな機動力を獲得した。

刹那の時をも動き回り、まずは、コールドメタルナイフを投擲しミサイルを迎撃する。

迎撃した際に起きた煙幕に乗じて、相手の下に移動する。

ロシュセイバーは既に手放し、拳を握る。

『悪いが、そいつは残像だ。惜しかったな、お嬢さん？』

「っ?！」

『拳だけで勝とうとは思わないさ……だがっ!』

再び、推進剤を一気に火を入れ、亜音速の如く速さで急上昇する  
っ！！

『拳一つを侮らない事だっ！』

剛ッ！！

瞬間、綺麗に肘打ちが決まる。ああ、思い出した……これ、麒麟  
ってヤツだ。

ウラヌスシステムによって引き出され、T Linkシステムによ  
って増幅された俺の念動力は、肘に刃のような物を形作っている。  
悲鳴一つ上げること無く気絶したオルコットを、慌てて抱き止め  
る。

ISは、深刻なダメージが発生した場合、強制的に解除されるらし  
い……ここは、地上からかなり離れている。

下手したら死にかなない高さだ……うむ、やり過ぎたみたいだ。

『悪いな……少し、やり過ぎたみたいだ。 全く、人民を守る筈の  
軍人が笑わせるよな。 君が起きたら、ちゃんと謝らせてくれ……』

はあ、独り言でも言わないとやってられんよ……前途多難過ぎる  
な、これがさ。

.  
.  
.  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第七話 閃き！切り払い！（後書き）

少し、長引いたので一夏戦は次に

燕は、夢でソウルゲインの『麒麟』をラーニングかドローしたようです。



## 第八話 ただ、切り潰し合う（前書き）

最初に言えることは、やらかしてスイマセンです。

……では、後編をどうぞ。

## 第八話　ただ、切り潰し合う

濃紺の騎士……加えて言うなら、緑の翼を羽ばたかせているというのか。

傷付いた（付けたとも言っ）金髪の姫を抱え、ゆつくりと降下している。

ちなみに、燕は変な調k y……教育を受けている為、しっかり？とお姫様だっこである。

side 燕

『稲剛、さつさと降りてこい。推進剤等の補給が済み次第、次の模擬戦だ。』

『了解、眠り姫を送ってから補給に行きます。』

『ふ、早くしろよ。織斑の機体がついたが、フィッティング等で時間がかかりそうだ。だから、ぶつつけ本番でやる。』

『わお、鬼の所業ですね。』

『茶化すな。急げよ。』

オルコットとの戦いで確信した……皆が皆ではないだろうが、彼女は『殺し』をしない。

いや、知っていたらいたで引くが、相手の効率の良い潰し方を知らないというか、どうしても『自分の戦い方』をしてしまうみたいだ。まあ、ISって突き詰めれば死ぬ事がある限り無いからいいかな。考えてもしようがないか……ただ、下手に踏み込んだら『切り殺しそう』になった。

さっきのアップカットの時、絶対防御を少し抜いたようで……その、オルコットのISスーツを少し切り裂いてしまった。ヤバイよ

なコレ、弁償は俺持ちなのか？

「ん、ふう……はれ？」

『目が覚めたか、体は痛まないか？ 後少しでピットだから、我慢してくれ。』

「は、はい……」

『（やけに素直だな……まあ、下手に暴れられるマシか。）』

とりあえず、ピットにさっさと戻り、オルコットに俺の制服の上を貸す。

コートみたいに、羽織ったり出来るから便利だ。

テストドライブの推進剤の超高効率燃焼が生きているな、殆ど補給する意味は無いが。

さっさと行こう、ISを装着している一夏を見る、白い機体……アレが『白式』か。

面白い……今のお前が、何処まで俺に食いついて来れるかみてやる。

『一夏、やれるか？』

「物にします。」

『分かった、胸を借りるつもりでこい……先にいく。』

テストドライブを全開にしながら、ピットから飛び立つ。

後輩と、久しぶりに試合が出来るだけ、来た価値があったかも知れない……IS学園に。

side out

side 一夏

「織斑、異常は無いか？」

「大丈夫だ、千冬姉……行ってくるよ。」

そうだ、一年くらい所在しれずのあの人に並び立てるチャンスが、漸く巡ってきたんだ。

ISで戦っていたのは、流石に知らなかったが。

箒が、こつちを不安そうに見ているな。

「一夏……」

「箒、大丈夫だって。少なくとも、模造刀でガチで切り結んだ時よりはマシだろうさ。胸を借りるつもりで行ってくるよ。」

「織斑さん……ちょっと宜しいでしょうか？」

「ん？ オルコットか。どうかしたのか？」

何故か、オルコットが話しかけてきた。

少し気まずそうだが、あれだけ言った手前、話しかけづらいのだろう。

「あの、稲郷さんの攻撃は、絶対防御を貫通する場合があります……その、体に怪我はないのですが、一応気を付けて下さいまし。」  
「分かった、じゃあ箒……行ってくるよ。」

「あ、ああ……死ぬなよ？」

「おうっ！ 織斑一夏……白式、行きますっ！！」

本来なら、凄まじいGが襲ってくる筈なのだろうが、ISのPIパッザーシャルキャンセラーCッが、それを殺していく。

さて、行こうか白式……無理無茶無謀かもしれないけど、俺とお前ならやれるさ。

side out

side 燕

アリーナに地に足をつけ、斬艦刀を振るい、その存在を確かめる……流石、じいちゃんが鍛えた刀だ。

ウンノウ先生と一緒に、刀やいろんなロストテクノロジーを再現していたって話は、本当だったみたいだな。

コイツなら、なんだって切り裂いてしまいそうだな。

「先輩……」

『来たか、構えろ一夏……良い顔をするお前なら、本気が出せそうだが、今は本気は出さんよ……こいつ！！』

「っ……ふおおおおっ！！」

ドンッ！ ギン！！

俺の斬艦刀と、一夏のブレードで鏝迫り合いをする……いかな、相手は本調子じゃない筈なのに、テンションが上がり始める。

ヒイン……カァン!!

割と本気で打ち込んだ斬撃を上手く弾き、距離を取り仕切り直すか。

悪くない、だがっ!!

「やばっ……?!」

『切り捨て……御免っ!!』

フォン……ゴ、ズドン……

横薙に斬艦刀を振るい、相手の防御ごと、一夏を吹き飛ばす……  
アイツ、後ろに飛んで威力を殺しやがった。  
受け身失敗して、盛大に土煙上げてるけどな。  
……来るっ?!

……ドンッ!!

「ふおおおおおっ!!」

『上等だあああっ!!』

奴め……もう最適化を済ませやがったのか。  
予想よりも少しばかり早いが、所詮は予想か。

其は、白く無垢なる輝きだった……  
其は、白く無垢なる翼だった……  
其は、白く無垢なる刃だった……

『それが、白式の……お前の本来の姿か。』

「そうだ、だから……本気の、全力全開で行くぞっ！」

『上等だ……こいつ……！』

ここからは、燕がマジで無我の境地に入った為、外部から実況します

濃紺の残像と白銀の残像……緑の軌跡と青の軌跡。

お互いがぶつかり合う毎に、甲高け、清みきった鋼のぶつかり合う音がする。

試作ながらも、『サンシキザンカントウ参式斬艦刀』を奮う燕。

対するは、『ユキヒラニノカタ雪片式型』を奮う一夏。

燕に相手が、後輩だからという驕りは無く、一夏にも先輩相手だからという畏れは余らない。何故なら、その手には姉が振るっていた刀があるのだから。

だが、燕には仲間から、師から託された刀がある。

互角にして、相違。

互いが何かしらに違うのだ。

『次を最後にしよう……お前はじり貧だろう？』

「ふ、燕もなっ……！」

互いの獲物に、変化が訪れた。  
一夏の持つ雪片式型は、刃が別れ、光の刃が現れる。  
対する燕は……

【試作参式斬艦刀、展開】

【T-Link……コンタクト】

【念動フィールド展開……ゾル・オルハルコニウムを展開】

其は、ただ分厚く、巨大だった……

其は、緑の輝きを放つ剛の剣だった……

其は、何処までも使い手を表す刃だった……

念動フィールドにより、参式斬艦刀の柄に仕込まれていた、特殊  
流体金属『ゾル・オルハルコニウム』を制御、固定する。

そして、それを刃とする……これは、参式斬艦刀の試作ではない。  
スーパージョル  
オルハルコニウム

この刀は、来るべき『鋼鉄の戦神』の刃……その名も『S・Z・O  
ソード』の先駆となる刃だった。

『互いに、賭けるものはかけた……行くぞっ!!』

「……っ！」

『「ううおおおおお!!」」

「いつけええええ!!」

『斬艦刀……念動爆碎剣、燕返しっ!!』

一夏が賭けたものは、『姉への尊敬と感謝』。

燕が賭けたものは、『己の誇りと仲間への約束』。

互いに譲れず、価値のつけようの無い重く、真っ直ぐな意志だった。



だが、終わりとは無情にやってくる。

たまに、空気を読まない場合すらある……

光の刃と念の刃……似て非なる刃同士がぶつかり合っている最中、それはやって来た。

『引き分け……ドローですっ!』

『「……は?」』

「「「はあああああ?!!?!?!?!!?!?!」」」

何が何だかさっぱりだった。とりあえず、二人で頭を捻りながらピットに戻ることにした。

雪片式型は、やる気を無くしたように光の刃を無くし。

試作参式斬艦刀は、その念動の刃を納め、もとの姿に戻っていた。

side out

「二人共、あれだけ盛り上げておいて引き分けとは……狙ってたか?」

「「そんな、とんでもない。」」

スパパァン!

「いてえ?!」

「あ、顎おつ?!」

上から、一夏と燕。

燕返しのようにV字に唸る出席簿……見事な殴られぶりである。

外野の篠ノ之とオルコットも引いている。

しかし、出席簿で顎を殴ってはいけません。

これは、よく訓練された燕だから大丈夫だけです。

「織斑から話すか……お前の雪片の展開した『唯一仕様能力』である『零落白夜』は、あらゆるエネルギーで作られた物を切り裂く。」

「へ? なら、燕の刃はなんで……」

「そこが問題だ……話してみろ、稲郷。」

あらゆるエネルギーを切り裂き、破壊する『零落白夜』でも切り裂けない刃……緑の燐光を放ち、凄まじいエネルギーを放つ、通称『念動斬艦刀』が少しも切り裂けないのか。

鋭い眼光と純粹な疑問の眼差しを送る織斑姉弟に、内心苦笑いを浮かべながら、口を開く。

「軍事機密……略して軍機が絡んで何とも言えないけど、俺の斬艦刀は、あの状態だと半実体剣……あらゆるバリアを中和する刃とか言えないツス。」

「ほう? まあ、良いだろう……結果は追って伝える。二人共、早く部屋に戻って休むといい。」

「はいつ!!」

クールな表情のまま去ったつもりだろうが、外野の二人は見てしまった。

ほんの少し緩んだ表情の……『姉としての織斑千冬』の表情を。  
だが、すぐにグダグダに疲れた二人に駆け寄る。

「お疲れ様……だ。」

「おう、タオルサンキュ。」

「いや、別に……ああ、今日は先にシャワーを使っていーぞ。あれだけの激戦の後だからな。戦士は労わないといけないからな。」  
「ははっ、お前は何処のお殿様だよ……」

……畜生が、いちやつきやがって……いかん、平常心だ。

説教が終わり、再びエクスバインを展開した燕は、腕の固定武装を取り付けたり、武装を量子転換して、引き上げ作業に戻る。

内心、機密とかばら蒔いたみたいなものだけど大丈夫かなとか考えているだろう。

そんな彼に、オルコットが近づく。

「あ、あの……少しよろしいでしょうか……つ、燕さんっ！」

「？……ああ、引き上げ済んだし、構わないけど？」

「そ、その……この間の……貴方とこの国を侮辱した事を謝りたくて……本当に、申し訳ありませんでしたわっ……！」

「……」

エクสบインを解き、スーツ姿のまま近づくと、ビクビクしながらも、逃げないオルコット。

燕の手が、オルコットの頭に近づき……

ぽふ、わしゃわしゃ

「……は、はれ？」

「はい、よく謝れました。」

正直な話、見た目は16歳とは思えない風格だった。オルコットの、タンクトップから出る引き締まり、筋肉質な腕のや胸板に胸キyunかもしれない。

「ああ、ごめん。女の子の頭を撫でたら失礼だよ……悪い悪い。」  
「い、いえ……それでは、失礼しますわ。」

やっぱり妹分を撫でる雰囲気をやっちゃったよ、とか呟きつつ、タンクトップのまま部屋に戻っていく燕。

その姿はどこか、全力で闘えた為か満足そうだった。

side オルコット

「稻郷……燕……か。」

圧倒的な加速力と格闘能力でもって、私とブルーティアーズを葬った『男』。

後で知ったが、ちゃんと実弾の射撃武器を持っていました。

最初は手加減をされたと、言められていた思ったが、格闘での全力だと織斑先生に教えてもらいました。

そもそも、彼には勝てる気がしない……試合の六割程、姿を目視出来ていません。

理想的な、強い男ではある……だが、同時に今まで味わったことの無い父性を感じました。

私の父は、婿入りした人でした。だからなのか、母には頭が上がりないようで、私にも弱々しく接してきました。

だから、燕さんに頭を撫でられた時に、まるで父に褒められたらこんな感じなのだろうと思ってしまったのです。

いや、年齢の差を考えたら、兄のような感じなのだろう。それにしても、あのかたは18の筈。

あら？ 日本でも十分結婚できる年齢じゃありません事？

side out

...to be continued

Noっ!!

ifもといNG

『もし、燕の機体がゲシュペンストMk ? type Sだったら』

蒼いボディに赤いライン……何処かの味方殺しな孤狼を思い出すか、スルーだ。

ゲシュペンストMk ？は、その鈍重そうな見た目とは反し、身軽にレーザーの雨をかわしていき、両手を前で打ち付けスパークさせると、盛大にジャンプする。

「かかりましたわっ！」

『フフフ…、究極足る所以……その身に刻んでやる。』

迫り来る大出力のレーザー二発を左右へのバレルロールで回避し、残りを高速で回転しながら腕のプラズマステークで弾くと、ピタリと止まる。

『究う極っ！！ ゲシュペンストオオ……』

「へ？ え？」

突然の魂のシャウトに、目が点になるオルコット……戦場でこれをやられたある兵士は、その凄まじさに発狂する程なのだが、彼女はまた普通のリアクションのようだ。

だが、燕は止まらない。

元特殊技術教導隊にいた、『カイ・キタムラ』少佐が編み出した、整備屋泣かせのゲシュペンスト究極奥義……その名は

『キイイイック!!』

「こんなネタ技にやられなんてえ……嫌ですわあ?!」

『究極ゲシュペンストキック』……何が凄まじいかと聞かれたら作者も困るが、魂のシャウトと共に打ち出されるキックは、時にラスボスをも倒すらしい……やる命知らずは居ないが。

『デッドエンドキック……ってな。』

もう、いい加減終われ。

．．．to be continued

## 第八話　ただ、切り潰し合う（後書き）

理想郷の某SSに憧れてやりました……反省も後悔もしない。  
でも、需要とネタが噛み合ったらやります（断定）



## 第九話 多分、こうして大人になる

side 一夏

「それでは、一年一組のクラス代表は、織斑一夏君に決定ですね。あ、一繋がりで、何か縁起が良いですね」

あの決闘から二日たったある日、朝のホームルームでいきなり、俺はクラス代表に選ばれていた。窓際の中央を定位置にしている男はどやとした顔をしており、なんとなく察した。社会の理不尽を。

「一応聞きますが……俺、引き分けましたよね？」

「ええ、ですg」俺は、お前に成長を思っつて辞退させてもらった。こついうことです。」

「あら、私もその方が良いと思いますわ。 なにより、考えてみればクラス代表とは、クラスの成長の基準のような者……ずぶの素人の一夏さんだからこそだと思えますわ。」

「そーそー。」

「やつちやいなよ織斑君、どうせ一年なんだし。」

なんとというつるし上げ、もとい担ぎ上げ……まあ、もう一回闘つて燕に勝てる気はしないが。しないが、しないがなにかやるせない。

「分かりました、任されたからには……徹底的にやらせてもらいます。」

「そうこなくっちゃ」

「いよっ！若大将っ！」

俺が若大将なら、燕は頭領か？ はあ、ただでさえやることは山積みなのに、面倒が増えたなあ……まあ、寄り道は嫌いじゃないけどさ。

箒や燕に、特訓の相手をお願いしようかな。

今さら、射撃の訓練しても伸び悩むだけだろうし、何より剣しかないのなら、剣を極めるほうが建設的だろう。

何せ、目の前に目標の壁（燕）が居るんだからさ。

side out

side 燕

相変わらずのキングクリムゾンだ……いい加減、慣れてきただろう？

……？ 俺は誰にいつているんだ？ まあ、いいか。

今さらかもしれないが、言わせてほしい。

俺の後輩であり、現在同級生の『織斑一夏』は、とにかくモテる。それはもう、女ホイホイじゃないかって程だ。

現に、製菓会社の陰謀により変貌した『バレンタインデー』には、下駄箱には山が、部屋にはランドキヤニオンが築かれる……しかし、その日は大抵のブツは、俺により締め出されるのだが。

あまりにも酷い為、チョコ禁止令が俺の卒業した次の年から発令

したらしい。

菓子なんかも、節度を持てば自由な我が母校も、堪忍袋が結合崩壊したようだ。

それほどモテる、一夏は現在……『織斑君、一年一組クラス代表就任おめでとうパーティー』なるものに参加している。

俺？ 俺は部屋に戻って、徹夜明けで、足りない睡眠時間を補おうとしたら、拉致られたよ。全く、無駄に行動力があるなうちのクラス……やれやれだ、本当に。

「あの……隣、よろしいでかしら？」

「？ ああ、構わないよ。」

黄昏ながら、全く違うことを考えながらDコン（汎用型情報端末で、ゲームとしてもパソコンとしても使える万能端末。価格はピンキリ）で、当たり障りの無い内容の報告書を書いていた俺の元に、心配した様子のオルコットがやってきた。

何故か、今までの高飛車な態度は成りを潜め、人を気遣える子になっていたのは、内心驚いたな。

「……あの。」

「何か？ 悪いけど、切実に切羽詰まっているんだ。新型機の為のデータ収集に加え、そのデータの簡易的な解析、それをまとめてレポートにするデスマラソン中なんだ。」

「そ、そのデータ収集に、私も付き合って良いですか？ その、たまには遠中距離の相手も必要だと思つのですわ……」

「……ふむ。」

ぶつちやけ、渡りに船だ。

一夏に射撃は求めていない。むしろ無理だ。

エクセレン少尉程じゃないにしろ、彼女の腕も悪くない。

ぶつちやけ、空中分解寸前の加速で翻弄したから楽勝に見えたが、『生身』ならきたねえ火花になったのは俺だろう。

そんな彼女と戦えるのは大きい……『PTX-016』の試作武装のテストもしたかった所だ。

【彼女が代表候補生でなければだ。】

まあ、どこぞの空気化必至の生徒会長みたいな『代表』じゃないだけ良いかもしれないが、彼女の国がバックでどうしてもチラチラしてしまう。

しかし、うちの上司（マリオン博士）ならデータごときくれてやれと言うかもしれないが、怖いのは連邦の方だ。

今は表立って動かないが、必ず陽の目を見る日が来るだろう。そうなった場合、彼女の国がスパイ容疑で潰されたら、俺がストレスでマッハだ。

ぶつちやけ、EOTI機関（勿論、日陰の組織だ）の連中並に、ブラッくな連中が連邦には居るから……誰とは言わないが売国奴ならぬ、売国奴が居るのは、もうご愛嬌で見守る（監視）しかない。

もしくは、彼女を通して国に渡り、巡りめぐって石動の女狐に渡ったら本気と書いてマジと読むくらい救いようがない。

マオ社長に殺される。

どうするよ俺……

Q、オルコットに相手を……

・お願いする。

・お願いしない。

無難に考えたら、お願いしないだが……言い淀んでる俺を、オルコットが上目遣いで見ているっ?!

さりげなく、涙目なのがポイント高いなチクショーっ!!

将来、『彼女』にやってほしいよ……はあ。

だが、予防線もある程度は、考えておかないとな。

想像と最悪の想定を絶やしてはいけない。

ならないなら御の字、なったらなっただで即行動。

Q、オルコットに相手を……

・お願いする。

・お願いしない。

しゃあない、誓約書でも書かせるか……

「分かった。ただ、テスラ研の新型だから、誓約書とか書いてもらうから。」

「わかりましたわ　では、後程」

何だろう……めっちゃ機嫌良く去っていったぞ、あの子。

まうた、何か面倒になら無いと良いな……まあ、経験則的には諦めろって、感じなんだけどさ。

わかってる、俺にトラブルが、雪の如く雪崩れ込んでくるぐらい。ああ、分かっているさ。なにせ、人生の始まりが『トラブル』から始まったし。

「やってやるさ……絶対に戻ってやるよ。最前線にな……」

燕の呟きは、誰にも聞かれることはなかった。  
今はまだ、渡り鳥は羽を休める……戦禍の空を飛ぶ為に、その鋭い刃のような風切り羽を研ぎ澄ませながら。

side out

パーティーから少したち、燕達はアリーナに集まっていた。燕に一夏、箒にセシリア。  
一人を除けば、一組の専用機持ちの集まりだ。  
しかし、箒も学園で一夏の剣を受け止められる、数少ない人物の一人だ。

訓練機も、燕の職権濫用（後ろ暗い話では無いが、体裁は良くない話ではある。）により確保している。

「んじゃ、先ずは俺とオルコットの闘いか……（オクスタンライフを試す良い機会だな。）」

「お願いしますわ。」

「俺達は下がってようぜ、箒。」

「うむ、邪魔になるからな。」

ISを待機状態のままにしていた一夏と箒の二人は、ピットまで下がる。

アリーナに残った燕とセシリアは、IS（燕の場合、厳密には違うのだが）を展開する。

セシリアは、ドラッグ……六基のビットを含め、完全に修復されたブルーティアーズを。  
そして、燕はエクสบイン式号機を展開した筈だが、何やら様子がおかしい。  
前に装備されていた両腕部の固定武装は何か別のものになっており、背中の翼は二枚だったものが四枚に、その手には厳ついライフルが握られていた。

「あら？ 前戦ったときと姿が違いますが……新しいパッケージですの？」  
『ああ、『コード・ファルケン』って言うんだ。さて、一夏っ！ 開始の合図は任せるぞっ！』  
『分かりました……試合、開始っ！！』

カーン！！

セシリアはブルーティアーズの脚部バーニアと非固定部位のスラスタ<sup>アンロックユニット</sup>で、燕は翼に内蔵されたテストドライブと背中の三基のバーニアで飛び上がる。

セシリアは一基だけビットのレーザータイプを射出して、移動しながら牽制射撃する。

どうやら、前回からの反省をしたのか、止まっていたはいいいと判断したのだろう。

ビットを牽制用に割り切り、一基だけで運用しているようだ。

対して、燕はその牽制弾を最小限の動きだけで回避し、手に持つ厳ついライフル……『オクスタンライフル』を構える。

『オクスタンライフル、Eモードっ！』  
「……………くっ！ブルーティアーズっ！」

セシリアは、燕の狙いがビットの破壊と判断したのだろう。急いで元の非固定部位<sup>アンロックユニット</sup>に戻すが、今度はそれ毎ライフルのレーザー（熱線）……………いや、ビーム（粒子）に撃ち抜かれて、レーザータイプのビット二基とミサイルタイプのビットを破壊される。

これで、ブルーティアーズの左半身の武装は潰された。いくら近接倒斜の燕でも、止まった相手には当てられる。

腐っても、ATXチームの射撃手『エクセレン・ブラウニング』から技を盗んだだけの事はあるようだ。

だが、曲芸じみた回避機動まで真似ることはないと思うが。

「むう……………（やはり、撃つ前から軌道から避けている。いくら、ISのハイパーセンサーで360°の視界が確保されているとはいえ、やはり燕さんは何かしら才能を秘めっ）」

『この距離、もらった……………オクスタンライフル、Wモードっ！』  
「しまっ?!」

勝負は、一瞬の油断と無駄な思考が命取りである。

オクスタンライフルには、理論上では光の速さで運動エネルギー弾、所謂実弾を打ち出すレールガンとしての『Bモード』、光子加速砲である『Eモード』の2つを使い分けが、出来る。

『Wモード』とは、オクスタンライフルのリミッターを解除し、その二つのモードを同時に行使する事である。

科学エネルギー（ビーム）と運動エネルギー（実弾）……………2つ合わせ、さって最強に見えるし、実際に前大戦でもヴァイスリッターのオク



スタンランチャーがその有用性を証明した。

だから、このオクスタンライフルも作られたのだ。

グウーー!!

『試合終了、勝者……稲郷 燕!!』

「えうう……射撃には、自信がありましたのに……」

『まあ、俺は叩き上げだかね……色々と出来ないと、まずかったのよつと。』

燕は、展開状態のエクスパインをもとに戻すと、セシリアに近づいて手を向ける。

ISが強制解除された事により、しりもちついていた彼女を起こす為にである。

「あう、助かりますわ……」

「気にするなつて、友人だろうが？」

「（そう、まだ友人……告白もアプローチも、まだしていない……綿密に戦略を考えないと。）」

「……オルコット？」

「わひやつ?! な、ななな何でもありませんわっ!」

「? そうか、ならいいか。」

本人が否定しているんだし、深くは言及したらいかんだろうと、燕はアッサリと引き下がる。

軍隊みたいに、上としたの繋がりがハッキリとした場所にいた為

か、案外ドライな面がある燕……まあ、何時も周りの奇行（自分は棚に上げている）に晒されている分、メンタルにはそれ相応に高まっていると思っっているのだろう。

燕とセシリアが模擬戦を終えた為、ピットに待機していた一夏と第の二人がアリーナに出てくる。

今度は、二人が闘うようだ。

セシリアは、接近型の呼吸をつかむ為に食い入るように見ている様子を、燕はにこやかに見ながら報告書地獄と戦っていた。

S R XチームからA T Xチームに移籍したとはいえ、本人が書かなければいけない資料は、腐るほどある。

嫌みな上官は死ねばいいとか考えながら、燕は戦い続ける……報告書などと。

燕達が、アリーナで模擬戦（端からみたら、凌ぎを削る殺し合い）を終える時刻…… I S 学園の制服を着た、色々……残念な少女が、 I S 学園の正門前に居た。

「ここが…… I S 学園。」

期待半分、戦慄半分……何かに会いたいと言う欲求もあるが、それに付随するであろう恐怖の権化に、会いたく無いという表情だ。

「い、一夏に会うためよ……稲郷部長が、まだ怖いとは限らないわ鈴……ファイト、オーっ。」

「何してるんだ、お前は。」  
「にやわーっ?!」

他人には、恥ずかしくて見せられない場面を見られ、のたうち回りたい衝動を抑え込みながら、声がした方を見たら、そこには……

「……誰？」

「まあ髪色とか違うし、しゃあないか……久しいな、マネージャー1号？」

「うつそ、稲郷部長……え、なんか変わってないというか、髪の毛、え、え？」

振り返った先には、銀髪のしぶメンで、ISスーツだろうモノの上にフライトジャケットを着ている男子が居たのだ。

しかも、自分としては鬼のような練習を、笑顔で下す恐怖の権化がよく呼んでいた呼び名でよんでくる。

「まあ、気にするなつて。どうせ、俺はお前の同級生なんだ……なんなら、気楽に燕つて呼んでも良いぞ？」

「……むう。なんか、髪の毛が艶なしブラックの頃より優しく無い？」

「Need to no……だったかな？ 君も軍人の端くれなら分かるんじゃないかな？」

「はあ……知る必要は無い、か……まあ、良いのかな。」

「詫びとってはなんだが、ここを案内しようか？ 一応、一日の長って奴なんですね。」

「……まあ、お願い。」

「お前、方向音痴だから……大方、話しかけなかったら、ISを起動して空から探すとかしたんじゃないか？」

「にやにをぉ！！ 私だって、代表候補生なんだから、それくらい駄目なのは分かるわっ！」

ハハハ、ゴメンゴメン……笑いながら少女、仮称『マネージャー1号』は、燕の案内についていった。

年齢が年齢なら、ただじゃれているように見えるが、残念ながら、ここは色を知り始めた高校生が多い場所。

燕が、用事ができたと離脱したので、ついていこうとしたらこのストーカー状態。

心なしか、物陰として使っている壁にヒビが入っている気がする。

「ふ、フフフフ……彼女とは、お話が必要みたいですね……」

また、トラブルの予感がする……マネージャー1号を弄っていた燕は、感じた寒気にくしゃみをした。

...to be continued

## 第九話 多分、こうして大人になる（後書き）

最近、モンハンでスラッシュアックスにまたはまり出したり、カラオケでJ A M p r o j e c tを歌いまくったら、喉から血が出た秋永です。

皆さんは、腹式呼吸を学んでからこんな事をしましょう。

さて、本題に。

今回は繋ぎの話＋会話のキャッチボールの練習。  
中々上手く行きませんね……。

## 第十話 中国からの転校生

side 燕

一年一組の教室。

一夏の周りには、相変わらず人が集まるようだ。

「そういえば、二組に転校生が来るみたいだね」

「中国の代表候補生だけ？ どんな子かな？」

「でもまあ、私の存在を危ぶんでの転校ですわね」

「……一夏、やはり気になるか？」

「ああ、強い奴と戦いたいのが本音かな。燕とだと、レベル違いすぎてただの蹂躪になるし」

「うるせ……」

最近、後輩が毒舌になってきた……昔はあんなに真っ直ぐだったのに。

時がたつのは早いなあ……オルコットの天然発言に癒される。

やっぱり、ゆかなボイスはいいな（この行は、作者の発言）

「でも、織斑君が優勝したら、皆が幸せなんだよ？」

「そうそう、学食でのデザートタダ券半年分だよ！！」

「まあ、専用機持ちってうちのクラスと、四組だけだもんね。楽勝だよ」

ガラっ！！

「悪いけど、その情報遅いよっ！」

話は聞かせてもらったっ！と言うようなノリで、髪の毛をツインテールでまとめ、八重歯を輝かせながら、若干キツそうな目の少女が現れた……なんだ、昨日のマネージャー1号か。

高校デビューとは、ツツコミ待ちなのかもしれないが、俺は突っ込まんよ。

周りも若干シラーっとしてるし……他人のふりしとくか。

「……お前、まさか。鈴……か？」

「そうよ、中国の代表候補生の凰<sup>ファン</sup> 鈴音<sup>リンイン</sup>っ！ 私が二組のクラス代表になったから、今日はその挨拶に来たって訳って、何よその薄いリアクションっ……！」

「いや……だって……なあ？」

バツカ野郎、こっちに話を振るなよ。

かなり気まずい理由なんか説明出来る訳無いだろう……だって、  
後ろに般若がいるんだからさ。

спан！

「邪魔だ、さっさと自分のクラスに戻れ。」

「ち、千冬さん……」

спан！

「織斑先生だ、馬鹿者。」

可哀想に、二回も殴られるなんて……軽くたんこぶになるぞ、あの威力。

あ、嵐のやつが涙目になりながらガン飛ばしてきたな。

「覚えときなさいよ……一夏っ!」

ハイハイ、一夏一夏。

コイツの周りには、トラブルとフラグが嵐の如く渦巻いているな……  
ハハハ、俺、生きて皆の元に帰れるのかな？

昼飯時に何かあると言う嫌な予感がした為、購買で軽く摘まめる物を買って、俺は校舎の屋上に来ていた……

Dコン（多目的対応型情報端末）この学園にいる間、色々な事があつたようだ。

DC残党の討伐の際に現れた、二機の特機。

その内、女性型は味方になったようで、何でもイスルギ重工の次期トライアル提出予定の試作機らしいが……イスルギがなあ。

どうも、きな臭い……彼処の社長『石動 光子』の胡散臭さと女狐っぷりは本当にヤバイ。

ヤバイのはそれだけでは無い……DC残党の撤退の助けをしたらしいが、交戦したATXチーム動きがどうもゼンガーの兄貴に似ているらしい。

判明しているモーションのデータを送るとの事だが、今は見れな



いな……何せ

「何か用ですか……『更識先輩』？」

「いけずな方、同じ年で世界が違えば幼なじみだったかもしれない仲なのに。」

「いや、いきなりそんなダイナミックな伏線張られても困るんですけど……」

この扇子で口元を隠しながら、いきなり何かの伏線を張った人物は『更識<sup>サラシキ</sup> 楯無<sup>タテナシ</sup>』……この学校の生徒最強の称号である『生徒会長』を務めている。

その実態は、対暗部用暗部……この学校に多数いる要人などを狙う連中に対するカウンターであり、古くから忍者な事をしている方だ。実年齢は不m。

ゴッ！

「あら、レディの歳について詮索するのは野暮ですよ。」

「ツ……いや、お互いに年齢不詳なんですから、頭の中で考えるくらいは見逃そうよって、何？ 読心術でも使えるのかよっ？！」

「さあ？ 学校にも仕事を持ち込んだじゃう野暮なっーちゃんには教えませんよ。」

「っーちゃん言っなっ！」

こんな感じで、良くはぐらかされる……年季の差って奴がありありとわかる。

向こうは、物心つく前から訓練されているが、こっちは軍務自体は

二年近くしかしていない。

多分、腹芸とかは彼女に勝てないだろう。

「あらあら、そうむくれないの……飴ちゃん食べます?」

「あんまし、挑発とかしないでくださいよ。貴女らしくない……午後とかあるんで、失礼します。」

舌戦や腹芸で勝てない以上、関わり合いにならないのがベターだろう。

はあ、ヘタレみたいな思考だなチクショー。

午後の授業を終え、エクสบインによる武装のデータを纏めたりだとか、その他諸々の内職を終え、アリーナで特訓に勤しんでいるであろう一夏達を覗きに來たら、いつの間にか修羅場が展開していた。

主に、一夏をめぐつての篠ノ之対凰であり、オルコットはそろを見てポカーンとしている。俺もポカーンとしていたいが、アリーナを借りた責任者として見過ごすわけにいかない。

「篠ノ之、凰……お前ら、何をしている?」

「「と、稻郷（部長）……」」

おかしいな、斬艦刀を持って話しかけただけなのに言い争いが収まった。

一混乱を想定して出したが、中々面倒なく済みそうだな。

「篠ノ之は……まあ良い。だが凰……テメエは駄目だ。」

「な、なんでよっ！私は一夏も「特訓したいのは分かるが、お前は二組だし、アリーナを借りた人数は四名。俺は監督責任があるし、オルコットや篠ノ之は一夏のリン……特訓の相手だから、外せない。」ぐぬぬ……」

凰が、この阿呆が苦手なのは正論、若しくは揺るぎ無い理論武装での攻撃だ。

どうも自信過剰なきらいがあるが、それも彼女が人一倍努力家だからだ。

だが、それにかまけて周りを平等に評価しない悪癖もある。

だから、この子は一度真の意味での挫折を味わうべきなのかもしれない。

丁度良いイベントも間近に迫っている……優勝などどうでもいいが、お互いの成長の為だ。

一夏には骨を折って貰おうか。

「なにより、コイツはクラス対抗で優勝する為に特訓をしているんだ……『二組のお前』と特訓をする馬鹿が何処にいる？」

「っ？！……失礼したわ。」

退いたか……まあ、良いだろう。彼女とて、何時までも甘えられる立場じゃない。

『代表候補生』って、国のために戦う軍人みたいなもんだ……お互いに、お国の為に骨を折ろうじゃないか。なあ……鳳 鈴音？

「ほれ、今日も楽しい地獄の特訓だ……気張って行こうやないの。」  
「……はいつ！」「」

はあ、疲れるよな……たく、俺って損な役回りだよな。  
リターン少ないし、リスクやコストだけは高いし。  
いつになったら、俺は幸せを掴めるのかね？

side out

side 一夏

示現流の鍛練は、とにかくスパルタの一言だ。

そして、示現流を納めている燕のかす特訓もまた、スパルタだ……  
自分に厳しいから、手に包帯はもちろん、練習中に掌の古傷から  
血が出るなんて当たり前だし、たこや、まめが出来るなんて日常茶  
飯事。

まるで、自分を殺しているようだと思っていたが、先生……俺の  
剣の師匠であるウンノウ先生曰く『示現流とは、己をただ一振りの  
刃と成し、なによりも早く敵を切り裂く殺人剣だ』と悲しそうに話  
していた。

俺はまだ到達していない……諦めるつもりはないが、到達出来ないだろう領域の『己を活かす剣』である、活人剣を習得したい。それが俺の人生目標であり、目下の目標の一つである『燕を越える』というモノの近道だと信じている。

そして、燕の養祖父のリシュウさんには『万が一、アイツがバカをしたら止めてやってほしい』とまで頼まれた。

自分の親類にすら、『何れ、何かの形で壊れてしまう』と言われている彼は、何なのか……何故、リシュウさんは俺に頼んだのか、俺はこの事を理解したのは、遙か遠い先の話だった。

side out

...to be continued

## 第十話 中国からの転校生（後書き）

鈴を愛でる回の筈だったのに、いつの間にか楯無さんとシリアス一夏に全部かつさらわれていた……凰 鈴音氏には申し訳ない事をしたと思う。

だがあれだ……蒔くぜ蒔くぜえ、伏線蒔くぜっ！！

## 第十一話 滴るのは誰の？（前書き）

アニメ版ISSが終わりましたね……うむ、鈍亀更新なのかな私。

## 第十一話 滴るのは誰の？

最近、どうも自分が弛んでいる気がしてならない……燕はそう考えていた。

技の切れ、スピード、破壊力？の何れもが低下している気がしてならない。

実際は、周りの面倒を見ていて、周りの力量が上がってきてそう感じているだけなのだが。

手に入れたものが、手からこぼれ落ちるのは由々しき事態だと、燕は一念発起する。

【修行だっ！】と……。

side 燕

ただ、一心不乱に木の幹に木刀を打ち込む。どれ程の間、丸太に向かつていただろうか？

打ち込んでいた幹には、真っ直ぐに付いた打撲痕が残っている。

足りない、まだ足りない……掌には既に血だらけ、若干歪んでいるようにも見える。

だが、『この程度』では、直に治ってしまうだろう。

その証拠に、既に手から出ていた筈の血が乾いてこびりついてる。

急に、やるせなくなつて林に寝っ転がる。

「くそっ！……俺にはまだ、たりないのか？」



ずっと、追いつけたものがある。今だって、追いつけている。

### 【雲耀の速さ】

養祖父に、その業の存在のみを教えられ、自らも求める示現流の一つの到達点とも言える極み。

相手に脊椎反射さえ許さない速さで太刀を振りぬき、一刀両断する業。

示現流の構えは、二通りである。通常時の上段の構え『蜻蛉<sup>トンボ</sup>』、閉所等の狭い場所で使われる横溜めの構え『横蜻蛉』……この2つのみである。

じいちゃんが、蜻蛉で振り抜くと『雲を引く』から怖い。

俺はまだ雲を引かない……やはり、まだまだ鍛練が足りないのか？

まだ、俺は先に進まないといけない、行かないと取り戻せない……

…『奴』の喉元をかつ切らないと安心して、青春を楽しめない。

立木打ち……続けるか。

side out

side セシリア

私は、圧倒されていた。

鬼気迫るその姿に、その顔に……寮から、竹刀袋だったでしょうか？ それとタオルを持った燕さんが裏山に歩いていくの見た私は、思わずついて行ってしまった。

ある程度奥まで行くと、タオルを木の枝にかけ、彼は竹刀袋から木刀を……いえ、『刀』を抜き出しました。

鞘から刀を抜くように、何の躊躇いもなく、それが当たり前のように……なのに、私はその木刀の出す存在感に圧倒されました。

タオルをかけた木に、一太刀、また一太刀と打ち込む毎に空気が震え、木の皮が砕け、幹が凹んでいく……凄い。

なのに、彼は不満そうに寝転がると、汗を拭うこともせずにピタリと止まる。

私が、彼に近寄ろうとすると私を静止する何かが現れました。

「今の彼に近寄らない方が良いわ……気が立っているから、バツサリ斬られるわ。木刀であっても、忒の太刀要らずの威力と切れ味は変わらずよ?」

「更識……会長……」

「正解……でも、今は大人しく見ていましょう?」

「……（コクン）」

額かないと殺す……流石にそう思っではいらっしやらないでしょうが、有無を許さない瞳に私は、同意せざる得なかった。……悔しい、何故かは分からないけど、悔しく思いますわ。

「彼ね、私と同業者なの……でも彼はね、人や国の為よりも自分の為に戦っているっていうのかな……ううん、それも違う。彼……ムカつく事に一人の『女』の為に、生きているかも分からない女の為に戦っているの……貴女、信じられる?」

「……っ」

信じたくなかった……初めて興味を持った異性が、他の……生きているかも分からない女の為に戦っているなんて。

つまり、出来レース……勝ち目のない戦いみたいじゃないですかっ  
!!

「さて、今日は危険だから戻ろうか？　主に、織斑先生の出席簿が  
だけど。」

「……はい。」

納得が行かない……　だけど、彼女の言い分は最もです。

そろそろ寮の就寝時間で、部屋の外で彷徨っているのがバレてしま  
えば、織斑先生の容赦ない一撃が待っていますわ。

うう……　それにしても、燕さんと生徒会長の関係って一体……　気に  
なりますわぁ……

s i d e   o u t

セシリア達が、燕の立木打ちを目撃して、次の日……　燕は全く堪  
えた様子はなく、食堂に現れた。

しかし、その手には軽く包帯が巻かれていた。

「おはようございますわ、燕さん。」

「おはよう、オルコット……　ふぁあ、寝っみ。」

「もう、大丈夫ですよ？」

「まあな、飯食って軽く走れば起きるレベルだし。」

彼女は聞くに聞けなかった。なんで、彼が気だるそうにしている  
のか知っているに。

「おはよう、ぶー……燕。」

「はい、おはようさん。（……俺の歳がバレたらどうしてくれる？）」

「……（なんか、親しげですわ……）。」

朝食に燕は、典型的な日本の朝食である玄米に味噌汁、ほうれん草のおひたしに緑茶を、セシリアはコーンフ레이크に紅茶を、凰は日替わり朝食なる物に挑戦していた。

「一夏はともかく、燕も大概人外だったのね……（やっぱり、危うく敬語が出そうになるなあ。）」

「俺だって、事情が無ければ有象無象を蹴散らしてでも、此处には来ない。」

「むう……（慣れない？いや、何か違いますわね……これは彼女が敵ではないという事かしら？）」

「ふうん、ぶー……燕も宮仕えって事なのね。」

「代表候補生共といい一夏といい……トラブルには事欠かないと織斑先生に言われていたが、事実だよ……泣いていいと思うんだ、織斑先生や山田先生程じゃないけどさ。」

「ああーうん、そうね……」

「あ、頭が痛い話題ですわあー……」

暗に、最近のトラブルメーカーな二人、特に凰には少し後も関係あるであらう事を釘を刺す燕……描写をしていないが、アーナの使用許可の書類や、連邦への報告書、マリオン・ラドムへの報告書

などなど、徹夜で書いている事がしばしばある。

勿論、本格的な無茶は休みの前日や特訓が無い時にしている……72時間戦い続ける、伝説と言われた企業戦士に片足突っ込んでいる燕だった。

「ふう……ごちそうさま。俺、一足先に行って少し寝るわ。今からなら、5分くらい眠れるだろうし……」

「ごちそうさま、私もクラスに行って皆と話しよう」と。

「ごちそうさまですわ。私も、少し予習しますわ。」

IS学園……本日の朝は、通常運行である。

一夏ラバーズが騒いでいるように見えるが、彼女らだって学生が本分である。

たまには、静かな日常だって必要である。

side 燕

「もげる、リア充。」

「話を一通り聞いてそれっ?! どう考えても俺が被害者っすよねっ?!」

たまには寝たい夜……立木打ちを早めに切り上げて、明日の準備を終えて、さて寝ようという時に、この後輩……来やがった。

「大体な、端から見たらお前と篠ノ之と凰の痴情の纏れで喧嘩しているようにしかみえねえよ（俺だって、俺だってイチャつきてえよコンチクショーがあ）……」

「いや、何で痴情の纏れなんすか？ どう考えても、俺が二人の喧嘩に巻き込まただけでしょう。」

「……テメエ、いや、何でもない。お前が処置不可なのは、三年前くらいに、弾と一緒にギヤルゲ主人公と恋愛原子核の方程式で求め、絶望したから良いやうん。」

「何勝手に人の事を絶望視してるんですかあんたはっ！！」

「止めてよね、今が夜だって忘れてないかい？」

「ぐっ……」

はあ……状況を確認しようか諸君？

我が後輩にして、人類種約半分の天敵『織斑一夏』は、例によって例の如く、女性関係のトラブルを起こしやがりました。

状況は、一夏のファースト幼馴染み（この時点でおかしいがスルーで）『篠ノ之 篁』が一夏と同じ部屋だと何処からか聞き出したセカンド幼馴染みこと『凰 鈴音』が颯爽と乱入。

自分が一夏と同じ部屋になると主張してきたからさあ大変……詳しくは支離滅裂な内容故に理解が出来なかったが、結局は凰が昔にした約束を一夏が正確に覚えておらず、凰が激怒。

やいやい騒いでいたところを巡回中の織斑先生が伝家の宝刀『出席簿』で止めたらしい。

作者も、このイベントを完全に回避したと思ったのに、とか言っていたが……

いかん、電波が入ったか？

「よしわかった、お前は一度脳をCTしてもらえ。致命的な欠陥があるに違いないよお前。」

「なんで、そんな話になるんすか……たく、ワケわからねえ。」

一般的な男子からして、イケメン指数が高く、第一級フラグ建築士の癖にそれを総スルーする君に言われたくないだろうね……いや、右腕にどす黒い念が溜まって、白く嫉妬と書かれたマスクが握られている気がするが、俺は全力でスルーしたい……まだ、ネタキャラになりたくないぞ、俺は。

「ま、悩めよ少年……丁度、皆思春期だ。悩んで悩んで、自分だけの答えを探しなさんな。」

「……まあ、そんな感じですよ。失礼、しました。」

ガチヨンと、音を立てて閉まるドア。

やれやれ、おっさん臭い台詞が出てきたもんだよ、自分の口から。

「はぁ……嫌だねえ、愚痴だよなあ、今の。」

俺は一人、月を見ながら茶を飲んでいた。

どうも、手元が寂しい……木刀を持っているけど、やっぱり寂しい。何を求めているか、自分でも分からない……得物？ 敵？ 色？

……どれも当てはまらない気がする。

何だか、変な気分だ。

もう、眠ろっ……おやすみなさい。

.  
.  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



## 第十一話 滴るのは誰の？（後書き）

……それにしても、チヨロイさんが……目立って……いる……だと？  
いや、本当に楯無さんのネタやチヨロイさんのネタは息をするように出てきました。

一応、楯無さんのは根拠はありますよ？

リシュウ先生のご先祖さまは、大日本帝国時代から軍人で、特務を任される程の地位を持っていました。

詳しくは、超機人 龍虎王伝奇で（オイ

まあ、日本政府との古いコネクションを持っていそうな稲郷家なので、養子？の燕も浅からぬ繋がりと考えました。

故に、暗部にあたる更識の家と燕も何かしらの繋がりとすると勝手に妄想しました。

まあ、作者の妄想を垂れ流す小説ってのは相変わらずっすよ。

感想やこうしたら読みやすいよ等の提案、誤字の報告等をよろしく願います。

## 第十二話 First Contact

少女は、一つ上の兄を待っていた。

喧嘩っ早く、浪費癖があるけれど、優しく曲がったことが嫌いな兄を。

彼女の名前は『アスマショウコ吾妻笑子』。

彼女は難関だが、受験料しかかからないIS学園を受け、ISとの適正をB+で合格した。

ちなみに受験料は彼女がバイトで稼いだ。

……何故待っているかという今回のイベントを兄に話したら、是非観たいと言うものだからから、担任に聞いたら条件付きでOKをもらった。

その条件も、悪さをしないなどの軽い念押し程度なのだが。

「悪いな笑子、道迷っちゃったよ。」

「笑いながら言うな全くもう、そろそろ最初の試合が始まるから急ご。」

「がってんだっ！」

やって来た彼のは『アスマコウタ吾妻吼太』……普段は浅草の高校に通う古きよき番長気質の青年である。

喧嘩っ早い根は優しく、妹思いであると、近所では評判である。

「（なんだ……どうもざわつきやがる。何かあるってのか？）」

『（気を付ける吼太……悪意ある者が迫っている。）』

「っ?!（本当か口ア……たく、きな臭い事になってきやがったな）」

……」

「？急に立ち止まってどうしたのさ？」

「いや、なんでもねえ……それよりさっさと行こうぜ。」

「????」

兄妹はかけていった……賽は既に投げられている。

何が始まり、何が起きるのかは今は誰も分からなかった。

## side 一夏

「一応聞いておくが、これは試合だ……俺みたいに、絶対防御をぶち抜く真似は控えるよ。」

「いや、そんな化け物はアンタだけだから。」

クラス別対抗戦の第一試合は、『一組対二組』。

要するに『俺vs鈴』である。

いきなり部屋にやって来た鈴と箒が言い合いはじめて、気が付いたらとばっちりを食らって……今に至る。

部長に……燕に話したら、箒に話を聞きに行き、言われた一言が『またお前か』だった。

何がなんだがさっぱりで、今の今まで混乱している。

何せ、鈴と小学校の頃に約束したのは、『料理が上手になったら、酢豚を毎日奢る』……だった気がする。

いや、よそう……今は試合に集中すべきだ。

ふと、周りを見ると部長の姿は無かった。

代わりに、展開した白式の腕部装甲に挟まれた紙があった。

それには……

【頑張れ、青少年 by 燕】

と書かれていた。

よしっ、いつちょ決着をつけますか……ここ数日で、今までの剣道や剣術の技術をISでの戦闘技術へのフィードバックは粗方済んでいる。

今の俺を、阻むものはないっ!!

side out

side 燕

処置なしの一夏を置いてきて、早々に観客に俺は来た。

なんと言っか……鈍いとかそう言うレベルじゃない。

あれはきつと質の悪い病気が何かに違いない。だから、早々に見切りをつけて観客席に来た俺は悪くないと思うんだ。

観客席に男がいるな。なんて思いつつ、席取りしてしてくれたオルコット達の所に行く。

「いよっ。」

「あ、燕さん……その、どうですの一夏さんは？」

「さあな、アイツはもういろんな意味で手遅れだな。」

「なんというか、心中お察しますわ……」

苦笑いをしながら返してくるオルコットに、参ったもんだよ奴にはと呟きながら、彼女の隣に座る。

彼女を跨いで向こう側には、私不機嫌ですを隠さない篠ノ之がいた。

「はあ……どうした、篠ノ之。そんな、不機嫌を隠さない表情をして。」

「む？ い、いや……冷静に考えたら、彼女も一夏の被害者な気がしてな……」

「「ああ……」」

不意に、オルコットとため息とかリアクションが被る。

オルコットは恥ずかしそうにしているが、今さらな気がするんだが……まあ、客観的に一夏を見ている彼女ですら納得なのだろう。そう、

【織村一夏はイケメン】

なのだ。

徹底的に、言葉使いやスキル……余すことなく発揮し、女を落とす。

故に、中学三年と高校一年の頃に、弾などの剣道部連中にどうしたら奴の唐変木、もしくはスルースキルを治せるかを相談されていた。勿論、知らないと言わりと遠回しに言って、追い返したが。

「まあ、この試合が終わったらアイツと……鈴と話してみたらどうだ？ アイツって意外と世話焼きだから、意外と話し合うかもな。」

「……考えておく。」

「まったく、素直じゃない方ですね。」

やいのやいの言い合いを始めた二人を放っておいて、俺はあることを思い出した。

約二年前、バーニングPT全国大会で起きた火災事故。

サーバーの過負荷だとか、予選落ちしたプレイヤーのやつかみによる放火だとか報道されたが、実際は違った。

### 【エアロゲイター】

俺に、戦場への片道切符を叩きつけた連中である。

当時、まだ小佐だったイングラム・プリスケンの手引きにより、二機のPT『ゲシュペンストMk ? Type - TT』を起動させた事に全てが始まったが、今は関係無いから試合を見るか。

「成る程、確かに甲龍<sup>シエンロン</sup>だな……見た目だけな。」

全体的に丸みを帯びた装甲に、分厚い装甲板。

ISやPTに限った話じゃないが、空中での機動兵器の格闘は体当たりみたいなものだ。

地に足を着けておらず、不安定で力がよく入らない状態からの格闘など、バーニアやスラスターの『出力』と『質量』頼りになってしまう。

重ければ重いほど、攻撃に乗る重さ大きくなる。

だから、前線での兵士であるPT構想の他に『特機構想』と呼ばれるものがあるが、今は割愛させていただく。

つまり何が言いたいかというと、速さを求めた結果に装甲を『軽

く』した一夏の白式で、鳳の甲龍と正面からやりあうと部が悪いのだ。

「たくつ、コイツは面白い試合になりそうだなオイ。」

俺は一人、隣でやんややんやと喧嘩をしている二人を尻目に、手元のエクسバインの待機状態の腕時計を触りながら考えていた。  
【どうやったら、勝てるのか】を……もう、負けない為に。

side out

side 一夏

両腕の反応……よし

各部スラスターの反応……よし

エネルギー残量……満タン

不安な要素は無い、あるとすればこのチリチリとした空気ぐらいだ。

「はぁ……うしっ、グダグダ考えてもしゃあないな。勝ちやあいなんだよなっ!!」

カタパルトフックに脚部装甲を固定して、射出体勢を取る。  
カタパルトレールに左右に、仮想力場が展開され、ハイパーセンサ

ーにカウントダウンが表示される。

3 . . . 2 . . . 1 . . . 0 っ!!

「…………っ！」

何時もより、若干強いGに歯を食い縛る。

アリーナに弾き出されたら、体勢を整え、先に来ていた鈴に近寄る……  
おつかない表情がハイパー<sup>かお</sup>センサーに頼らずとも見えるぞ。

「一夏あ…………」

「な、なんだよ？」

こ、声にドスが聞いてやがる……怒った千冬姉程じゃないが、怖いものは怖い。

別に、気圧されてないんだからなっ！

「アンタが、約束の意味を正しく理解出来ないのは……まあ、想像していたわ。だけどっ！」

ブルッ？！

俺の手が震えてる…………だと？

師匠との修行で思った胆力が、無駄だと言うのか。



どんだけヤバイんだよ、鈴。

「アンタがこの間言った、『貧乳』という発言に対して、謝罪をするって言うならっ!! 特別に十分の九殺しから、二分の一殺しにしてあげるわっ!!」

「それでも半殺しかよっ?! ん? 謝罪したら、手加減してやるって意味か、コレ?」

「そうよ、私の慈悲って奴よ。」  
「……」

確かにこの間、鈴を傷付けたのは、俺の発言だ。

だが、ここで謝ると言う事は、鈴が全力で俺と戦わないという意味ともとれる。

だから、俺は……

「確かに、この間悪いのは俺だ……だが」

「……だが?」

「だが断るっ!!」

「っ?!」

「全力で来いっ! 謝罪なら何やらはその後だっ!!」

「上等……吼えたわね、この唐変木っ!!」

俺は、全力の鈴と闘いたい。謝罪なら後です。土下座しろってならしてやるさ。

だが、今は……今この一瞬は

「今この一瞬は、力こそが全てだっ!!」

鈴と俺、大振りな二本の青竜刀と尊敬する姉から受け継いだ？刃  
……雪片式型が激突っ!!

ガッ!! チリチリチリチリ……

「（やっぱ、当たり前負けするかっ?!）」

俺はここで理解した……今の白式のもうひとつの弱点を。

圧倒的なスピードと必殺の零落白夜……二つ合わせて最強に感じる  
が、欠点が一つや二つあった。

一つは必殺たる零落白夜が、自分も蝕む諸刃の刃と言う事と  
今みたいに当たり負け……鏢迫り合いに向かないのだ。

実際、模擬戦で燕とやり合ったらアッサリ負けた。

零落白夜で切り裂こうとしたら、展開していない実体剣の斬艦刀で  
で零落白夜の刃を受け止められ、そのままバツサリと斬り潰して終  
わり。

零落白夜は、エネルギーを問答無用で切り裂くが、逆言えばエネ  
ルギーは干渉して単なるエネルギーの無駄食いになる。

だから、実体剣のまま斬りにいくと、今みたいに『軽い』白式は簡  
単に受け止められる。

空中戦での重さ（質量とも言う）はパワーになる。

だから、鈴のISみたいに重装甲パワー型には意外と相性が悪いの  
だ、白式は。

だからこそ、覚えたものもあるのだけだな。

イグニッション  
【瞬時加速】

千冬姉にこっそり教わった切り札。 出しどころさえ間違わなければ、代表候補生に迫る事が出来る博打の如し切り札。

「（だけど・・・まだ、賭けるべきタイミングじゃない）」  
「落ちなさい……一夏っ！」  
「な、ありがよっ?！」

間合いを空けたのが仇になっちまった。

鈴が左右に持っていた青竜刀を柄で連結すると、青竜刀は両刃剣に早変わり。

チアリーダーが、バトンを舞わすように両刃剣……両刃青竜刀を振り回す。

ヤバイ、アレの意味は分かるぞ……アイツ、あんなもんぶん投げるつもりかよっ?！

「往生しろや、一夏あっ?！」  
「っつ?！」

鈴は、力任せに両刃青竜刀を投擲しやがった。

アレに当たるのは不味い……落ち着け、俺と白式なら……やれるっ！

「当たってたまるk……がっ?！」

「ふん、甘いわね一夏……杏仁豆腐よりも甘いわ。」

な、なんだ……確かに、青竜刀は避けた筈だ。  
一体、何が起こったんだ？

side out

side 燕

「おお……面白いまでに動揺してるよ、アイツ」

「あの中国製第三世代型の特殊武装……初見殺しの武装ですわね」  
「な、何が起こったのだ……一体」

篠ノ之が、解説プリーズと言わんばかりに此方を見てくるな……  
しゃあない。

解説役が居ないから、特別にやるか……オルコットが。

「よし、任せたぞ。オルコット」

「むう……まあ、良いですわ。さて、篠ノ之さん。『空間圧縮』と  
いう言葉に聞き覚えは？」

「さすがに、私も分かるぞ……確か、一部の国で開発中の技術で、  
周囲の空間を圧縮し、固める技術……だったか？」

「なら、話は早いですわね……あのISの見えない攻撃の正体は『  
衝撃砲』。中国で研究中の特殊武装ですわ。」

「付け加えるなら、アレには俺のエクスパインに使われている、テ

スラドライブの簡易版が両肩の非固定部位に搭載されているようだな。だとすると、より厄介だ。」  
「「???」」

最近、テスラ・ライヒ研究所から発表された反動推進機関『テスラドライブ』。

重力制御と慣性制御を行い、高い効率で推進剤を焼く事で、今までより少ない量の推進剤で、今まで以上の距離の飛行を可能にした画期的な推進機関である。

ここ近年まで、スペースノア級やヒリュウ級のような戦艦にしか使われなかったが、ここ最近のEOT解析による、技術のブレイクスルーが激しく、非公式ながらも人型機動兵器に応用された…話を戻そう。

なぜ、俺がテスラドライブを使った甲龍の『衝撃砲』が厄介と思ったのか、意外とシンプルだ。

『見えない砲身で、見えない砲弾』を撃つからだ。

テスラドライブを応用した技術に、『T テスラドライブ ドットアレイ』というものがある。

テスラドライブの持つ、重力制御と慣性制御により、質量作用点の集合体であるフィールドを形成するのだが、これがまた反則的なのだ。

使い方によっては、見えない砲身を作れるのだ。

そう……丁度、甲龍の衝撃砲のようにな。

「見えない砲身に、見えない砲弾……見たところ、砲身の可動範囲は左右に180°、上下360°。死角は真つ正面と真後ろか……なんだ、何とかかなりそうだな」

「しかし、見えない攻撃をどう捌くかがネックですわ」

見えない攻撃ね……勝負は、凰が一夏をテンパっている内に仕留めるか否かで決まってくるな。

見えない攻撃でも、それが戦いを制する訳じゃない。

「一夏の奴、攻撃の範囲に気がついたみたいだな。後は……気合いとどこまで踏み込めるかのチキンレースだな」

「一夏……」

回避軌道に、無駄が減ってきたな……白式必殺の零落白夜の燃費の悪さも折り込み済みだろう。

さつきから、実体剣の状態で衝撃砲をいなししているからな。

だからこそ、ここからが正念場になるだろう。

一夏が勝つ為には、零落白夜による確実な一撃で仕留めなければいけない。

対して、凰は衝撃砲で削りきれば勝ちだ……あの余裕溢れる様子なら、本人もそう考えている筈。

「さて、楽しくなってきたな……見てる側からすれば」

「そうですね……見てる分には、中々楽しい状況ですわ。ここから逆転すればドラマチックですし、しなくても予定調和ってところでしょうか？」

「なんとも気楽な……いや、それくらいに考えたほうがいいのだな、うん」

相手は中国の代表候補生で、おまけに数に限りのあるISを一機を専用機として与えられているほどの相手。

冷静に考えれば、ぽつと出の一夏が勝てる道理は皆無である。だが、だからと言って諦める道理も無いのだが。

「む……一夏が仕掛けるぞっ！」

「泣いても笑っても、これが最後ですわね……」  
「……？」

なんだ、この感覚……前に何処かで……？  
待て、思い出せ……前に何があった？

確か……二年前、だったか？  
エアロゲイターと初めて会ったあの時に似た感覚がする。  
まさか……まさかっ？！

「篠ノ之、オルコットっ！　急いで避難しろっ！！」  
「「??？」」

ドッ、ゴオオオオン……

アリーナのシールドが割れて、何かが入ってきた。  
シールドを割ったのは、巨大な蒼い雷。  
入ってきたのは、三つの流線型をしたひし形に近いナニカ。  
……ヤバい、下手したら誰かが死ぬっ！

『何か取り込み中だったようだ……悪いが、ヒュッケバインを出してもらおうか?』

蒼い装甲に黄色いライン……ゲシュペンストに近いフォルムだが、ゲシュペンスト以上に攻撃的なデザイン。

『おっと、名乗り忘れていたか……俺達は……いや、インスペクターだ。』

これが、俺の……俺達のインスペクターとのファーストコンタクトだった。

．．．to be continued



## 第十二話 First Contact（後書き）

凰エ．．．な回でした。誰かを立てれば、誰かが落ちる。  
何とも嫌な道理だなチクショー。

更新に関しての月並みな言い訳ですが、大学のガイダンスや健康診断、中間管理職紛いな立場故に、混乱中など含めて、更新が遅れた事をお詫びします。そして、アクセスや感想等、ありがとうございます。

ご意見やご感想、ここの字や言葉の使い方違うよゝ等の意見もドシドシ募集中です。  
次回もお楽しみに．．．

## 第十三話 その名は

side 一夏

勝つための絶対的な方程式があるとすれば、それは圧倒的な機体性能か、隔絶された努力くらいなものだ……燕がよくいつていた言葉だ。

鈴の攻撃に対して、頭を冷やし、よく観察するところから始める。白式のハイパーセンサーは、ナニカが着弾する前に、鈴の使うISにある、両肩の非固定部位が開いた瞬間に空間の歪みを感じている……もしかして、見えない攻撃って、某猫型ロボットに出てきた空気砲みたいな奴なのか？

なんにせよ、からくりはなんと無く分かってきたぞ……後は簡単だな。

問題は、あの二本の青竜刀だ。あれがある限り、零落白夜による一撃を叩き込むのは絶望視した方がいい。

頭はクールに、心はホットに……よしっ！ 鈴の奴が焦れて青竜刀を投げてきやがったなっ！！  
瞬時加速で一氣に決めてや

ドッゴオオオン……

「な、なによっ?！」

「雷……でも、なんで?」

『何か取り込み中だったようだ……悪いが、ヒュッケバインを出してもらおうか?』

「いきなり現れて、おまけに挨拶の一つも無しなんて上等じゃないっ……!」

やたらと、喧嘩腰の二人に何処かキョトンとした青い奴は、ああ  
そつえば、と大袈裟にリアクションを返し、バカにするように答  
えた。

『おっと、名乗り忘れていたか……俺達は……いや、インスペクタ  
ーだ。』

「インス……ペクター？」

『そうだ、記憶したか？　だが、貴様らには関係のない話だ……も  
う一度だけ言う。ヒュッケバインを出せ。そうすれば……命だけは  
助けてやるよっ！』

「……っ？！」

青い奴が、ライフルらしき物を撃ってきた……セシリアの使うラ  
イフルよりも高い威力のそれは、鈴の右肩の装甲を破壊する。

「鈴っ！」

『どうした、ヒュッケバインっ！　早くしないとこの二人の骸が転  
がるぞっ！』

「……っ……こいつ……」

頭に血を上らせるな

不意に、頭に響く声がした……頭に直接語りかけられてるようで、  
少し気持ち悪かった。

だけど、何故か聞いたことがある声だった。そう、確か……そう、

ISのプライベートチャンネルだったか。  
そんな名前の機能だった気がするな。

話を進めるぞ……ハッキリ言つて、お前ら二人が束になつても青い奴には敵わない。

多分、奴の目的は俺だ。

下手に刺激して、話を拗れさせるなよ？

何か、暗にバカにされた気がする……色々と聞きたいが、そんな事より気がついたのは、青い奴から聞こえた『男の声』だった。

あのISらしきものは、男ですら使えるのか、はたまた通信で言っているだけなのかは分からないが、雷といい常識で図つていいレベルじゃないのは『頭では』わかる。

何も難しい事じゃない……むしろ、ただ黙つて傍観していればいいのだ。

相手を刺激しないように、奥歯を震わせて縮こまって入れれば構わないのだ。

だが、一夏とて男だ……男に産まれたのだ。

待機            やりたくない

後退            あり得ない

突撃            ナンセンスだ

早い話が、なんだかんだで真剣勝負を不意にされ、イラついているのだ。

自分の乗り越えたい目標に戦力外通告されたのだ。

これに憤怒しない男など、いるものか。

だからこそ、勝てぬかもしれぬが拳を握り、剣を握る。

否、剣を執った以上は勝つ。勝利以外はあり得ない。

だから、いつの間にか手に持つ剣を……雪片式型を構えていた。

「意味わからねえよ……」

『？ ほお、大人しくつもりはないと？』

「当たり前だろうっ！ 行きなりやって来て、なんとかバインを出せだど？ 察しろと言う方が無理だなっ！」

『そうか、なら……しょうがないな』

青い奴が、ふと盾を持っていない方の手をあげる……すると、今まで隕石だと思っていたものが変形し、蜘蛛のような姿になる。

『俺が戦っていたら興醒めだからな……コイツが相手をさせる。コイツに勝てないようじゃ、話にならないからな。相手をしてやれ、レストジェミラ』

「やっべー！」

隕石が変形してロボットになったのも驚いたが、それ以上に早く、完成度が高いのに驚いた……国防を担う無人兵器『リオンシリーズ』なんかも違う、歩行による高速移動。

タイヤなんかに頼らない、足による移動で、地上スレスレに飛ぶ白式に少し劣るくらいの速度の移動、という非常識な状況、故に一瞬呆然としてしまう。

いや、台所とかに出る黒い悪魔Gを連想したのもあるが、思考を投げ出してしまった。

気がついたら、壁に叩きつけられていた……今日は吹き飛ばされていた。

「一夏っ?!」

「っ……っう、何が……」

黒い奴に面こそ食らったが、油断していた訳じゃない。

近寄れば雪片で斬るだけだし、他なら白式の機動力で振り切り翻弄し、雪片で斬るだけ……なのに、黒い奴はいつの間にか、蜘蛛のような姿から人のような姿に変わり、手に持つ両刃剣を振り抜いていた。

『やっぱ、学生じゃこの程度か……しょうがないか。ヒュッケバインっ！ 早く出てこないと、学生二人の内どちらかが死ぬことになるぞっ!』

死ぬことになる……？

鈴か俺のどちらかが死ぬって事かよ？

何だよ……そもそもなんだよ、ヒュッケバインって……

side out

side 燕

「な、雷に隕石だとっ?!」

「い、いえ……きっと隕石が雷を出しながらにきまっていますわ……」







ダダダダダダッ！！

「燕さん、もう目の前まで敵がつ！？」

ガッコン……キイイイン……

初弾のEパックからエネルギーが抽出され、グラビトンライフルの銃身内部にマイクロブラックホールが形成され、後はトリガーを離せば撃てるようになるっ！！

『グラビトンライフル……デッドエンド・シュートっ！！』

ド、ゴオオオオオッ！！

はぜる壁、吹き飛ぶ床……グラビトンライフルから放たれたマイクロブラックホールは、敵を食いつくし、アリーナの廊下を重力と真空波でズタズタに破壊し尽くした。

後ろにいたオルコットは、ポカーンとしていたが、俺が走り出すと同時に追隨する。

『敵が来ない内に進むぞ……呆けるのは後だ。』

「ま、待ってくださいましっ！」

まずは、管制室……次に一夏達のところに、行かないといけ  
ないのか……

一夏に下手な暴れ方はすると言ったものの、時折響く轟音からして、多分死にかけていると思う。  
やれやれ、世の中儘ならないモノだ……

side out

No side

アリーナの廊下をかけている少年がいた。

妹に誘われ、興味本意で見に来たIS学園行事のバトル。

自分が好きなプロレスみたいな、血肉がぶつかり合うような暑苦しい雰囲気はないが、ISバトルはISバトルで一種の清涼さを感じ、少年は悪くないと思っていた。

だが、そんなバトルに……喧嘩に乱入者が現れた。

青い鎧のソイツは、喧嘩に乱入するどころか、少年の妹を怯えさせた。

顔に出さない気丈な彼女だが内心、正体不明の敵に怯えを感じていただろう。

現に自分ではなく反対側の友人にすがり付いていた。

少し寂しさを感じたが、そうなるように仕向けたのは自分……後悔は無い。

だからこそっ!!

「いくぞロアっ！ 他人の喧嘩に手を出した不届き者をぶん殴りになっ!!」

『いいだろうっ！』

少年は、心中で撃鉄を上げ、集中をする……走りながらその姿は、なんとも落ちて着いて見えた。

「バーナウ…レッジ・バト…ファイター、ロアっ!!」

何かの呪文だろうか……少年が叫ぶと同時に、少年の姿は学ランから、真っ赤なプロテクターを見に纏う真っ赤な戦士に変わる。彼の名は『ファイター・ロア』……世界の平和のために戦う、戦士の魂を受け継いだ少年……いや、男の姿だ。

．．．to be continued

### 第十三話 その名は（後書き）

今回の参戦作品

『スーパードボット大戦OG外伝』より・・・ファイター・ロア

バンプレストの、スパロボ語るなら名前くらい知つとけとか言われる『ファイター・ロア』です。

ジ・インスペクターで声あり出演＋未完のコンパチブルカイザーを見て、鼻水吹いた方もいる筈……筈。

正直、アインストとして現れたグレート雷門以上に驚きました……まあ、その後現れた銀河最強のフリーターにより、私の頭からはグレート雷門の名は吹き飛びました。

OGsで、雷凰フラグ？ DGG三号機？の出番来たこれ？

……ぐふう、以上、カツカツのカピカピに乾いた状況でお送りしました。

リア充的な意味合いではなく、中間管理職的な意味合いです。人間じゃない彼女が欲s（ry

感想に誤字の報告等、お待ちしております……駄目だ、頭ふらふらする。

## 第十四話 赤き巨人と蒼き凶鳥

side 燕

辺りの惨状を見ながら、エクสบイン式号機に設けられた胸部のブラックホールエンジン用の給塵口のフィンが微かに動かし辺りの塵を取り込み、発電を始める。

こういう時に、エクสบイン式号機の欠点が浮き彫りにされた感じがする。

まず、ブラックホールエンジンはちょっとした塵なんかを取り込んでエネルギーに変換するのだが、逆にそれがないと発電そのものが出来ない。

これに関しては、グラビトンライフルの掃射で大気中の塵を増やしたから、今は問題はない。

次に、背中の翼型テストドライブが狭い室内では展開できずに、十分な推力が出ない……早さが足りない。

これに関しては、L5戦役以降に、凍結から解禁されたATX計画の新型機『ビルトファルケン』の試作部品の運用データ採取の為に、暫くは変えれない……宮仕えは辛いよ。

普段の半分以下の鈍足な推力で頑張り、ビルトビルガーに採用予定のM90アサルトライフルで、道中の敵を掃射し、オルコットのスターライトMK ?で残りを倒していく。

彼女は、俺に当てないようにするためにストレスを感じているだろう……だが、部屋までもう少しだから頑張ってもらおう。

「み、見えて来ましたわっ！」

「気を付ける……中に入られたら、人を辞めた織斑先生はともかく、ISの無い唯の山田先生は、大変危険だ。俺が引き付けるから、

オルコットが中を頼む……やれるか？」

「私を誰だと思っっていますの？ わたくしにかかれば、このような雑兵など……」

瞬間、ブルーティアーズからビットが展開。

四基を器用に操り、管制室に群がる蜘蛛型ロボット達を蹴散らす……

…『移動をしながら』である。

『へえ、オルコット……ビットを移動しながら使えるようになったのか？』

「ええ、完璧ではありませんが、その内にライフルとの平行使用もモノにしてみますわ……燕さん、人は日々成長するものでしてよ？」

『そのようだ……背中を任せるぞっ！』

頼もしい事に、彼女は日々隠れて特訓が何かをしているようだ……

…悪くない。

友が成長する姿を見るのも、それにかられて進化を求める自分を感じるのも含めてだ。

エクสบインの、ふくらはぎに当たる部分の装甲が一部展開、中から重力波を刃とする『ロシュセイバー』を抜いて刃を展開する。

今こそ、存分に戦う時だっ！

side out

side 吼太

走る、走る翔る駆る……道はロアに任せて、につくき青い奴を叩きのめしにひた走る。

そして、今日の前にデカイ扉のある部屋にたどり着いた。

『この扉だ……この扉を破壊すれば、アリーナにたどり着ける筈だ。』

「ナイスだ、ロア……さあて、他人の喧嘩<sup>ひと</sup>を邪魔するは許せないよな？」

『全くだ、同時にスポーツマンシップの分からない奴らも、俺は嫌いだ。』

ある日突然、巡りあった俺と『ロア』……もはや、友人とも戦友とも言える仲の俺達は、冗談混じりの話をして、体をほぐす。

分かっていても、体は強張る……こっから先は、デカイ喧嘩だ。相手は雷を使うような半端ない奴ら。

さいきよーの兵器と呼ばれているIS？を圧倒するから、油断なんかしねえ。

「いくぜえ……バーナウ・ファア・ドラグっ！！　つけえっ！！」

コウタの……ファイター・ロアの額にあるクリスタルから、炎で出来たドラゴンがファイター・ロアの意味に従い、巨大な金属の扉を食い破り、外の青い奴等のしたっぱの一匹を食いちぎって消える。

「てえやんでえっ！ 他人の喧嘩を邪魔する奴ア、この俺様……フ  
アイター・ロア様が許さなえっ！」

まずは、名乗りを上げないとな。

アンセスターだが、インスペクターだが知らねえが、笑子を怖がら  
せた奴等は許さねえっ！

side out

side 一夏

敵に吹き飛ばされて、俺の体を蝕んだのは、痛みでも恐怖でもな  
く、『羞恥心』だった。

結局のところ、俺は井の中の蛙だったのだ。

越えたいと思う壁を越えるために、幼馴染みと切磋琢磨した守り  
の武術を捨て、安易に攻めの武術を学んだのに……

結果はこの様だ、越えるどころか、無様な姿を晒している。

やっぱり、俺じゃ駄目なのか？ あの人の様に……燕の様に殺す  
為に剣をとらないと駄目なのか？ 殺さないと、誰かを守れないの  
か？

ああ、目の前に黒い蜘蛛の脚が、振り上げられているのに体が動  
かない……ISの絶対防御が働いて今は死なないかもしれないが、  
『ヒュッケバイン』とやらが現れたら俺を餌に使うのだろうか？

ズ、ドンッドンッドンッ！



「諦めてんじゃないわよ、バカー夏っ！」

「り……ん？」

「全く、私が考えた作戦は言う間もなくおじゃんにするは、向こう見ずな性格は一年前と変わらないわね……ああもっつ！ あんた邪魔よっ！！」

ズドン！！

見えない弾丸で、蜘蛛のうちの二匹を仕留める鈴……代表候補生は伊達じゃないってか？

「そうよ、その顔よ……下らないジョークを考えているくらいがあなたの頭にちょうど良いのよ。」

「……？ っ？！ ひでえな、オイっ？！」

鈴のおかげで、調子が戻ってきたな……流石は、一年半もの間、体育会系のマネージャーを勤めていた事はある。体が活力を取り戻し、雪片を杖代わりに立ち上がる……残す蜘蛛野郎は二匹。

多分、てか完全に無人兵器だがなんとかなるだろう……青い奴が静観しているが不気味だが、やるしかない。そう考え、構えをとった瞬間、奴が現れた。

『バーナウ・ファー・ドラグっ！ っけえ！！』

グオオオオオオオン！！

最初の時、鈴が現れたピットから、今度は炎の龍が現れる。  
ソイツは壁を食いつくし、その近くに居た蜘蛛野郎を噛み砕く。

「てえやんでえっ！ 他人の喧嘩を邪魔する奴ア、この俺様……フ  
アイター・ロア様が許さなえっ！」

赤いアーマーに青い髪……そいつの周りに揺らめく炎。

ISの砲撃に悠々と耐えるピットのハッチを破壊するだけでは無く、その先にいる蜘蛛野郎を食いつくした炎の龍を出したであろう奴は、なんつうか……粹な奴のようだった。

「負けて……らんねえな。」

「……………夏？」

「ここでへばったら、カッコつかねえよ。 うっし、気合い入ったっ……！」

雪片を杖代わりに立ち上がり、そのまま雪片を構える。

正直、零落白夜を発動する余裕は余りない。

白式も分かっているのか、ハイパーセンサーの端っこの部分に『零落白夜可能時間 約一秒』と表示している。

「ああ、鈴……悪いんだg」援護してあげるわ。生憎、頑張る奴をバカにする趣味は「無いんだろっ？ 全く……」

どうして、俺の周りの女はイケメン揃いなのかね？

箒や千冬姉、鈴と言い……不言実行というかなんというか、言葉に出すのが、愚問に思えてくるのだ。

だからこそ、あぐらかいて寝っ転がっている場合じゃない……見に纏うのは白い鎧、手には姉から受け継いだ雪片。

負けてやる通りは、無いだろう……ぶっちゃけ、雑魚らしき蜘蛛野郎にボコボコにされたが、気にしてはダメだ。

「その粹な奴……手を貸すぜ。」

「……へっ、足ひっぱんじゃねえぞ？」

声は、同じ年くらいか……あれだな、最近是世界の不思議が大局してやってくるな、全く。

やるしかない、生き残るには闘うしかない。

青い奴の稲妻なんか食らったら、絶対防御関係なく一瞬で黒焦げに炭化するな……間違いないな。

コレは、鈴の援護に期待しないと……まともに近づけない自分だけが恨めしい。

「鈴……悪いけどしょうがないわねえ……任せなさい。代表候補生の維持って奴を見せてやるわっ！」……助かる。」

背中は、コレで安心だ……蜘蛛野郎は居ない。余裕を気取って

いるのか、青い奴は無防備だ。

やるなら、一発こっきりの零落白夜。

さて、ここが俺の『賭け所』かね？

side out

side 燕

斬る、伐って切って斬りまくる。

手には刀身を短くしたロシユセイバーと、コールドメタルナイフを持ち、管制室を狙ってくる敵……いや、ブラックホールエンジンを狙ってくる敵を切り裂く。

片耳に挟んだ、ヒュッケバインがどうかの話……背中から、汗どころか血が吹き出るかと思った。

ヒュッケバインとは、エクสบライン式号機につけられる筈だった名前だ。

エクสบラインは、式号機は特にヒュッケバインの次世代機開発の大事な布石らしい。

今、月でAMのAMガンナーとAMボクサーとのフィティング作業中、アーモリアルの号機は安全性を考慮し、バーソナル次世代型PTの標準的な動力を目指して開発された『プラスマ・ジェネレーター』を搭載され安定性の高い仕様をとっているが、式号機は遠慮無しにブラックホール・エンジンマシを積みやがった。

それこれも、補助MMIである『T-LINKシステム』による制御を成功を俺がしちやったのが始まりなのだ。

ISの秘匿回線をジャックし、オルコットに繋げる……悪いが、ここから先は俺の『仕事』なので、我が儘を通してもらう。

『敵残存機影確認されず……か。オルコット、管制室の防衛を任しても大丈夫か？ 再襲撃に備えてくれ。暫くしたら、学園の最高

戦力様が来るから安心はしている。』

『……納得はいきませんが、わかりましたわ……』

『稲郷君、まさか一人で行くつもりですか?! 正体不明機が増えましたが、味方みたいですが……生徒である貴方が態々行かなくとm』スイマセンが山田先生……私は生徒である以前に……』

軍人なんですよ……何処までも、民を護る刃であり、敵を滅ぼす炎なんです。

だから……俺は行きますよ。

地獄だろうが何処だろうとね。

s i d e   o u t

青い機体に、迫る一夏とファイター・ロア。

刃と拳が青い機体の盾に到達しようとした途端、黒い何かが目の前に現れる。

「ぐあっ?! な、なんだあっ?!」

「さっきのは……ケホッ、蜘蛛野郎か? なんで、いきなり?」

突然現れた、蜘蛛型ロボット……レストジェミラの爆発に巻き込まれた二人は、少し後ろに吹き飛ばされるが、その程度で参る二人ではない。

『手こずっているようだな、メキボス……野蛮人共の玩具相手に何時まで遊んでいるつもりだ?』

『お前か……ちっ、ヒュッケバインが出るまでの暇潰しのつもりだったが、お前が来たならタイムアウトらしいな。恨むなよ、お前ら』

一夏は、背中から嫌な汗が吹き出るのを感じる。

それがISスーツに染み渡り白式に伝わったのか、腕部の締め付けが若干強く感じる。

しっかりしろ、屈するな、前を見て戦え……そういつている気がする。

「やつべえな……マジでやべえ、勝てるのか俺達?」

「勝たなきゃダメなのよ。そんなのもわからないの、バカ一夏」

「そういうこった、出し惜しみもしてもらえない……か?」

まだ、完成してないらしいがな……と呟き、男ファイター・ロアは天に指を指す。

「来おい……ロボオオオツ!!」

ゴ、ゴゴゴゴゴゴゴ……

「な、なんだっ?!?! 地震かあ?!」

「もっ、さっきから奇想天外すぎて訳わかんないわよっ!!」

震えるアリーナ、立ち上る火炎は、ファイター・ロアにまわりつき、鎧となる。

赤い装甲、黄金の爪のようなパーツ、なによりもバリツバリな造形。設定資料でも、一際目を引いた造形のソイツはっ！！

『いくぜ、コンパチカイザーっ！！』

side ファイター・ロア

『ヴァかもん！！ コンパチブルカイザーは、まだ完成しておらん！！ 下手したら大惨事になるぞ！！』

『（んな事を言ってもよ、じいちゃん。どっちにしても大惨事になるに決まってるだろうが！！）』

『どちらにしろ、いつかは戦わないといけない……今がその時のだけだ。』

『ロア……コウタを、頼むぞ。』

ファイター・ロアは……中の人に当たる吾妻吼太は、勝手に話が進むのに軽い苛立ちを感じながらも、敵を見る。

等身が延びたのか、先程まで軽く視線を上げる位置にいた二人は、視線が隣になる位置にいる。

未完の巨人『コンパチブルカイザー』……オーバーゲートエンジンと言う動力で動き、凄まじいパワーで戦う特機級の機体。体を駆け巡る高揚感……これが、これこそが

『さあいくぜ、コンパチカイザーっ!!』  
【行くぞコウタ……まだ、戦うには早いが、戦わないと生き残れないからな。】

side out

火炎がファイター・ロアを中心に球になり、それはやがて晴れると、中から5m位の赤き巨人が現れる。

『さあいくぜ、コンパチカイザーっ!!』

特徴的な意匠で、なんというか……とにかくバリッていた。青い宝石みたいな部分や、黄金の爪のような部分まで、頭から爪先の全てがバリッていた。

『俺が、恐竜野郎を倒す……ちと、口惜しいが青い野郎は任せるぜ。』

「当たり前だろ、元々青い奴は俺の……いや、俺達の獲物だしな。なっ、鈴?」

「全くよ、コンパチなんとかとやらも早く構えたら?」  
『へっ、頼もしいね。』

向かい合う二機と三機……片や大破したピットを背にした青い騎



土と金色の恐竜、片や赤き巨人に白き刃に鋼の龍。  
ピリピリとした空気の中、ソイツはやってきた。

『グラビトンライフル……マキシマムシュートっ！』

一夏達が背にして居たピットのハッチから、突如黒い閃光が敵に向かつて伸び、恐竜に当たって吹き飛ばす。  
不意打ちなんて、ちやちなもんじやない……本気で殺しにいった一撃だった。

『呼ばれたから、直々に来てやったぞ……インスペクターさんとやら？』

『漸く、か。悪くない、貴様の力……見せてもらうぞ、ヒュッケバインっ！！』

『貴様ああ！！不意打ちしておいて無視か！！』

闘いの場は戦場<sup>アリーナ</sup>となり、混沌<sup>カオス</sup>が渦巻き始める……凶鳥は、再び戦場にやってくる。巨大な剣を携えて……

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

#### 第十四話 赤き巨人と蒼き凶鳥（後書き）

フーハッハッハア！！ 大学の前期は、正に地獄だぜ。  
いえ、言いたいことはこれだけです。

感想や意見、誤字報告などお待ちしております。

## 第十五話 その剣（拳）は誰が為

戦いの流れは、コンパチブルカイザーとエクスバイン式号機の登場により、一気に傾いた。

それは、単純に数の差だ。

大火力一（片方は、未だに未完成だが）と読んでも差し支えない二人に、高機動での強襲を得意するのが約二名……惜しむべくは、約二名程実力がよくわからない事だ。

『漸く来たか……ヒュツケバイン』

『詭弁が許されるなら、俺はエクスバインの式号機だな。だが、そんなのは関係ない……貴様はここで潰す。そこの悪趣味な恐竜と一緒に。』

『誰が悪趣味かつ！ この野蛮人めっ！』

上から、青騎士に燕、暫定名称【金竜】の順である。

金竜一（何故か、禿げたおっさんのビジョンを見たがスルーした）は、悪趣味と言われてキレているが青騎士は然り気無く……本当に然り気無く視線を明後日に向けた。

おい、仲間に悪趣味と思われているぞ……

『デカイのは俺と……あぁとすまん？』

『ファイター・ロアだ。で、この姿はコンパチカイザーだっ！』

『俺は、ツバメ・トウゴウ少尉だ……ツバメとでも呼んでくれ。この姿はエクスバイン式号機だ。悪いが、デカブツの相手を一緒にしてもらいたいだ。二機連携……あぁと、コンビでの戦いが長

いんでな。　だれかと一緒のが戦いやすい。』

燕は、確実に相手を『仕留める事』だけを考えていた……その時にかかるリスクを考えても、長い目で見た事を考えていた……具体的には

学生二人と敵エースの命……どちらが重いか？

燕は、この考えに行き着いた瞬間に、頭から答えを弾き出す……前々から思っていたが、自分は些か過激な考えに染まっているようだ。

やるなら絶対的に勝ち、皆助けるくらいの気合い出しやがれと自分を鼓舞し、持っていたグラビトンライフルを念動斬艦刀に切り替える。　一方的に倒すとは言えないが、侵略者に情け容赦なんて、ミジンコも持ち合わせていない。

エクสบイン式号機のバトルモードを、『トリアル』から『コンバット』に切り替える。

途端、ブラックホールエンジンが唸りを上げて機体にこれまで以上のダメージを、すべて無視するかのような唸りを上げる……

『一夏、凰……生き残ることを考える。　誰かが自身を待っている、と思っているなら足掻いてでも生き残れ。　だから……』  
『ごちやごちやとやかましいわ、野蛮人っ！！』　『っち、各機散開っ！！』

金竜の胸から、砲身が現れて砲撃を発射する……青い光線はアリ

「ナの壁を砕き、その威力をありありと示す。全身装甲故に汗は  
見えないが、内心戦慄を禁じえない。」

アレをまともに受けて無事なのは、ヒリュウ改という戦艦にいる『  
ジガンスクード』程の特機くらいだろうと辺りをつけておく。

こちらら発砲金属っていう中々に脆い装甲なんだぞ、と呟きなが  
ら念動斬艦刀を蜻蛉の構えで敵を注視する……

叩き込むなら、最速の一撃を……狙うは、大将首で青騎士だっ！！

『いくぞっ！！』

『上等だ……ヒュッケバインっ！！』

展開されある種のチェーンソーのようになった念動斬艦刀と、高  
周波ブレードだろうか？

曲がりなりも高速振動した物体同士のぶつかり合いは、欠けた部分  
が火花として飛び散りながら鏝迫り合いに持ち込まれる。

物事はシンプルに考えるべきだ……俺が二つの目標をぶっ飛ばす。  
斬艦刀を振るうために調整を施されたエクسバイン式号機の腕力は、  
伊達じゃない！！

刃を受け流すように、力を逸らすように傾け、青騎士の体勢を崩し

『斬艦刀…雷光一閃っ！！』

『くっ』『さっせんぞっ！！』

ギィン…ヒュ、ズッゴン！！

上段で振りかぶった斬艦刀は、金竜のハサミのようなものにより

振りかぶった状態で止められ、金竜の尾で薙ぎ払われ、エクสบイン式号機は吹き飛ぶ。

吹き飛び、アリーナの壁に打ち付けられたエクสบイン式号機の右腕はひしゃげ、火花を散らしていた。

痛々しく裂けた装甲からは、何故かオイルのような液体が血のように溢れ、『機械の体』が覗いていた。

『ふん……仕留めきれなかったが、野蛮人の癖に生意気に』

『そんな、手加減でもないのにデカさとパワーまかせな戦い方しかしてない貴様に、野蛮とか言われたくないっての』

『「」……以下同文「」』

『ちい！ 貴様らにこのガルガウの美しさが理解できないか……力こそ至高、力こそ偉大！ これだから野蛮人h……メキボス、何故視線を反らす！』

『いや……大丈夫だ、問題ない（許せ、とは言わんが確かにお前が言うなって感じはするか）』

インスペクターとやらも一枚岩というか、中々に素直というか……以外と偏った教育されてんのかとか、的はずれな事を考えている燕。

だが、その片腕はえぐれており、オイルのような色の血を流し、垂れている。

その様子に一夏は目を見開き、鈴は手を口にあて嗚咽を噛み締める。当事者の筈の燕は、呑気な様子である。

『さて、どうしたものか……ちっ片腕が絶望的だな。パージっと』  
「「」……？ ぎ、ギヤアアアア？！？！」「」

場の空気は、燕が片腕を引き抜いて一変した。

阿鼻叫喚と言うのだろうか……最初のシリアスな空気を返せと言いたくなる雰囲気である。

そして、こんな状況でもマイペースというか胆力があるのだろうか、コンパチブルカイザーとかしたファイター・ロアは冷静に敵を見ている。

どうやら、青騎士はともかく、金竜　ガルガウとかいつていた気がする　　は、動揺しまくっていた。

『さて、片腕一本くらいは軽くなったか。　ファイター・ロアだったっけ？　連携して金竜……ガルガウを潰そう。　青騎士は多分片方潰せば下がるタイプの奴だ』

『何を基準に判断したか知らないが、良いぜ……その案乗ったっ！』

「いや、腕っ！　腕は大丈夫なのかよっ？！」

「§@&#%£¢！　（言葉になっていない悲鳴）」

ガシユツという機械的な音をたてたと思うと、燕の……エクスバイン式号機の破損した片腕は肩アーマーごと外れ、アリーナの大地に乾いた金属音をたてて落ちた。

それを何でもないように振る舞う燕にファイター・ロア、どう見ても『人の片腕が抜けて落ちた』様に見える光景に目を白黒させる――夏と鈴……ふむ、実にカオスだ。

『オタオタするな、順応しないと……死ぬぞ』

「り、理不尽だぁ……………」

『俺が知った事か。さあて、クライマックスといこうか…………ファ  
イター・ロア?』

『おうとも、一気に行こうぜっ!』

エクสบインとコンパチブルカイザーは拳を構え、姿勢を低くし  
突撃体勢を取る。

ガルガウは、迎え撃つために構えて青騎士は、本気で傍観を決め込  
んだみたいだ。

目的は…………この場にいる機体データの採集だろうか。

だが、そこまで気が回せる状況ではないと判断したのか、燕は無  
視を決め込んだ。

『一気にいくぞ、T-LINK…………』

『スパイラルウ…………』

『『ナツコオツ!』!』

誰が予測しただろうか…………コンパチブルカイザーは、右腕を高速  
回転させながら『打ち出し』でガルガウの胸部を砕き、エクสบイ  
ン式号機は残った左腕から翠色の光の刃を伸ばし、ガルガウの腹部  
を貫く

ガルガウに対して一気に近づく二機…………片や打ち出した腕を接続し、  
片や腕から出した光の刃を引き抜くと、情け容赦ない攻撃をする

『ガウン…………』

『カイザー…………』



本当に、本当に情けや容赦が一切ない……エクสบイン式号機のゴーグル、コンパチブルカイザーの胸部のクリスタルに光が収束し、破壊力を持ったエネルギーに変換する。

ガルガウは逃げようとするが、最初の攻撃が効いているのか機動が鈍い……質量で持つて戦う機体の性だろう。

『ジェノサイダアアアア！！』

『バーストオー！！』

ガルガウに突き刺さっていたスパイラルナックルは、二本の破壊光線が突き刺さる前に離脱し、コンパチブルカイザーの腕に戻る。破壊光線……『ガウンジェノサイダー』と『カイザーバースト』は、ガルガウの大質量をアリーナの壁に叩きつけ、ガードを無理矢理破壊し、無防備な姿を晒させる。

『とどめだっ！！ やっちまえっ！！』

『鈴……任せた！』

『ああ……どうなっても知らないわよっ！！』

燕はとどめを一夏に任せていた……具体的な方法は問わなかったが、ふと後ろを見た燕は凶太さに定評が無いわけではないナニかが切れそうになった。

信じられるだろうか？ 仲間に全力で背中を攻撃させる奴を……流石の燕も、白式に変な機構が少ないことは知っている。



（これで落ちなかったら、素直に撤退戦を視野に入れるか……）

切れる札は切りつくし……ては無いが、誰しもがただでは済まないのは否定できない。

ただでさえ裏技で積んだブラックホールエンジンをここで失うのは、この場所を失うのと同定義なのが笑えない。

ブラックホールエンジンは実用化すればその凄まじい出力で、費用をあっという間に取り戻せる……制御ができればの話だが。

なんにせよ、そんなのは自爆か外部的要因でしかない……あれ、意外とヤバくないか？

「はあ……はあ……どうだ、ざまあみろっ!!」

「一夏、一日下がるわよ……あんたボロボロじゃない、全く……」

とりあえず、ISの二人組を下がらせないと……二人共、かなりヤバイ状況だからな。

試合途中に今回の襲撃……生きているのが奇跡と考えるべきだが、  
ん？ 高エネルギー反応？

「野蛮人共があ……くたばれええええええ！！」

「……………え？」

side out

胸部を深々と切り裂かれ、火花を散らしているガルガウは再起不能と誰しもが判断していた

それこそ、仲間の青騎士さえもそう判断していた素振りだ

ただ一人、そんな中剣を翳した男がいた

無防備な後輩の前に身をさらし、誇りとも言える剣を翳して足を踏ん張る

『全く、損な役回りばかりだな……俺』

仮面越しのため分からないが、男はクスリと笑った気がした……

## 第十五話 その剣（拳）は誰が為（後書き）

ありのままを話すぜ……委員会の活動やイベントの根回し、必修授業の根回しで気がついたこんなに過ぎていた。

もつと言いつけると、バラバラな日時で書いたから支離滅裂な展開で申し訳ない。

特に篤さんは目立ちどころを野郎一人に喰われたからドンマイと言わざる得ない。

次回からは、ストックとかしたいからまた……長引きそうだなあ……はあ

## 第十六話 悪夢（前書き）

大分更新が遅れて申し訳ありません。

今回は、やや内政寄りの話だから山無し才チ無し気味です。

## 第十六話 悪夢

side 燕

目を開き、体を起こすと病院特有の真っ白い壁が夕陽のよってオレンジ色に染められていた……てっきり、IS学園の『保健室』に転がされていると思ったが、どうやらちゃんとした病院……しかも、個室のようだ

なんとという贅沢な……別にズフィールドクリスタルに機体が侵食された訳じゃないのにな  
そんなバイオハザードな話を頭の中で展開していると、誰かがノックをして入ってくる

俺一人しか寝ていないから、ノックとかいらさないだろうに……あ、もしかしたら看護師とか居るかもしれないからか

「兄さん……入るよ？」

「ん？ ラトか……隆聖のバカかと胆を冷やしたよ」

「に、兄さんっ?! もう起きられるの!」

「ああ、どれくらい寝ていたが知らないが……まあ、体に異常は感じないよ。腕もこの通り動くし」

そうやって、少し年の離れた妹におどけて見せる俺……少し寝違えたのか、首がひきつった感じがするが問題はない……はず、うん  
ないない

「兄さんっ！」

「おうふっ?!」

皆はタツクルをご存知だろうか？ そう、体当たりと同じ扱いされる事が多いが実際は天地との差がある

要するに、よく訓練された奴の体当たりはタツクルになるのだが、無自覚に急所を攻撃するから質悪い  
しかも、半泣きでしがみつくから直の事、怒りづらい……おい、誰がシスコンだ？

上数行は、燕の混乱を表しています。 実際のタツクルとはなんら関係はありません。

「兄さん、一週間も寝ていたんだよ？ 大丈夫？ 顔色悪いよ？」

「一週間も……か？」

「そうなんだよ、だからまだ少し寝てなきゃダメだよ？」

「りょーかい……やっぱい、眠くなってきたかな」

「ふふっ、おやすみ」

そうか、一週間も寝てたらダルい訳だよ……学校休んだけど、まあ何とかなるだろう

しばらく、寝ていよう……

A r e a     ? ? ? ?



『本当にいいんだな？』

『ああ、こいつを……ソウルゲインを頼む』

多分、夢なのだろう……目の前にいる赤毛のワカメ頭には見覚えがある……アクセル・アルマーだったかな？  
もう一人いる気がするが、姿が見当たらない  
多分、この夢はソウルゲインとやらに關係している人物の目線で進んでいるのか……なら、黙ってみてみようかな？

『コイツを……ソウルゲインを俺に託すと言う事は連邦に、ベーオウルフに仇名すのと同じ行為だ。もしもじゃなくても殺されるぞ

……こればかりはな』

『分かっているさ、分かっているからこそコイツを君に託すのさ。

ほら、行くと良い……極めて近く、限りなく遠い世界へとね』

……極めて近く、限りなく遠い世界？ まさか、これって夢じゃなくてマジである話なのか？ だとしたら、この間のベーオウルフ

ドウウウン……

『見つけたぞ……静寂を乱す者よ……』

『来たようだな……流石はキョウスケ・ナンブ、不死身と言われたベーオウルフつと言ったところか？ 何にせよ、初めから俺を殺す気で来たようだな』

『愚問だ、貴様はそこにいるだけで世界を乱す……世界を壊し、破

界する。 貴様はここで排除する』

あれ？ いつの間にか風景が変わっている？

これは、パーソナルトルーパーの中だろうか？

目の前に広がるのは、一面の荒野……何もない、何一つ命のいない  
静寂な枯れ地だ

『ここで狩らせてもらうぞ……静寂を切り裂く者よっ！！』

『ここで死ぬのは……貴様だ、キョウスケ・ナンブいやっ！ ベー  
オウルフっ！！』

いつか見た、青いアルトアイゼンと俺視点の機体がぶつかっている  
巨大な両刃剣「参式斬艦刀」の改造品「念式斬艦刀」のようだが、  
なにか違った

いつも使っている緑の燐光を放つ刀じゃない これは、真正正銘の  
「参式斬艦刀」だ

この機体の操者、かなりの腕前だ……アルトアイゼンの執拗な攻  
撃を刀身や柄で受け流したり、初動を潰して凌いでいる

『っち、小賢しい……クレイモアっ！！』

『しまっ？！』

アルトアイゼンがバックステップをし、距離を開けると肩のコン  
テナが開く……なんか、俺の知っているアルトアイゼンのコンテナ  
より大きな気がするな

まで、コンテナの留め具らしきものの裏にすらベアリング弾を内蔵してあるとかやる気満点過ぎるだろうっ！

体を襲ったのは体を貫き、時には潰す殺意の弾、この弾数……やはり、伊達じゃないか

「があ……くう……」

『静寂なる世界のために……死ね、異分子っ！！』  
イレギュラー

眼前に來たステーキに視界が埋まった途端、夢は終わった俺に視界を貸していた奴からは何か悲しむような感情と、どうしようもない理不尽に対する怒りを感じた……

「ぜえっ！ はっ はあっ はあ、はあ ゴホッ、ゴフッ！」

なんだ……あの夢っ！

まるで、いつか見た夢みたいにやたらと現実味があったけど……咳き込んだせいで喉痛い……

「わけ、わかんねえ……疲れてんのか、俺？」

とりあえず、二度寝する事にした

断っておくが、次は普通に好物を食べる普通の夢だったと言っておく……誰に言っておくかわからないがね

side out

no side

pi pi pi pi……

『……彼のバイタルは？』

『現在、比較的に安定しています。体内のズフィールドクリスタルも小健状態……問題ありません』

ここは、燕が入院している病院の一室……大型のサーバータイプのコンピュータに大量のモニターには、様々な状態が映されていたその中には、燕の体内にあるある『モノ』が映っていた……金属探知機には引つ掛からないが、それは確かに金属質な何かであった生体金属『ズフィールドクリスタル』……かつてあった大戦、L5戦役の際に感染したと思われるそれは、感染者の肉体を劇的に変異させていた

燕以外にも、パーソナルトルーパーやアーマードモジュールのパイロット達は何人も感染し、その変異に体が対応できず、物言わぬただの金属塊になっていた

燕は、そんな感染者の一人だが体の退化現象以外は何一つ問題は無かった

おまけに、その問題の退化現象も日に日に目に見えない速度で改善に近づいているのだから驚きである

『もはや、芸術と言っても良いな……何故、セトメ博士は彼を……ああ、そういうことか』

『どうかなさいました？ いきなり呟いて』

『……いや、彼の製作者は存外臆病だったんだなと、改めて思っただけさ』

悪夢で顔を歪める燕を見ていた二人の内の一人は、嘲笑するような笑みを浮かべながら、モニタールームから去る

後に残るのは、インスタントコーヒーを飲みながら兄妹のじゃれ合いを見、やれやれと頭をかく男だけだった

side out

side 燕

そこに居たのは、まさしく『燕<sup>つばめ</sup>』だった

大空を切るように飛ぶあの燕だ……俺の目の前で、モニターの向こうで鎮座していた

それもこれも、マリオン博士が呼び出され、テスラ・ライヒ研究所に來たのが始まりだ

なんでも、新型の試作機の試験データが一応完成したので試して欲しいから『来い』だそうだ

命令形なのがポイントだな……俺の周りには、癖のある女しかないなあ

マリオン博士しかり、ブラウニング少尉しかり、その他諸々はあ、ラトウーニとオルコットが癒しだな……？　オルコット？　どっかで聞いたような？　はて？

『聞いていますか？』

「聞いています、シチュエーションはデブリ地帯、ルールはデブリをあまり破壊せずにゴールまで行く……ですよね？」

『よろしい、カウント終了と同時に開始します。』

「了解…… PTX - 0010　ビルドシュピーゲル、t…… ツバメ・トウゴウ、これより

空間機動試験を開始する。」

いまは、そんな事考えている場合じゃないな

マリオン博士の機体だ、ピーキーってレベルじゃないのは既にキョウスケ中尉に聞いた

とにかく、試験専用の筐体に入り精神と電腦上のデータをリンクし、シンクロさせる

最初に目に入ったのは久しく見ていなかった宇宙空間とアステロイドベルトのようなデブリ群

このシミュレーター、現実の状況とリンクさせているって聞いたから、きっと宇宙そらはこんな感じなのだろう

「とりあえず、デブリの少ないところで思いっきり飛んでみるか」

俺はこの選択を後悔した……何故なら、この機体の特性を考えずにエクسバインと同じ感覚でスラスターとブースターを吹かしてしまったからだ

……ッドンー！

「うーっあ……」

『はあ……アルトアイゼン強化用の試作ブースターでは、出力過多でしたか。貴方には期待をしていたのですが、まあ無理はありませんか』

「アルトの出力で飛ぶとか、テストドライブじゃないじゃないですか……だけど、なんか負けた気がするので暫くやらせてください。

お願いしますー！」

『……ええ、構いませんよ。暫く、続けていてください』

この試作機……正直かなり気に入っている

俺好みなのだ、鋭角的な加速といい試作品とは言え強度のしっかりした

『ジャケットアーマー』といい『刀』を扱うものとして、これ以上の機体は

『特機』と呼ばれる存在以外あり得ないと思う

コイツを使えこなせば、あのメキボスとかいう奴に後れはとらないし、

なによりアイツを倒す為の答えに繋がる

さて、ぶっ飛ぶかー！ 俺がな

S i d e   o u t

N o   s i d e

地球連合軍部のとある会議……そこでは、予算や各国の軍部の軍事開発について話し合っていた

「ドイツの開発したシュヴァルツァ・レーゲン……A I Cの安全性は大丈夫なのか？」

「兵器としてI Sを運用した場合、安定して出来るのはデユノア社のラファールシリーズ辺りが妥当か？」

「S R X計画は一先ず凍結したが、レイオスプランと言う形で再開したらどうだろうか？」

「A T X計画の新型であるビルド・シュピーゲルか……高過ぎる機動力に目がいくが、新技術のジャケットアーマーや分割装甲には期待が出来そうだな」

こんな調子で、日夜話し合っているのだ

他にも、連合加盟国への対応や予算の割り振り、新型機や試作機への対応諸々……ある意味地球防衛の最前線である

「稲郷少尉……いや、中尉の前線への復帰はそちらではどうなっている？」

「現在、凍結中のS R X計画から稼働中のA T X計画への転属させ、I S学園での各方面への『炙り出し』を行わせています……報告書



によれば、『亡霊』は釣れなかったが、代わりに『ゲスト』が釣れたとの事です。しかし、先の戦闘でエクสบインは大破したものの中尉の神経へのドライダメージは回復し、明日にでも退院できるとの事です」

「分かった、此方でも可能な限り根回しは行う……そちらも任務を引き続き遂行するように伝えてくれ」

「了解しました。私はこれにて失礼します」

男が去る様子を、話をしていた男……ケネス・ギャレットは憂鬱そうな表情で見ていた

トレードマークのようなサングラスのせいで見えないが、その瞳は自分達が戦地に未成年者を送り出していることへの葛藤に揺れていた

「さて……私も仕事をせねばな。ああ、私だ……例の件だが、各方面へ納品を急ぐように頼む。辛いのはわかるが、敵は待つてくれないのだ……ああ、ああ。ではな」

明日来るはずの夜明けの為に、誰もが戦っている

地球の為に、民の為に戦う兵士の為に裏で戦う男たちは居るのだ…

…女尊男卑になると、それは変わらない

t o b e c o n t i n u e d

## 第十六話 悪夢（後書き）

体に未知の爆弾を抱えながらも、己の為にIS学園せんじょうに戻る燕

そんな彼に下されるサブ（つか）オーダー（にんむ）……燕に  
迫る決断とは

次回『金の貴公子、銀の兎』

……ふう、ノリで書いた次回予告。ジ・インスペクターを意識し  
て書きましたが、中々な集中して書く時間が無くて辛かったです

前半のラトと燕のイチャイチャ？はすんなり書けますが、燕の中二  
な悪夢と過去は頭捻りました……何が伏線になるか分からないからね

次回にはあの二人が登場し、IS学園編も終わりが近づきます……  
大丈夫かなあ

もしもスパロボクロスじゃなかったら……（前書き）

そのなんだ……本編じゃないんだ

もしもスパロボクロスじゃなかったら……

挫折したから止めたが、SRW OGINをみて「これだっ!!」  
と思っただけだったこの話

リハビリに付き合う気持ちで読みなり戻るなりして下さいな

\*\*\*\*\*

＊もしも、この話がスパロボ＊

＊クロスじゃなかったら＊

\*\*\*\*\*

「「どうして、こうなった?」」

とある学園で、野郎二人がぼやく……片やイケメン、片や銀髪……  
ただ、彼らの背中から漂う哀愁が全てを台無しにしていた

「久しぶりだな、第……その、なんだ、綺麗になったな……」

「……………」

作者は一夏x第派……だが、ファース党ではない……千冬会だっ  
! (謎力ミングアウト)

「たく、なあ……タルいから決闘とかやめね？ 無駄に疲れるだけ  
ぜ？」

「話になりませんわ……墜ちなさいっ！！」

「うおっ？！ 危ないぞ、レディ？ カリカリしていたら、シワが  
若くから出来ちまうぞ」

「（この人、まさか……撃ってから反応して避けたのかしら？ そ  
んな出鱈目、認められませんか！）……っ、そんな事言われなくて  
も分かっていますわっ！！」

一方的に喧嘩売られた挙げ句、某教師と生徒会長の陰謀で決闘と  
かやらされる羽目になった燕は打鉄を見に纏い、本当にダルそうに  
しながらオルコットに『帰りたい』と訴えるが却下させられて致し  
方なく交戦する

「たく、勝てないなら……喧嘩を売るなっ！！」

「そんな……私が……」

剣すら抜かず、無手で圧倒した挙げ句某援護さんの如く圧倒的な  
速さ（二段瞬時加速らしい）でオルコットを圧倒……稲郷 燕は一  
部で汚い、流石忍者汚いと言われる羽目になる

代表？ 当然断りました……この話の燕は二ト臭がする侍です

「やつほ、桂馬……久しぶり」

「か……いや、楯無かよ……めんどい帰れ」

「いいじゃない、昔からの馴染みでしょ？ おねーさんに悩みでも打ち明けたら？」

「妹と仲良く出来ない腐れ縁が鬱陶しいです、生徒会長（最初から最後まで超棒読み）」

「ごふう?!（吐血）」

桂馬とは、燕の仕事での名前……楯無という名前に近いですな。  
超奇人伝の隆馬をもじっていたり無かったり

生徒会長は一歳上の幼馴染みでした……簪ちゃんは燕の妹分、姉以上に頼りやすいのかなつきまくりました

ただ、姉妹同士スコンだったのか片や簪ちゃんは簪ちゃんは、姉さんは姉さんとは煩くて燕うんざり……愛刀飛燕の錆にしようか本気で悩んで……ん？ 姉妹DONFLAG? ないない、桂馬もとい燕は一振りの刀と言う道に殉じてます

「君誰？ 君みたいな歪な存在を束さんは始めてみたよ」

「初対面の相手によく歪な存在とか言えたな24歳くらい、見た目と頭の中身的にも完全に痛い人だよアンタ。それと、アンタの声

は日曜日8時に聞きたかったよ……」

篠ノ之束？ 何の躊躇なく毒吐くし、メタい発言をプレゼントしましたよ、燕さん

近くで織斑センセは戦慄してますよ。 何で対抗してんだよコイツみたいない眼で見えます

「セカンドシフト……いや、『ファーストシフト』か？ とにかく頼むぞ『飛燕』、今日は天使とダンスだっ！」

「……La」

無断ではなく、一夏と箒の回収ミッションでめたくそこにされて『海に流された』燕……一夏と箒達の二回戦目に復活して参戦した姿は、一振りの刀を携える浪人のようであり、蒼穹を飛ぶ燕のようでもあった

前段階で、自室にて刀のメンテナンスをしていた燕の愛刀に嫉妬した打鉄が飛燕を取り込み一つになった所からスタート

実体剣と非実体剣を使い分けたり、片手の籠手の変型してロケットアンカーになったり、腰のスカートみたいなプラットホームからソードビットみたいなの出したりと、某マンボウみたいにする気でした





もしもスパロボクロスじゃなかったら……（後書き）

初めは、習作に話を書こうと思ったのですが私がISを四巻で飽きてしまったので、無理だと切り捨てて断念

しかし、OGINをみて友人と話を煮詰めたりとでかなりマシな話になりそうだな、良し書こうと始めた本作品……今、なんとか第二章に繋がりそうな話を構築中

ISに飽きた理由？ ミリタリー臭というか、『硝煙臭さ』とか『油臭さ』が足りなかっただけでしょかね、多分

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8319q/>

---

インフィニット・ストラトス 機鋼英雄伝

2011年11月20日09時25分発行